

刊行にあたって

広島市立中央図書館長

広島市立中央図書館の広島文学資料室では、広島にゆかりの深い文学者二一名を対象に、初版本や自筆原稿、手紙類などを収集し公開しています。

その中の一人、鈴木三重吉は、明治一五年（一八八二年）に広島市猿楽町（現 中区紙屋町）に生まれました。作家としての三重吉は、七〇編余りの小説を執筆した後、童話へと活躍の場を移し、大正七年（一九一八年）には児童雑誌「赤い鳥」を主宰、創刊しました。その後、日本の童話、童謡は大きな盛り上がりを見せることとなります。

児童文学史上、偉大な功績を残した三重吉とその作品を、より多くの方々、とりわけ中・高校生を中心とする若い方々に知っていただきたいの思いから、当館では、このたび三重吉の手がけた作品一三編を選び、新たな童話集として刊行しました。

この童話集の装画はすべて、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの皆さんが、作品を解釈し、表現してくださったものです。

およそ百年の時を超え、令和を生きる若者の感性によって、三重吉の童話に新たな彩りが与えられました。その世界観を味わっていただきますとともに、本書との出会いが、皆様にとって新たな読書体験や文学探求への契機となれば幸いです。

刊行にあたりましては、三重吉のご令孫の鈴木潤吉様、鈴木三重吉「赤い鳥の会」会長の長崎龍深様、三重吉に造詣の深いシンガーソングライターの中西圭三様にご寄稿をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

鈴木三重吉童話集

*



鈴木 三重吉
(大正 6 年)



「赤い鳥」創刊号
(大正 7 年 7 月)

目
次



目次

祖父・鈴木三重吉の情熱（鈴木潤吉）	1
「鈴木三重吉童話集」刊行にあたり （鈴木三重吉「赤い鳥の会」会長 長崎龍深）	4
一本足の兵隊	5
ダイモンとピシ阿斯	19
岡の家	31
ぼっぼのお手帳	39
湖水の鐘	53
かたつむり	79
ぶくぶく長々火の目小僧	89





- 星の女 117
- 子守っ子 143
- さんげ 155
- 村の学校 177
- 少年駅伝夫 191
- ぶしょうもの 211
- 「赤い鳥」解説 221
- コラム（シンガーソングライター中西圭三） 226
- 鈴木三重吉年譜 227
- 鈴木三重吉文学碑マップ 232
- 装画にあたって 239



表紙／木原結愛

標題紙／前田悠希

目次／清山ねね

裏表紙／辻邊ひなた

祖父・鈴木三重吉の情熱

鈴木 潤吉

祖父は、日本にはほとんどなかった「童話」と「童謡」を子どもたちに届けたいという一心で月刊雑誌「赤い鳥」を創刊しました。「赤い鳥」を見ると、発行所が「赤い鳥社」となっています。大きな会社が「赤い鳥」を出したと勘違いする人がいますが、実はそうではなく、自宅の六畳の部屋を事務所として使い、集まった童話や童謡を編集して雑誌に仕上げました。そして、家族も総出で「赤い鳥」を梱包して全国へ発送していました。印刷費用や作家たちへの謝金など、借金をしてまでまかさないました。世界的な大不況（一九二九年）でやむなく一年半ほど休刊しましたが、「赤い鳥」を追って作られたほかの雑誌がつぶれていく中で、三重吉はあきらめることなく「赤い鳥」を復活させました。病に臥しながらも童話を書き、集まった原稿に目を通し、子どもたちの心に届くように書き直す作業に最期まで専念しました。この情熱と初志貫徹の姿勢には、ただただ頭が下がる思いです。

さて、あらためて祖父の童話を読みますと、何だか悲しい話が多いことに気づきます。必ずしもハッピーエンドにならず、矛盾した状況のまま、モヤモヤ感だけが残る場合もあります。実はそういった事が三重吉の童話のポイントです。私たちの日常においても、楽しいことばかりでなく、嫌な事やつらい事もあり、自分ではどうにもならない事情の中で生きていかねばなりません。不平感やストレスがたまり、無力感に陥ってしまうこともあるでしょう。三重吉はそういう現実を童話という形で再現させ、私たちに追体験させるのです。

どの童話も、必ず私たちに何らかの反応を生じさせます。それを表現したら、ただ一言「つまらない」「悲しい」「残酷だ」かもしれないし、「教訓じみた話はいやだ」あるいは「かわいらしい」「最後はよかった」かもしれないし、例えば、「つまらない」であれば、なぜそうなのか。小学生向けだからだとか、自分にとって「面白い」のは実はこういうアニメだ、ゲームだ、かもしれません。人によっては、だからどうなのさ？ こんなおとぎ話の何がいいのか？ 私たちの現実が変わるの？ つらい事をがまんしろと伝えているのか？ と言うでしょう。

童話の中に入って、楽しい場面やつらい場面を見ること、あるいは登場人物に感情移入すること、それによって先のようなプラスやマイナスの感想や反応が湧くというのは、現実が変わらずともそれだけでも意味のあることなのです。精神科医に言わせれば、それをカタルシスと呼ぶで

しょう。人によっては、実生活の上でも人間関係を見直すきっかけになったり、自分の過去の行いを反省したり、悪い事に対して勇気をもって対応したりするかもしれません。矛盾が解けないモヤモヤ感が残る場合も、その思いをそのまま受けとめていいのです。現実生活でも矛盾がたくさんありますが、それに対する心持ちなり見方はすこしずつ変わっていくものなのです。

三重吉の童話に限らず、新美南吉の「ごんぎつね」や芥川龍之介の「蜘蛛の糸」など、三重吉が選んで「赤い鳥」に載せた童話はどれも皆さんの心のひだに触れる話ばかりです。小学生向けと言うけれど、中高生の皆さんが読んでも、そして私のような七〇歳を過ぎた「老人」が読んでも、うっと考えさせるものがあります。

三重吉の童話は、言葉が古臭いとか、どこか上品ぶっているとか言う人がいますが、それは一〇〇年近くも前の文章ですから仕方のない問題で、そういった表面的な事よりも、今まで述べてきた事を念頭に置いて、一つだけでもいいので読んでみてください。そういうことなのかと気がつくことがきつとあるはずですよ。

「鈴木三重吉童話集」刊行にあたり

鈴木三重吉「赤い鳥の会」会長 長崎 龍深

この本を手にとってくれてありがとうございます。

いわゆる「若者言葉」が流行になり次々と新しい造語が生まれてくる現代、SNSが活用され子どもたちが本を手にとることさえ少なくなってきたように感じます。

「赤い鳥」は児童向けの文学作品が少なかった大正時代、鈴木三重吉が児童に質の高い童話、童話を与えたいとの想いのもと創刊に至ったと言われております。例えば新美南吉の「ごんぎつね」は悲しいラストエンドです。

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」もラストは人によって様々な読後感を与えているのではないでしょうか。三重吉は子どもだからこそ妥協を許さないほんものの作家の文章を求め、作家たちもその想いに応えるべく全力で書いたのでしょう。ほんものの作品に触れることは感性を豊かにしてくれます。地元高校生が描いたイラストと共に「令和版」鈴木三重吉の世界をご堪能ください。



一本足の兵隊

「一本足の兵隊」 挿画／田村 芽衣

一本足の兵隊

—

或ある小こさなお坊ぼつちゃんちゃんが、お誕生たんじょうび日ひのお祝いわいに、箱はこ入こいりのおもちゃをもらいました。坊ぼつちゃんちゃんは、さっそくあけて見みて、

「やあ、兵へいたいだ兵へいたいだ。」と、手てをたたいてよろこびました。そしてひとすぐひとに一つ一つとり出だして、テールうえの上うえにならべました。それは青あおと赤あかの服ふくを着きた、小ちいさな鉄砲てっぽうをかっちいいだ、小ちいさな錫すずの兵へいたいでした。すちいっかりで、ちちいょうど二十五にん人にんいました。

これおなだけの兵へいたいは、もちいと、おちいもちや屋やが或ある一本ほんの錫すずのさちいじをつぶしてこちいしちいらえたので、言いわば同おなじ血ちいを分わけた兄きょうだい弟だいでした。それがみちいんなちちいゃんと気きをつちいけをして、まちいつ正しょうめん面めんをちいらちいんで立たつてちいいます。

ちちいよちいつと見みると、二ちい十五にん人にんが、寸すん分ぶんちがわちいない同おなじ兵へい隊たいのよちいうに見みえちいますが、しちいかし、よちいく見み

ると、中なかにたった一人ひとり、足あしが一本ほんしかない兵へいたいがいます。これはこしらえるときに、一番ばんし
いで錫すずが足りたりなかつたのでした。

でもその兵へいたいは、一本ほん足のまま、ほかの兵へいたいと同じおなじように、まっすぐに立たっていました。
テールの上うへには、そのほかに、まだいろんなおもちやがどっさりならんでいました。その中なか
で人の目ひとをひく、一ばんきれいなおもちやは、ボール紙がみで出来できた立派りっぱな西洋館せいようかんでした。その部屋へや
部屋べやの窓まどは、ちゃんと切りぬいてあって、のぞくと部屋へやの中なかがすっかり見えました。それから正面しょうめん
の入口いりぐちのまん前まえには、ひくい青あおい立ち木たきにかこまれた円まるい池いけがあります。その池いけは鏡かがみで出来でき
るのでした。その中なかには、いくつかの蠟細工ろうざいくの小さな白鳥はくちようが、水みずに影かげをうつしておよいでいます。
それはまったくきれいでした。

しかしその池いけよりもまだもつときれいなのは、入口いりぐちの石段いしだんの上うへに立たっている女おんなの人ひとでした。そ
れはボール紙がみを切りぬいてこしらえたのですけれど、それでも着物きものは上等じょうとうのいい布きれで出来でき
くびから肩かたへかけて、細ほそい青あおいリボンの襟えりかざりがつてあります。その襟えりかざりは、きらきら
した金紙きんがみでこしらえた、その女おんなの人の頭あたまほどもあるような、大おおきなばらの花はなで胸むねのまん中なかに止と
めてあります。

その女おんなの人が、両腕りょううでをひろげ、片足かたあしを思いきりたくかく蹴け上げて、お得意とくいの踊おどりをおどっている

のです。その上げた片足は、顔よりもっと上まではね上っているので、ちよっと見ると、片足がどこにあるのか分らないくらいでした。一本足の兵たいは、この女の足を見ると、

「おや、あの人も一本しか足がないや。なるほど、世の中にはおれ見たいな人もいるんだね。よしよし、おれはこれから、あの人と仲好しになろう。しかし、向うはあんな立派な西洋館に住んでいる女だ。おれのようなこんな家じや、いらっしやいと言っても中々来ないだらうね。おれは二十五人も一しよに、こんな、いやな箱の中にいるんだもの。」

一本足の兵たいは、じぶんのお家になっている、もと巻煙草のはいつていた箱の後に立つて、背のびをして、その女の踊を見ていました。女の人は一本足のくせに、ころびもしないで、上手につりあいを取って立っていました。そのうちに夜になりました。ほかの二十四人の兵たいは、みんな箱の中へはいりました。家中の人もみんな寢床にはいつて寝てしまいました。

すると、テーブルの上のおもちやたちは、そろそろ動き出しました。中にはこのこの二人のところへ話しにいったり、おおぜいで踊をおどったり、そうかと思うと、けんかをし合ったりして、おおさわぎをしはじめました。

錫の兵たいたちは、箱から出ようと思つて、どたばたあばれました。しかし箱のふたが中々持ちあがりません。

こちらでは小さな紙切ナイフが、ばねじかけの蛙にふざけています。石盤の上では、石筆がころころ走りまわっています。その物音で、籠のなかのかなりやも目をさまして、ちいちいと謡をうたい出しました。

そんなさわぎの中で、れいの踊の女の人と、一本足の兵ただけは、だまって身動きもしないでいました。女の人は両腕をひろげ、片足をはね上げたまま、石段の上じいっと立っています。一本足の兵たいは、その踊手の顔をじっと見つめたなり、まっすぐに一本足でつったっていました。そのうちにお部屋の時計が十二時をうちました。

それと一しよに、煙草の箱のふたが、ひとりでびよんととびあいたと思いと、中から、まっつ黒な鬼のおもちやがぬつと顔を出しました。

「おいおい一本足の兵たい、おまえは何をじろじろ見てるんだい。柄でもない。よせよせ。だれがお前なぞと仲よしになるものか。」

黒い鬼はこう言って鼻で笑いました。一本足の兵たいは、鬼のいうことなんかちつとも聞えないように、平気で踊を見ていました。

「ふふん、勝手にしろ。だが明日の朝になっておどろくな。」
黒鬼はそれを見て、ふんぶん怒ってこう言いました。

そのあくる朝が来きました。

坊ちゃんはこのこ出て来て、れいの一本足の兵たいをお部屋の窓のところへ立たせました。すると、それは黒鬼のしたとか、それとも風のせいとか、その窓のガラス戸がふいにがたんとはねあきました。そのはずみに一本足の兵たいは、いきなりぼんとはねとばされて、その三階の窓から、下の往来の石だたみの上へ、まっさかさまに落ちました。くるくるくる、すとん。

「おお、いたた。」

兵たいのかついでいた鉄砲の先は、しき石の間へぐいとつきささりました。坊ちゃんは、「あッ。」と言って、ねえやと二人で、往来へ下りていきました。

二人は一本足の兵たいを一生けんめいにさがしました。兵たいは二人のじき足もとに落ちていたのでした。二人はもうすこしでそれをふみつけるところでした。それでもとうとうその兵たいが見つけ出せませんでした。一本足の兵たいは、

「もしもし、ここにいます。ここに。」と泣き声を出しかけました。しかし軍服を着た兵たいが往来で泣いたりしては見つともないので、むりにがまんして、口をくいしばっていました。そのう

ちにふと雨がばらばら落ち出しました。間もなく雨はざあざあと、どしゃぶりになって来ました。

その雨がやっと上ると、小さな男の子が二人とおりがかりました。

「ああ、あすこにあんな兵たいが落ちてら。あれをボートに乗せて走らしてやろうね。」と、二人はこう言って、さっそく新聞紙をおりたたんで、小さなボートをこしらえました。

往來のわきのどぶには、泥の雨水がどんどん流れていました。二人の子どもは、紙のボートへ一本足の兵たいを乗せて、それをどぶへ流しました。そして二人で手をたたきながら、わいわい言って、ついて走りました。水はすばらしい勢で流れました。ときどき大きな浪がずしんとゆれました。そのたびにボートはくるくるまわって、今にもひっくりかえりそうになりました。一本足の兵たいはびっくりして、ぶるぶるふるえていました。しかし兵たいですから、がまんして、こわいなぞということは顔色にも出さないうで、ちゃんと鉄砲をかついで、一つところをにらみつけていました。

そのうちに、ボートは、急に地面の下のトンネルの中へかけこみました。そこはまるで箱の中にはいったようにまっ暗でした。ボートはその暗がりの中を、浪にもまれてどンドン走っていきましました。

「おやおや、一たいどこへもつていかれるんだらう」と、一本足の兵たいはびくびくしながら乗

っていました。

「これもみんなあの黒鬼がさせたことだ。ほんとにあいつはひどい奴だ。あの踊の女のひと二人で乗っているのなら、この暗がりがこの二倍暗くても平気なんだけれど。おっと、あぶない。お、もう少しで引っくりかえるところだった。」

一本足の兵たいは青くなつてちぢこまっていました。すると、ふいにその地の底のどぶの中に住んでいゝるどぶ鼠が、

「おい、兵たいまで。」と、どなりました。

「ここら通行券を見せろ。おいこら、通行券を見せろつてば。」

しかし一本足の兵たいは、だまって鉄砲の台をにぎっていました。ポートは、かまわずどんどん走つていきます。鼠は怒つて追っかけて来ました。

「おおい、あいつをつかまえてくれ。つかまえてくれ。通行税をはらわないうでにげたんだ。通行券なしでとおつたんだ。」

鼠はこう言つて、ポートのそばを流れている、木の片やわらくずにかせいをたのみました。

そうこうしてる間に、流れはいよいよ急になつて来ました。ポートは目がまわるほど早く走りました。と、やがて向うに外の明るみが見え出しました。一本足の兵たいは、

「おや、うまいぞ。もうあかるいところへ出たぞ。」と思うとたんに、ごうごうごうと、耳がつぶれるほどの大きなひびきがつたわって来ました。それは、どぶがもうじきおしまいになって、下の大きなほりわりの中へ、泥水がどうと落ちこむ音でした。

そこへ来ると、水は大きな滝になって、まっさかさまに落ちこんでいました。兵たいのボートは、あつという間にその滝のま上へ来て、泥水のしぶきと一しよに、どぶんとほりわりへさかおとしに落ちこみました。兵たいは、びしやりと水をかぶったと思いますと、うず、にまかれて、くるくるくるくと、まわり火花のようになまりました。

兵たいは息もつけないで、一生けんめいにボートにかじりついていました。と、たちまちボートの中へ水が一ぱいはいりました。兵たいはびっくりして、からだをのし上げていますと、ボートはそれなりぶくぶくとしずみかけました。水はもう兵たいの頭の上まで来ました。兵たいの目にはもう二度と見られない、あの踊の女の人の顔が浮びました。と思うと、どこからか、

「ぶくぶくぶくぶく、

どんだんしずめよ。

死ぬんだ死ぬんだ、

ぶくぶくぶくぶく。」

と、だれかが、うれしそうにうたっている声が聞えました。

そのはずみに、もうどろどろになりかけた紙のボートは、ふいに二つにとけ割れました。

兵たいは、それと一しよに、ぶくぶくと泥水の下へしずみましました。するとそこへ大きな魚がひよいと出て来て、兵たいをがぶりと一のみにのみこんでしまいました。一本足の兵たいは、

「おや、へんなところへ来たぞ。」と思ひました。

そこは、さっきのトンネルの中よりもっともっと暗いところでした。そして足や鉄砲がそこいらへつかえて、きゆうくつでした。しかし兵たいは、どうなりと勝手になれと、もう度胸をすえて、鉄砲の台をかたくにぎったなり、からだをつきのぼして、ふんぞりかえって寝ころんできました。

魚は兵たいを飲みこんだまま、そっちこちと、いきおいよくはねまわりました。

三

兵たいはどれだけの間そうして寝ころんでいたでしょう。しまいに、上からぱたとなぐりつけるようなびびきがつたわりました。間もなく、いなびかりのように、目の前がぱっと明るくな

りました。それと一しよに、だれか女の人の声で、

「あら、こんな兵たいがはいつていた。」と、さもめずらしそうにさわぎたてました。それは或家の女の料理人でした。

魚はいつのまにか漁師のあみにかかり、市場へ売られて、しまいにこの家の台所へ来たのです。女の料理人は、笑いながら、その一本足の兵たいを、おや指と人さし指でつまんで、ほかのお部屋へもつていきました。みんなは、わいわい言いながら、そのめずらしいほり出しものを見に来ました。一本足の兵たいは、きまりの悪い顔をして、されるままになっていました。

そのうちに、だれかがその兵隊をテーブルの上へおきました。兵隊はそつとあたりを見まわしました。

すると、ふしぎなこともあればあるものです。そのテーブルはこの一本足の兵たいが先にのっかっていた、あの同じテーブルではありませんか。

むろん、部屋も同じ部屋でした。それから同じ坊ちゃんがそばにいました。そしてテーブルの上には、先と同じ仲間が、ちゃんとそのままそろっていました。踊の女の人はやっぱり同じように入口の石段の上に立って、両手をたかくさしあげて、一本足で踊っていました。

一本足の兵たいは、うれしくてうれしくて、思わず錫の涙がこぼれそうになりました。でも兵

たいですから、涙なみだなんぞを見せるわけにはいきません。一本足ほんあしの兵へいたいは、だまって、じいっと踊おどり子の顔かおを見ていました。踊おどりの女おんなは何なんにも言いわないで、だまってこちらを見ていました。

そのうちに坊ぼっちゃんが、ふいにその兵へいたいをつかんで、いきなりストーブの中なかへなげこんでしまいました。兵へいたいは、

「あっ。」とびっくりしました。これもやはりあの黒くろい鬼おにのさせたことにちがいません。兵へいたいはだまってじっとしてました。

でも赤あか焼やけになった石炭せきたんの中なかへなげこまれたのですから、たちまちじりじりと、からだ中じゅうが焼やけただれて来きました。兵へいたいの顔かお色いろはまっ青あおになってしまいました。

「ああ、とうとうこれなり焼やけ死しぬのか。」と思おもいながら、向むかうのテうえーブルの上うへの踊おどりの女おんなの人ひとを見みつめていました。踊おどりの女おんなの人ひとも、じっと兵へいたいを見みていました。

と、坊ぼっちゃんはふいに踊おどりの女おんなの人ひとを石段いしだんの上うへからひっぺがして、いきなり、また、ぽんとストーブの中なかへなげこみました。女おんなの人ひとはずしんと一本足ほんあしの兵へいたいのそばまで来きたと思おもいますと、たちまち頭あたまから足あしの先さきまで、ぼうぼうともえ上あがってしまいました。

あくる朝あさ、女中じよちゆうがストーブの灰はいをかき来きました。するとその灰はいの中なかから、ハートのような形かたちをした錫すずのかたまりがででて来きました。それからまっ黒くろこげになった、ばらの飾かざりのポがール紙がみも出で

て来きました。その黒くろこげのボボール紙がみは、ああの踊おどりの女おんなが、ききのうまうまでこの世よにいたいたという、たたったひと一つのししるししでした。



「デモンとピシ阿斯」

挿画／郷 日鞠

デイモンとピシ阿斯

—

これは、二千年も、もっとまえに、希臘が地中海ですっかり幅を利かせていた時代のお話です。

そのころ、希臘人は、今のイタリヤのシシリイ島へ入り込んで、その東の海岸にシラキユースという町をつくっていました。そこでも市民たちは、やはりみんなの間からいくたりかの議政官というものを選んで、その人たちにすべての支配を任せていました。或とき、その議政官の一人にディオニシ阿斯という大層な腕きぎがいました。

ディオニシ阿斯は、もとはずつと下級の役に使われていた人ですが、その持前の才能一つで、とうとう議政官の位地まで上ったのでした。この人のおかげでシラキユースは急にどんだんお金持になり、島中のほかの殖民地に比べて、一ばん勢力のある町になりました。

それ等の殖民地の中には、アフリカのカーセイジ人が建てた町もいくつかありました。シラキユースはそのカーセイジ人たちと、いつもひどい仲たがいをしていました。ディオニシアスは遂にシラキユース人を率いて、それらのアフリカ人と大戦をしました。そして手ひどく打ち負してしまいました。

そんなわけで、ディオニシアスはシラキユース中で第一ばんの巾利きになりました。それでした。んだんにほかの議政官たちを押しつけて、町中のことは自分一人で勝手に切り廻すようになりました。

ディオニシアスはずいぶんわがままな惨酷な男でした。市民たちは彼のいろいろな乱暴から、ディオニシアスを蛇のように憎み出しました。併し、市民もほかの議政官も、彼の暴威に怖れて、だれ一人面と向って反抗することが出来ませんでした。

ディオニシアスには、市民たちが、すべて自分に対してどんな考えを持っているかということ十分分っていました。ですから、しじゅう、一寸も油断をしませんでした。いつだれが、どんな手だてをめぐらして、自分を殺すかも分らないのです。ディオニシアスはそのために、最後にはもうどんな人をでも疑わないではおかないようになりました。

彼は牢屋の後にある、大きな岩の中を、人に分らないように、そっと下から掘り開けて、その

中へ秘密の部屋をこしらえました。そしてそこへ、牢屋から罪人の話し声がたわつて来るような仕かけをさせて、いつもそこへ這入ってじいっと罪人たちの言っていることを立ち聞きしていました。

それから、自分の寝室へは、だれも近づいて来られないように、ぐるりへ大きな溝を掘りめぐらし、それへ吊橋をかけて、それを自分の手で上げたり下したりしてその部屋へ出這入りしました。

或るとき彼は、自分の顔を剃る理髪人が、

「おれはあの暴君の喉へ毎朝髪剃りをあてるのだぞ。」と言って、人に威張ったという話をきき、すっかり気味をわるくしてその理髪人を死刑にしてしまいました。そして、それからというもの、もう理髪人をかかえないで、自分の娘たちに顔を剃らせました。併し後には、自分の子が髪剃りを持ってあたるのさえも不安神でなくなりました。それでどうとう鬚を剃るのをやめて、その代りに、栗の殻を真赤に焼かせて、それで以て、娘たちに鬚を焼かせ焼かせしました。

或日彼は、アンティフォンという男に向つて、真鍮はどこから出るのが一番いいかとたずねました。すると、アンティフォンは、

「それはハーモディヤスとアリストゲイトンの鑄像のが一ばん上等です。」と答えました。デイ

オニシアスは愕おどろいて、忽たちまちその男おとこを殺ころさせてしまいました。ハーモディヤスとアリストゲイトンの二人ふたりは、希臘ギリシヤのアゼンの町まちの勇士ゆうしで、その暴君ぼうくんのピストラタスという人ひとの子供等こどもらを切り殺ころした人ひとたちです。この二人ふたりの像ぞうがアゼンに立たっていました。アンティフォンは大胆だいたんにもそれを引き合あいに出だして、ディオニシアスにあてつけを言いったのです。

又またある或あるとき、ディオニシアスは、友人ゆうじんのドモクレスという人ひとが、たった一日いちにちでもいいから、ディオニシアスのような身分みぶんになつて見みたいと言いつて羨うらやんだということ聞き出きだしました。それですぐにそのドモクレスを呼よんで、さまざまの珍めずらしいきれいな花はなや、香料かうりようや、音楽おんがくをそなえた、それはそれは、立派りっぱなお部屋へやにとおし、出来できるかぎりのおいしいお料理りようりや、価あたいのかい葡萄酒ぶどうしゆを出だして、力ちからいっぱい御馳走ごちそうをしました。

ドモクレスは大喜びおよろこびをしました。併しかし、そのうちにふと顔かおを上げて見みますと、自分じぶんの頭あたまの真上まうえには、鋭すまどく尖とがった大きな刀おとが、一本ぼんの馬うまの尾しっぽの毛筋けすじで真ま逆さかさに釣つり下げられていたので、びつくりして青あおくなりました。これはディオニシアスが、おれの境遇きやうぐうは丁度ちやうどこの通りとおだということを見みせてやろうというので、わざわざ仕組しくんだのです。

ディオニシアスは、こんな乱暴らんぼうな人ひとでしたけれど、それと一ひとしよに、一方ぼうには大層たいそう学問がくもんがあり、色々いろいろの学者がくしゃや詩人しじんたちを、いつも側そばに集あつめていました。そして自分じぶんでもどんだん詩しを作つくりました。

或あるときディオニシアスは、フィロセヌスという学者がくしゃが、自分じぶんの作つくった詩しをけなしていると聞きいて、大層怒たいそうおこって、すぐにつかまえて牢屋ろうやへ入いれました。

そのうちにディオニシアスは、又一またひとつ詩しをつくりました。そして自分じぶんでは、こんな立派りっぱな詩しは一寸ちよつとだれにも作つくれまいと大得意だいとくいになって、早速さつそくフィロセヌスを牢屋ろうやからよび出だして見みせつけました。フィロセヌスがその詩しを讀よんでしましますと、ディオニシアスは、どうだ、それでもまだ悪わるいというか、と言いわぬばかりに、相手あいての顔かおを見下みおろしました。

するとフィロセヌスは、何なんにも言いわずに、くるりと獄卒ごくそつの方ほうを向むいて、「おい、もう一度牢屋どろうやへ入いれてくれ。」と言いいました。

ディオニシアスもこのときばかりはくすくす苦笑にがわらいをしました。そして、相手あいての正直しょうじきなことを褒ほめる印しるしに、そのまま解放かいほうしてやりました。

二

併しかし、ディオニシアスについて伝つたえられているお話はなしの中で、一ひとばん人ひとを感動かんどうさせるのは、怖おそくピシ阿斯とデモンとのお話はなしでしょう。

この二人は、どちらもピサゴラスの学徒と言つて、ピサゴラスという、ずっと昔にいた学者の教えを奉じている人たちでした。

ピサゴラスという人は、どんな人で、どんなことを説いたかということ、今ははっきり分つておりません。ただこの派の学徒たちは、すべて感情を殺すということ、その中でもとりわけ怒を押えること、そして、どんな苦しいことでも、じつとがまんするということを、人間の第一の務めだと考えていました。こういう風に自分の感情や欲望を抑えつけることを自制と言います。ピサゴラスの学徒は、人間はこの自制が少しでも多く出来れば出来るほど、それだけ神さまに近づくの、生がい完全な自制を以て突き通して来た人は、死んだ後には神さまになれる、その反対に、少しでも自分を押えつけることが出来ないで、いろいろの悪いことをしたものは、次の世には、獣や、又はそれ以下の動物に生れて来るのだと信じておりました。

それ等の学徒は、お互に、いつも固く団結して、いろいろの学問を修めていました。特に数学と音楽とを一ばん大切なものとして研究しました。

その学徒の一人のピシアスという人が、シラキュースに来ておりましたが、それがいつもディオニシアスに反抗しているように睨まれて捕縛されました。ディオニシアスはいきなり死刑を言

いわたしました。

ピシ阿斯は、それでは仰のままに殺しておもらいしましょうと言いました。併し、そのまえに一つお願があります、私は希臘に土地を持っており、身うちのものもおります。それで、一度あちらへかえって、すべてのことを片づけておき、すぐに又出て来て処刑を受けますから、どうぞしばらくの間お許しを得たいと言いました。

ディオニシ阿斯はそれを聞いて嘲笑いました。そんなにして、まんまと遠い海の向うへ遁げた後に、またわざわざ殺されにかえる馬鹿があるものか、そんなふざけた手でこのおれが円められると思うのかというように、からからと笑いました。

ピシ阿斯は、

「併しそれには、私がかえるまで、身代りになってくれるものがあるのです。私の友だちの一人がちゃんと引き受けてくれるのですが。」と言葉をついで言いました。

「ははは、それはお前がからかわれたのだよ。そんなことで、むざむざ命を捨てるお人よしがこのにしよう。」とディオニシ阿斯は笑いました。

すると、そこへデモンという人がすかさず出て来ました。

「どうぞ私をピシ阿斯の代りにおとめおき下さい。もし、ピシ阿斯があなたを欺いて、御指定の日までにかえってまいりませんでしたら、すぐに私をお殺し下さい。」と言いました。

ディオニシアスは、デイモンのその申出を聞いて、寧ろびっくりしてしまいました。そして、よし、それではピシアスの言うとおりにさせてやろうと言いました。ともかくそれは、デイモンの馬鹿さ加減を試すのに丁度おもしろいと思っただけからでした。

デイモンは代って牢屋へ閉じこめられました。ディオニシアスは、獄卒に言いつけて、たえずデイモンの容子を見張りをさせておきました。併しデイモンは、いつまでたっても一寸も不安そうな容子を見せませんでした。

「私はピシアスを信じている。ピシアスは立派な人だ。決してうそはつかない。もし、万一、あの人のかえりがおくれたとしたら、それは、彼のわるいせいではなく、止むを得ない不意の出来ごとが妨げをしたのである。そのときには私はよろこんであの人の代りに殺されて見せる。」

デイモンはこう言って落つき払っておりました。

ところがディオニシアスが考えていたように、とうとう定めの日が来ても、ピシアスはそれなりかえって来ませんでした。デイモンはそれでもまだ平気でいました。

「これは来る途中で海が荒れでもしたのに相違ない。何、私が殺されればそれでいいではないか。」とデイモンは獄卒に言いました。

ディオニシアスは、それ見ると笑いました。そして、いよいよ今日の何時までにかえらなければ

ばお前まえを殺ころすからそう思おもえと言いわたくしました。

間まもなくその時じ間かんが迫せまって来きました。デイモンは容よう赦じやなく死し刑けい場ばへ引ひき出だされました。獄ごく卒そつは死し刑けいの道どう具ぐをそろえて待まっていました。デイモンは、もう二、三分間もたてば冷つめたい死しが骸がいになっ
てしまうのです。併しかし彼かれは、その間ま際わになっても、ピシアスは決けしてうそをついたのではない、
たゞ、止やむを得えない事じ情じようでおくれたのだと信しんじていました。

すると、そこへ、ピシアスがひよいとかえってきました。ピシアスはデイモンの手てを取とって、
ああ、丁ちやうど度ま間に合あってよかつたと喜よろこびました。そして、にこにこ笑わらいながらデイモンと代かわってし
ずかに死し刑けいを待まっていました。

デイオニシアスはすっかり愕おどろいてしまいました。

そして、即そく座ざにピシアスの罪つみを許ゆるしてやりました。こんな立り派っぱな人ひとを殺ころすことは、いくらこの
暴ぼう君くんにだつて出で来る筈はずはありません。デイオニシアスは、それから改あらためて二人を自じ分ぶんのそぼへよ
びました。

彼かれは、これまで嘗かつて人ひとを信しんずることの出来できなかつた、哀あわれな人にん間げんです。彼かれはしたいままの乱らん暴ぼう
をしました。そうしておいて自じ分ぶんの命いのちを少すこしでも長ながく盗ぬすむために、あらゆる人ひとを疑うたぐりました。
そのためには多おほくの人ひとをどんだん殺ころしたり押しこめたりしました。ですから彼かれはピシアスとデイ

モンとの二人のこの信実と友愛とを見ると、本当に何よりもうらやましくて堪りませんでした。
彼は二人に向ってたのみました。

「どうぞ、これから私をもお前さんたち二人の仲間に入れておくれ。そして三人で本当の友だち
になりたい。」

こう言って、ピシアスとデイモンの手をとったということです。



周の家

「岡の家」

挿画／木原 結愛

岡の家

岡の上に百姓のお家がありました。家がびんぼうで手つだいの人をやとうことも出来ないので、小さな男の子が、お父さんと一しょにはたらいしていました。男の子は、まいにち野へ出たり、こくもつ小屋の中で仕事をしたりして、いちんちじゆう休みなくはたらきました。そして、夕方になるとやっと一時間だけ、かっつにあそぶ時間をもらいました。

そのときには、男の子は、いつもきまって、もう一つうしろの岡の上へ出かけました。そこへ上ると、何十町か向うの岡の上に、金の窓のついたお家が見えました。男の子は、まいにち、そのきれいな窓を見にいきました。窓はいつも、しばらくの間きらきらと、まぶしいほど光っています。そのうちに家の人が戸をしめると見えて、きゆうに、ひよいと光がきえます。そして、もう、ただのお家とちつともかわらなくなってしまう。男の子は、日ぐれだから金の窓もしめるのだなと思つて、じぶんもお家へかえつて、牛乳とパンを食べて寝るのでした。

或日お父さんは、男の子をよんで、

「おまいはほんとによくはたらいておくれた。そのごほうびに、きょうは一日おひまを上げるから、どこへでもいってお出で。ただ、このおやすみは、神さまが下さったのだということわすれてはいけないよ。うかうかくらしてしまわないで、何かいいことをおぼえて来なければ。」と言いました。

男の子はたいそうよろこびました。では、今日こそは、あの金の窓の家へいって見ようと思つて、お母さまから、パンを一きれもらつて、それをポケットにおしこんで出ていきました。

男の子にはたのしい遠足でした。はだしのまま歩いていくと、往來の白いほこりの上に足のあとがつかまりました。うしろをふりかえって見ると、じぶんのその足あとがながくつづいていきます。足あとは、どこまでもじぶんに、ついて来てくれるように見えました。それから、じぶんの影法師も、じぶんのするとおりに、一しよにおどり上ったり、走ったりしてついて来ました。男の子にはそれがゆかいでたまりませんでした。

そのうちに、だんだんにおなががすいて来ました。男の子は道ぼたのいけがきのまえを流れている、小さな川のふちにすわつて、パンを食べました。そして、すきとおった、きれいな水をすくって飲みました。それから、食べあましたかたいパンの皮は、小さくくだいて、あたりへふりまいておきました。そうしておけば、小鳥が来て食べます。これはお母さんからおそわつたこと

でした。

男の子はふたたびどんどん歩きました。そして、ようやくのことで、たかい、まっ青な、いつも見る岡の下へつきました。男の子はその岡を上っていきますと、れいのお家がありました。しかしそばへ来て見ると、そのお家の窓はただのガラス窓で、金などはどこにもはまってはいませんでした。男の子はすっかりあてがはずれたので、それこそ泣き出したくらいにがっかりしました。

と、お家からおばさんが出て来ました。そして何かご用ですかと、やさしく聞いてくれました。男の子は、

「私は、うちの後の岡の上から見える、このお家の金の窓を見に来たのです。でも、そんな窓はなくて、ただガラスがはまっているだけです。」と言いました。おばさんは、くびをふって、「私の家はびんぼうな百姓ですもの。金などが窓についているはずはありません。金よりもガラスの方があかるくていいんですよ。」

こう言って笑いながら、男の子を戸口の石だんにこしをかけさせて、お牛乳を一ぱいと、パンを一きれもって来てくれました。おばさんは、それから、男の子とちようどおない年ぐらいの女の子をよび出しました。そして、二人でおあそびなさいというように、うなずいて見せて、ふた

たびお家へはいって仕事をしました。

その小さな女の子も、じぶんとおなじように、はだしのままで、黒く茶けた木綿の上着を着ていました。しかし、その髪の毛は、ちょうど、男の子がいつも見ている光った窓のように、きれいな金色をしていました。それから目は、ま昼の空のようにまっ青にすんでいました。

女の子は、にこにこしながら、男の子をさそって、お家の牛を見せてくれました。それは、ひたいに白い星のある、黒い小牛でした。男の子はじぶんのお家の、四つ足の白い、栗の皮のような赤い色の牛のことを話しました。女の子は、そこいらになつてゐるりんごを一つもいで、二人で食べました。二人はすっかりなかよしになりました。

男の子は、金の窓のことを女の子に話しました。女の子は、

「ええ、私もまいにち見ていますわ。でも、それは、あっちの方にあるんですよ。あなたはあべこべの方へ来たんですわ。」といいました。

「いらっしやい。こっちへ来ると見えるのよ。」と、女の子はお家のそばの、すこしたかいところへ男の子をつれていきました。そして、金の窓は見えるときがきまっているのだといいました。男の子は、ああきまつている、お日さまがはいるときに見えるのだと答えました。

二人は小だかいところへ上りました。女の子は、

「ああ、今いまちようど見みえます。ほら、こらんなさい。」といいながら、向むかうの岡おかの方ほうをゆびさしました。

「ああ、あんなところにもある。」と男おとこの子こはびっくりして見み入いりました。しかし、よく見ると、それは岡おかの上うえのじぶんの家うちでした。男おとこの子こはびっくりして、私わたしはもうお家うちへかえるといい出だしました。そして、もう一年ねんもだいにポケットにしまっていた、赤あかいすじが一ひとすじはいった、白しろい、きれいな小ちいさな石いしを、女おんなの子こにやりました。それから、とちの実みを三みつつ、びろうどのようなつやのある、赤あかいのと、ぼちぼちのついたのと、牛ぎゅう乳にゅうのような白しろい色いろをしたのと、その三みつつをやりました。そして、またこんどくるからといって、おおいそぎで走はしってかえりました。女おんなの子こは、男おとこの子こがあわててかけてかえるのを、びっくりして見みおくっていました。きらきらした夕ゆ日うひの中に、いつまでも立たって見みていました。

男おとこの子こは、息いきをもやすめないで、どんどん走はしってかえりました。しかし道みちがずいぶんとおいのお家うちへついたらときには、もうすっかり暗くらくなっていました。

じぶんのお家うちの窓まどからは、ランプのあかりと、ろのたき火びとが、黄きいろ色いろく赤あかく見みえていました。ちようど、さつき岡おかの上うえから見みたときとおなじように、きれいにかがやいていました。男おとこの子こは、戸とをあけてはいりました。お母かあさんは立たって来きて、頬ほおずりをしてむかえました。小ちいさな妹いもうとも、

よちよちかけて来ました。お父さんはろのそばにすわったまま、にこにこしていました。お母さんは、

「どこへ行って来たの？ おもしろかった？」と聞きました。

「ええ、ずいぶんゆかいでしたよ。」と男の子は、うれしそうにいいました。

「何かいいことをおぼえて来たかい？」とお父さんが聞きました。

「私は、じぶんたちのこのお家にも、金の窓がついているということをおそわって来ました。」と、男の子はこたえました。

ぽっぽのお手帳



「ぽっぽのお手帳」

挿画／清山 ねね

ぼっぼのお手帳

—

「すず子のぼっぼは、二人とも小さな小さな赤いお手帳をもっています。この二人は、「黒」よりも、やあにやあよりも、「君」よりも、だれよりも一ばん早くから、すず子のおあいてをして

いるのです。

一ばんはじめ、或冬の、氷のはっている寒い日に、二だいの大きな荷馬車がお荷物をつんで、ぼっぼたちのながく住んでいた村から、町の方へ、ことごと出ていきました。ぼっぼは、あのま

まかごにはいって、その二ばんめの荷馬車の、一ばんうしろに乗せられていました。二人は、一

たいどこへいくのだろうと言うように、しきりにきよときよとくびをうごかしていました。お父

さまはそのときぼっぼに言いました。

「二人ともおとなしくして乗ってお出で。こんどは海の見えるお家へいくんですよ。」と言いま

した。

「そして、そのお家へ、小ぢやなすぢやんが生れて来るのですよ。」と、小石川のお祖母さまがそつと二人におっしゃいました。ぼっぼは、

「お祖母さま、お祖母さま、そのすぢやんというのはだれでございます。」と聞きました。

お母さまは、だまって、ただかるくわらいながら、みんなと一しよに車に乗りました。

ぼっぼは、それからこんどのお家へつきました。そのじぶんには、すぢ子の曾祖母は、まだ玉木のお叔母ちゃんのところいらっしやいました。あき子叔母ちゃんもまだ来ていませんでした。おうちには、千代という小さな女中がいました。

ぼっぼは、せんとおなじように、お部屋のそとの、ガラス戸のところにおかれました。このお家は、おもてからはいつて来ると、ただの平家でしたけれど、上へ上って、がらす戸のところへいつて見ると、そのお部屋のま下が広いおだいどころで、そこからはお部屋はちようど二階のようになつて、つき出ていました。

そのお部屋のじき目のまえは砂地でした。そして、そのすぐさが海でした。ぼっぼはガラス戸の中から、どんよりした青黒い海を、びっくりりして見ていました。まっ正面の、ずっと向うの方には、小さな赤い浮標がかすかに見えていました。

その向うを、黄色いマストをした、黒い蒸気船が、長い烟をはいて、横向きにとおつていきました。二人のぼっぼは、

「おやおや、あんな大きな船が来た。おお早い早い。ぼっぼウ、ぼっぼウ。」とおおさわぎをしました。

お母さまはこのお部屋へおこたをこしらえて、小さなすずちゃんが生まれてくるのをまっています。そして千代と二人ですずちゃんの赤いおべべをぬいました。

暗い冬はそれからまだながくつづきました。昼のうちは、おもてのじくじくした往來を、お馬や荷車やいろいろの人がとおりました。それから、お向いのうどんやで、機械をまわすのが、ごごとごとごとと聞えました。

しかし夜になると、あたりはすっかり穴の中のようにひっそりとなって、ただ、海がびたびたと鳴るよりほかには、何の音も聞えませんでした。

暗い海の中には、星のようなあかりがたった一つ、ちかりちかりと消えたりとぼったりしました。それは、昼に赤く見えていた、あの浮標の上にとぼるあかりでした。

ぼっぼは、そんな晩には、さびしそくに、夜でも、
「ぼっぼウ、ぼっぼウ。」となきながら、

「すぐ子ちゃんはまだおうまれにならないのですか。いつでしょう、いつでしょう。」と聞きま
した。

二

そのうちに、だんだんと五月が来ました。海の空もはればれとまっ青に光って来ました。

お母さまは、ネルの着ものに、青いこうもりをさして、千代をつれて、そこいらへ買い物に
いきなぞしました。

往来には、もういつの間にか、つばめが、海の向うから来て、すいすいとかけちがつていまし
た。電信の針金にもどっさりとまっています。

お父さまは、すぐちゃんはいつ生れるのでしょねと、よく、小石川のお祖母ちやまとも話し
話しました。

お家のちかくには、高井さんのおばあさまという、それはそれはよいおばあちやまがいらっし
やいました。そのおばあちやまが、ときどきおみやをもつていらして、小石川のお祖母ちやま
とお二人で、早くすすちやんが生まれるように、いのって下さいました。

すると、六月の或晩あるばんでした。お母さまには、あすはずちやんが生れるということがわかりました。お父さまも、それはよろこんで、すぐに小石川のお祖母ばあちやまに来ていただきました。

でも、ぼっぼにだけは、みんなだまっていました。ぼっぼがよろこんで、あんまりおおさわぎをするとうるさいから、あとでそっと見せてやることにしたのでした。

その晩お母さまは、はずちやんの寝る小さな赤いおふとんをちやんとしいて、そのそばへやすみました。

お父さまがぐる朝目をさまして見ますと、ちやんとはずちやんが生まれていました。まっ赤なお顔かおをした、小さい赤ん坊あかぼうのはずちやんは、一人で赤いおふとんの中に、すやすやとねていました。お父さまは、よろこんで、

「お祖母さま、小さなはずちやんが生れて来ましたよ。」と言ってよびました。お祖母ちやまは、かけていらしって、

「あらあらかわいいはずちやんね。」と言って、それはそれはおよろこびになりました。はずちやんはそれからしばらくたって、はじめてお母さまにお乳ちちをもらいました。

はずちやんは、ときどき「おぎアおぎア」と泣きました。それから、「おふんにやいおふんにやい」と言うようにも泣きました。

ぽっぼは、はじめてすすちゃんの泣き声を聞くと、

「あれはだれでしょう。ぽッぽウ、ぽッぽウ。」と、しきりにお父さまに聞きました。お父さまは、

「あれはすすちゃんだよ。こんど生れた赤ちゃんだよ。」と言いました。すると、ぽっぼは、よろこんで、

「おやそうですか。」と、ぱたぱたおさわぎをしました。そして、

「早く見せて下さい。早く早く。」と二人でねだりました。

しかし、すすちゃんは、まだとうぶんは、そっとねかせておかなければならないので、ぽっぼのところへつれていくわけにはいきませんでした。

ぽっぼは、まいにちまいにち、

「どうぞすすちゃんを見せて下さい。早く見せて下さい。」と言って、かわるがわるねだりました。それで或日お父さまは、すす子をそっと、おふとんにくるんで、ぽっぼのかごのまえにつれていきました。そして、

「すすちゃんすすちゃん、ごらんなさい。これがおまいのぽっぼだよ。」と言いました。ぽっぼは、

「すすちゃんすすちゃんこんちは。」

「すすちゃん私もこんちは。」と、それはそれはおおよろこびでこう言いました。

でも、まだ小ぢやなすすちゃんは、まぶしそうに目をつぶって、おぎアおぎアというきりで、ぼっぼを見ようともしませんでした。すすちゃんは、たとえそのとき目をあけても、まだ、ぼっぼどころか、お父さまもお母さまも、なんにも見えなかったのです。だれでも小さなときは、目があっても見えないし、お手があっても、かたくちぢめて、ひっこめていただけです。ちょうど、足があっても、大きくなるまではあるけないのとおんなじです。

そのうちに、だんだんと暑い八月が来ました。海はぎらぎらと、ブリキを張ったようにまぶしく光って来ました。すすちゃんは、昼でも、小さなおかやの中にねていました。

お母さまは、お部屋の鏡だんすのふちから、ねているすすちゃんの目のま上へ横に麻糸をわたして、こちらの柱のくぎへくくりつけました。そして、赤いちりめんのひもの両はしに、小さな銀の鈴をつけて、それをその糸へつるしました。

すすちゃんは、目がさめて、かやをどけてもらうと、黒い、きれいな目をあけて、その赤いひもをじいっと見ていました。お母さまはときどき立って、そのひもをこちらの方へ少しひいて見ました。

そうすると、すすちゃんの黒い目は、すぐに、はすかいにこちらの方を見ました。こんどは向うへやると、すすちゃんはまた黒目をうごかして、そちらの方を見ました。鈴はひもがうごくたんにりにりんととなりました。お母さまは、

「まあ、ちゃんと見えるのですね。」と言って、うれしそうに笑いました。お父さまは、こちらのいすにかけて見ていました。お部屋の三方には、まっ白な、うすいカーテンがかかっています。その中に、すすちゃんの着ている赤いおべと、つるした赤いひもとが、きわだってまっ赤に見えました。

三

お父さまは、それからまた或日、すすちゃんを、ぼっぼのまえへだいていきました。ぼっぼはよろこんで、

「すす子ちゃん、すす子ちゃん、こんちは。ぼっぼウ、ぼっぼウ。」と言って、おじぎをしました。お父さまは、

「こっちよこっちよ、すすちゃん。こっちをごらんなさい。」と言いながら、すすちゃんをかご

のまえにすえるようにして、ぼっぼを見せようとなりました。しかし、すすちゃんは、片手をかためてしゃぶりながら、ちがった方を向いたきり、いくらおしえても、ちっともぼっぼを見ようとはしませんでした。ぼっぼは、

「まあ、まだまだ小さいんですね。いつになったら、すすちゃんが、ぼっぼやおっしやるでしようね。」と、さも、まちどおしそうにこう言いました。お母さまは、

「ほんとにいつのことでしょうね。」と言いながら、お乳の時間が来たので、すす子をおひざにとりました。

「なに、じきですよ。今にすすちゃんが一人で、ぼっぼのところへ来るようになりますよ。」

ちようどいらしっていたお祖母さまは、こうおっしやりながら、お乳をいただいているすすちゃん、黒い髪の毛をおなでになりました。

「ああ、ぼっぼに、いいものを上げてよ。」と、お母さまは、ふと思ひ出したように、帯の間から、小さな赤いお手帳を出してぼっぼにわたしました。

お父さまとお母さまとは、いつもすすちゃんが早く大きくなってくれることばかりまわっていました。ぼっぼも、そのことばかり言っていました。

その十一月に、ぼっぼは、また、すすちゃんや、みんなと一しよに、ちがった町の方へ遠く引

っこしました。それは、ちかぢかに玉木の大叔母ちゃんが、はるばる曾祖母をつれて、すずちゃんを見に来て下さるからでした。そして、あき子叔母ちゃんもお家の人になるので、すずちゃんの生れたお家ではせまくてこまるからでした。

すずちゃんは、ときどきあき子叔母ちゃんのおひぎにだかれて、ぼっぱのかごのところへいきました。ぼっぱはこちらのお家でもまたガラス戸の中へおかれていました。すずちゃんは、ぼっぱのかごのわきに立つちをさせてもらうと、ちようどお口がふちのところへ来ました。すると、すずちゃんはいつの間にか、ちゅッちゅッと、ふちをしゃぶっていました。それから、お手にもっているがらがらをふりました。

「まア、すず子ちゃんは、先から見ると、ずいぶんおおきくおなりになりましたね。」
ぼっぱはこう言って、叔母ちゃんとお話をしました。

それからまた寒い冬が来ました。その冬があけると、すずちゃんはそろそろはいはいをし出しました。それからまた青い八月がまわって来ました。すずちゃんは、歩いてはたおれ、歩いてはたおれして、よちよちともう十足ばかりあるけるようになっていました。そのときには、すずちゃんを見たい見たいと言っておおさわぎをしていられた曾祖母も、もうこちらへ来ていらっしやいました。

或日、すすちゃんは、よちよちとおすだれのそとへかけて出ました。あき子叔母ちゃんは、「あら、あぶない。」と言いながら、あわてておっかけていきました。すすちゃんはもう少しでたおれるところを、ぼたりと、ぼっぼのかごにつかまりました。

「すすちゃん、こんちは、ぼっぼウ、ぼっぼウ。」と、ぼっぼがおじぎをしながら二人でこう言いました。するとすすちゃんはかごにつかまったまま、そのまねをして、

「ぼっぼウ、ぼっぼウ。」と言いな言いなおじぎをしました。あき子叔母ちゃんは、それを聞いて、「おや、今のはすすちゃんでしょうか。」と、ふしぎそうな顔をして、ぼっぼに聞きました。ぼっぼはにこにこ笑いながら、

「ええ、おしまいのはすすちゃんですよ。まアおじょうずですこと。さあ、もう一ど言ってごらんさい。ぼっぼウ、ぼっぼウ。」と、言いな言いなしました。すすちゃんはまたまねをして、「ぼっぼウ、ぼっぼウ。」と、おじぎをしました。あき子叔母ちゃんはびっくりして、

「あら、まあ、ほほほ。ちよいと、すすちゃんがぼっぼウ、ぼっぼウって言いな言いなしたよ。」と、思わすおおきな声でお母さまをよびました。すすちゃんはその声にびっくりして、

「わア。」と泣き出しました。

これは、すすちゃんが口を利いた一ばんのはじまりです。お父さまやお母さまはそれを聞いて

おおよろこびをしました。ぼっぼもそれはよろこんで、来る人ごと^{ひと}にその同じお話を^{おなし}しました。すずちゃん、あの二人のぼっぼは、こんなときからのぼっぼですよ。

お母さまは、もう先のお家のときに、すずちゃんの生れてから今日までのことで、二人のぼっぼの知らないことは、すっかり話して聞かせました。ぼっぼは、それをみんな、お母さまにいた^{かあ}だいた小さな赤いお手帳へつけておきました。二人が見てしっていることは、もとよりすっかりかきつけています。

ですから、すずちゃんは、大きくなって、ごじぶんの小さなことがわからないときには、いつでも、ぼっぼのお手帳を見せておもらいなさい。

にやあにやあや、黒が来たのは、ぼっぼにくらべればずっと後のことです。にやあにやあは、すずちゃんが、やっとはいはいするところに、或おじちゃんがもって来て下さったのでした。黒は、たったこないだ、お家の犬になったばかりで、もとは、そこいらのら犬だったのです。そのつぎに、一ばんおしまいに、君がおもりに来たのです。

湖水の鐘



「湖水の鐘」 挿画／大下 暖乃

湖水の鐘

一

或山の村に、きれいな、青い湖水がありました。その湖水の底には、妖女の王さまが、三人の王女と一しよに住んでいました。王さまは、夏になると、空の青々と晴れた日には、よく、小さな妖女たちをつれて、三人の王女と一しよに、真珠の舟に乗って出て来て、湖水の岸のやわらかな草むらへ上りました。

妖女たちは大よろこびで、草の中をかけまわったり、小さな草の花の中へはいつて顔だけ出してお話をしたり、大きないなごにからかったりして、おおさわぎをしてあそびました。中には、蜘蛛の網の、きらきらした糸をあつめて、顔かけをこしらえてかぶるものもありました。小さなかわいらしい妖女には、その顔かけが、よくにあいました。

三人の王女は草の上に坐って、ふさふさした金の髪を、貝殻の櫛ですいて、忘れなぐさや、百合

の花を、一ぱい、飾りにさしました。三人は、人間の中の一ぱん美しい女でさえも、とてもくらべものにならないくらいのも、それはそれはたとえようもない、きれいなきれいな妖女でした。そのかわいらしい目は、よいの星よりもっと美しくかがやいていました。

三人は、力のこもった、うつくしい歌をうたいました。森の小鳥は、みんな、じぶんたちの歌をやめて、うっとりとして、その歌に耳をかたむけました。

王さまはその間、木の洞の中にはいつて、日がしずむまで眠っていました。王さまはもうずいぶんの年でした。いつも水につかっている青い髪や、青い長い口ひげは、もはや水苔のようにどろどろにふやけて、顔中には、かぞえ切れないほどのしわが、ふかくきざまれていました。

或とき、二、三人の旅人が、この湖水のそばをとおりがかりました。その人たちは、このあたりの景色のいいのに引きつけられて、湖水のそばへ、神さまの礼拝堂をたてました。

すると、それを聞きつたえて、毎年方々から、いろんな人がおまいりに来ました。礼拝堂の番人は、日に三度ずつ、小さな鐘をならしました。

一たい妖女には、鐘の音がなによりもこわくてたまらないのでした。妖女の王さまや三人の王女や、小さな妖女たちは、その礼拝堂が出来てからは、せっかく岸の草の上へ来てたのしんでいて、もときどきふいに鐘がじゃんじゃんなり出すので、そのたんびにみんな、

「あッ。」と、ちぢみ上あがって、おおあわてにあわてて、水の下みずしたへにげこみました。しまいには、どんなに岸の上きしうえの日の光ひひかりがこいしくても、出でて来るのがこわいので、しかたなしに、毎日まいにち水の底みずそこで、陰気いんきなおもいをしてくらしていました。それでも、どうかすると、鐘かねの音おとは、その水みずの下したまでひびいて来くることがありました。

妖女ようじょの王さまは、これではたまらないと言いって、いろいろに考かんがえをこらしたあげく、とうとう、水みずの中の藻草なかもぐさの莖くきをすっかり集あつめさせて、それでもって湖水こすいの天井てんじょうへ一面めんにあついおおいをつくらせました。そしてその上うえへ、苔こけと青い草あおくさとをずらりとうえさせました。ですから湖水こすいの面おもては、ちようと、青々あおあおしたひろい草くさっ場ばのように見みえました。そのおおいには、ところどころに窓まどを開あけて、日ひの光ひかりが水みずの下したへさしこむようにしておきました。

王おうさまたちは、もうこれだじようぶだと思おもってよろこんでいますと、鐘かねの音おとは、そのおおいを突つきとおして、やつぱりじやんじやん聞きえて来きます。王おうさまは、そのたんびに、悔くやしがって、ひげをかきむしって怒おこり狂くるいました。王女おうじょや小さな妖女ようじょたちは、おびえておんおん泣なきました。村むらの牛飼うしかいや羊飼ひつじかいたちは、ときどき湖水こすいの中なかから、ふしぎな泣なきこえが聞きえるものですから、気味きみ悪わるがって、その近ちかくの草くさっ場ばへは一人ひとりも出でてこなくなりしました。

そのうちに、村の或百姓の家で、よその土地から来た、牛飼の若ものをやとしました。百姓は、そのわかものに、湖水のふちの草っ場へはけっしていかないように注意しておきました。

ところが、その若ものは、剛情な男でしたから、そう言われると、わざと、夜一人で出かけていって、湖水のふちでたき火をして、そのそばへ寝ころんでいました。

すると、間もなく、ふわふわした、緑いろの、びろうどの着物を着た、小さな人が、どこからともなくひよいと出て来ました。見ると、その小さな人は、ぬらぬらした青い髪の上に、立派な金の冠をつけて、同じような青い色の、ぬらぬらしたひげを長くたらしっていました。若ものは、これは水の中の妖女の王さまだとすぐに気がつきました。それでも、びくともしないで、

「もしもし、何か私に用があたりですか。」と聞きました。

妖女の王さまは、長いひげから、水をしぼりながら、

「じつはお前さんに金と銀を一と袋ずつ上げようと思って出て来たのだ。」と言いました。

「それでは私も何かお上げしなければなりませんか。」と、牛飼は聞きました。王さまは、

「いやいやべつに何にもくれなくてもいい。ただ、どうか、あの礼拝堂の鐘をそっと下して来て、

あすこに見える、赤い幹の木のじき下に、湖水の窓が開いているから、そこから、水のそこへ投げこんでくれないか。私の持つて来た金と銀は、革の袋にはいつて、その赤い幹の木にかけてある。袋は、私が一しよにいつて下さなければ、重くて下されはしない。鐘を投げてくれれば、その袋を二つともお前に上げよう。」と言いました。

若ものはよろこんで、すぐに引き上げました。そしてその晩夜中になって、礼拝堂の番人のおじいさんが、ぐうぐう寝入っているところを見はかつて、そうつと鐘を盗み出して来ました。

妖女の王さまは、ちやんと、赤い幹の木の下へ来て待つていました。王さまは鐘を手に取ると、まん中に下つてゐる打金をもぎ取つて、鐘だけを若ものにわたしました。そして、じぶんはその打金を持つて、水の中をわたつていきました。若ものはざぶざぶと後へついで行つて、間もなく湖水の窓のところへ来ると、そこから鐘をどぶんと投げこみました。

妖女の王さまは、すぐに、木の枝につるしてあつた、二つの袋を下して、若ものの肩へかけてやると、そのまま水の下へ沈んでしまいました。

若ものは、その袋の重いのにびっくりしました。とても一人では岸の上まではこびきれそうもありません。しかし、一生けんめいに力を出して、うんうんうめきながら、やっと岸までかえりました。

すると、二つの足が土につくかつかないうちに、からだが一ひとりでにずんずん前にこごまって、とうとう四つんばいになりました。そして、

「おや。」と思う間に、からだが一ひたりがすっかり牡牛になってしまいました。

その若ものをやとっている百姓は、翌朝起きて牛小屋へ行って見ますと、寝ていた間に、見つけられない大きな黒い牡牛が一匹ふえていたので、ふしぎに思いました。

見ると、その牛の頭には、重たそうな革の袋が二つくりつけてあります。百姓はためしに中をあけて見ますと、片方の袋には金が一ぱい、もう一つの方には銀が一ぱいはいっているの、なおいびつくりしました。

すると、牛は人間と同じような声を出して、おんおん泣き出しました。百姓はへんな牛だと思いながら、そのまま飼っておきました。

礼拝堂では、だれかが鐘を盗んだと言って番人のおじいさんがさわぎ立てました。金と銀をもうけた百姓は、信心のふかい人でしたから、それを聞くと、すぐに、袋の金を出して、べつの鐘を買って来て、礼拝堂へおさめました。番人のおじいさんは、その鐘をつるして、ためしに鳴らして見ました。そうすると、ふしぎなことには、その鐘は、まるで泥かなんかでこしらえたように、いくら鳴らしてもちっとも鳴りませんでした。

その晩、番人が寝入りますと、夜中になって、小さな妖女たちが、ぞろぞろといくたりもいくたりも湖水の中から出て来て、みんなで手をつないで、わになって、礼拝堂の前でとんとんおどりをおどりました。

みんなは、こういう歌をくりかえしくりかえし歌いながら、面白そうに、おおさわぎをしておどりました。

「番人さん番人さん、

お前のお汁にや塩気がない。

塩気がない。

そこらのだれかに借りといで、

貸さなきゃ、蹴っておやりなさい。

じゃんじゃんじゃん、

じゃんじゃんじゃん。」

と、鐘の音のまねをして、鳴らない鐘をつく番人をさんざんからかかっていきました。

或晩、番人のおじいさんは、神さまが、湖水の下の妖女の王の御殿へつれて下すつて、盗まれた鐘がかくしてあるのを見せて下すつた夢を見ました。番人は、ふしぎな夢を見たものだと思つて、みんなに話しました。村中の人は、それを聞いて、そんなら、あの鐘はきつと湖水の底にしずんでいるにちがいないと言いました。

だいたんな若ものたちは、その鐘をとり出して来ると言つて、代る代る湖水のそこへもぐりこみました。しかし、みんな水の下へはいつたきり、一人も浮き上つたものがありませんでした。それは、いたずら好きな妖女たちが、人が水の中へはいつて来ると、片はしから魂をぬきとつて、からのからだを、水草の中へかくしてしまふからでした。

だいたいな息子をなくしたおおぜいの母親たちは、毎日泣いてくらしめました。村中の人はこれはきつと、湖水の中におそろしい魔物があるのにちがいないと言つて、若ものたちに、一さい湖水のそばへいかなないように、きびしく言いませました。

湖水の中からは、月の光の青くさえた、しずかな晩には、何とも言えない、美しい歌の音が聞えて来ました。それは妖女たちがうたう魔法の力のこもつた歌でした。若ものたちは、その歌

の聲こゑが聞きこえると、つい知しらず知じらず引ひきつけられて、ひとりでに湖こすい水の岸きしへ出でて行いきました。

行いつて見みると、湖こすい水なかの中なかには、美うつくしい小ちいさな女おんなたちが、きらきらと銀ぎんいろ色ひかに光ひかっている水みずをあびながら、声こゑをそろえて歌うたをうたっています。若わかものたちは、その姿すがたをうっとりと見みているうちに、いつの間まにかひとりでにぎぶざぶと水みずの中なかへはいつて、その女おんなたちのそばへ泳およいでいかずにはいられませんでした。そして、いくとそれなり、みんな水みずのそこへ沈しずんでしまいました。

例れいのふしぎな黒くろい牛うしを飼かっている百しやう姓うちの家うちには、三にん人の息むすこ子こがいました。三にん人は一ひとり人ひとりずつ、代かわり合あって、牛うしの番ばんをしていました。

或ある夕ゆう方がた一ばん番うえ上むすこの息うし子こは、牛うしを草くさ場ばへつれて出でて、じぶん一人ひとりはじぶん湖こすい水ほうの方うへ出でかけました。すると、ふしぎな黒くろい牛うしは、それを見みて悲かなしそうな声こゑを立てて泣なきました。牛うしはおよしなさいおよしなさいと言いってとめたのでした。

しかし若わかものは、平へい氣きでどどん湖こすい水きしの岸いへ行いつて、草くさの上うえに坐すわっていました。すると間まもなく月つきが出でました。そしてそれと一いっしよに、妖よう女じよの王おうさまの一いっばん上うえの王おう女じよが、水みずの中なかから姿すがたをあらしめました。

色いろのまっ白しろい美うつくしい王おう女じよは、金きん色いろの髪かみに、うす青あおいすいれんの花はな冠かんむりをつけて、かげろ、うでこしらえた、銀ぎん色いろの着き物ものを着きていました。そのかわいらしい唇くちびるは、ちやうど珊さん瑚ごのような赤あかい色いろ

をしていました。若ものは、月の光の中に浮いている、その美しい妖女を見ると、びっくりして、いつまでも目をはなさずに、うっとりで見守っていました。妖女はにこやかにほほえみながら、若ものに言葉をかけました。

「牛飼さん、こちらへ入らっしゃい。一しよに私のお家へ行きましょう。私のお家は、紅宝石と緑柱石のかざりのついた、きれいな水晶の御殿です。窓の外にはきらきら光る貝殻のような、うつくしい花が一ぱいさいています。どうぞ一しよに来て下さい。そうすれば私はあなたのお嫁さんになって上げます。そして二人で楽しく暮しましょう。」こう言って若ものをさそいました。若ものは、

「でも私たちは、あなたのように水の中には住めません。それよりも、私の家へ入らして下さい。私の家はよく日のあたるきれいな丘の上になっていて、庭にはいろんな花がたくさんさいています。朝になると、家中には金のような黄色い日の光が一ぱいさします。それは水の中の紅宝石や緑柱石でかざった御殿よりも、もっと美しいだろうと思います。どうぞ私と一しよに入らして下さい。そして私のお嫁になって下さい。」

こう言って頼みました。

すると妖女は、こちらの岸へすらすらと泳いで来ました。若ものは、よろこんで、妖女のさし

出す手を取って、引き上げようとなりました。すると、人間よりもずっと力のつよい妖女は、いきなり若ものの手をつかんで、

「あっ。」という間に、もう水の底へ引きこんでしまいました。

その翌る晩、二番目の息子は、同じようにして、二ばん目の王女にだまされて、水のそこにしずんでしまいました。

四

そのあくる晩は三ばん目の息子の番でした。

母親は、つづけて二人の息子になくなられたので、三ばん目の息子には、お前だけではどうぞ湖水のそばへいかないでおくれと泣き泣きたのみました。息子は、

「何、だいじょうぶです。私はあすこへいったって、けっして妖女なんぞにまけはしません、安心していて下さい。」

こう言って、晩になると、一人で出ていき、岸の、青い木の下に坐って、銀の笛を吹きはじめました。笛の音は、暗い水の上を渡って、遠くまでひびきました。

すると、やがて月が上るのと一しよに、妖女の王の三ぼん目の王女が、ふうわりと水の上へ出て来ました。

その王女は三人のきょうだいの中で一ばん美しい妖女でした。今、その妖女は、ふさふさした髪に、わすれな草の花冠をつけて、にじでこしらえた、硝子のようにつきとおっている、きらきら光る着物を着て、くびに真珠のくびかざりをつけ、金の帯を結んでいました。若ものはその美しい女を見ると、びっくりして笛をやめて、

「もしもし、妖女さん、ここへ入らっしゃい。どうぞ私のお嫁になって下さい。」とたのみました。妖女は、その若ものが、また海へしむむようになつてはかわいそうだと思つて、

「さあ、早くあちらへおかえりなさい。私たちは人間のお嫁になるわけにはいけません。第一人間は私たちの姿を見るものではありません。」と言いました。若ものは、
「そう言わないで一しよに来てください。私は一人でかえるのはいやです。」と言つて、そのままそこを動くもしませんでした。妖女は、

「どうしてそんなに私に來い來いとおっしゃるのです。私のこの真珠のくびかざりがほしいのですか。さあ、これを上げましょう。それともこの金の帯がお好きなのですか。それではこれも上げましょう。」と言いながら、その両方を、岸の上へ投げました。若ものは、

「いえいえそんなものはいりません。私はあなたがほしいのです。あなたのその珊瑚のような口と星のようなその青い目が好きなのです。私はあなたをもらって、お母さまのところへつれてかえって、小鳥のようにだいにじにして上げたいのです。」

こう言つて、くびかざりや金の帯には見向きもしませんでした。妖女はこの若ものが好きになりました。それで急いで岸へ泳いで来て、両方の手をさし出しました。

若ものはその手を取つて妖女を引き上げようと思いました。

妖女の王さまや、小さな妖女たちは、下からそれを見てびっくりして、あわてて水の中をかけて来て、もう少しのことで妖女の足をつかまえようと思いました。しかし妖女というものは、人間の子をすきだと思つと、たちまち妖女の魔力がなくなつてしまふのでした。ですから、若ものは、それなりやすやすとその妖女を岸へ引き上げて、お家へつれてかえりました。

妖女の王さまや、小さな妖女たちは、だいじな妖女が人間にさらわれてしまったので、それは悔しがつて、いきなり湖水のそこから、大きな大きな大浪を立てて、どんだん岸へぶつてぶつてしました。大浪はまるで悪魔のように荒れ狂つて、夜どおし、ごうごうと岸へ乗り上げ、そこいらの森の立木という立木を、すっかり引きぬいて持っていきました。

若もののふた親は息子がうつくしいお嫁をつれてかえつたので、たいへんによるこんで、すぐ

に御婚禮をさせました。村中の人は、その美しいお嫁さんを見て、びっくりしないものはあり
ませんでした。しかし、家の人でさえも、まさかそれが妖女だろうとは気がつきませんでした。
若い二人は、ちょうど二つの小鳩のように仲よくくらししました。みんなは、二人を見て、世の
中にこれほど仕合せな人はないだろうと思ひました。

妖女はどこを見てもちつとも人間とちがったところはありませんでした。ただよく気をつけて
見ると、妖女が手にさわったものは、かならず、そこだけしめり気がつきました。暑い暑い夏の
日にしおれて頭をかしげている庭の花でも、妖女がそばへ来ると、じきに勢よく頭をもち上
げました。妖女はそのかわいらしいまっ白な指の先から、水のしずくを出して、あわれな花を生
きかえらせるのでした。

若もののお母さまは、よくものに気をつく人でした。そのお母さまだけは、嫁の手がさわった
ところには、きつとしめり気がのこるのを見て、一人でへんだへんだと思ひました。

五

そのうちに、じきに一年たちました。すると妖女のお嫁さんには、男の子が一人生れました。妖女は、人がだれもないときには、そつとたらいに水を入れて、生れたばかりの赤ん坊をその中へ入れました。すると、赤ん坊は魚のように、自由に水の中を泳ぎまわりました。その子どもは丈夫にどんどん大きくなりました。村中の人はみんな、その子のだいたんなことと、水を上手に泳ぐのとは、びっくりしてしまいました。男の子は、湖水を、こちらの岸から一ばん向うの遠い岸まで、さっさと泳いでわたりました。それから、人が何でも湖水の中へ落すと、すぐに水のそこへもぐって、どんなものでも、またたく間にさがし出して来しました。それから、いく年もたつて、男の子は大きな大人になりました。お祖父さんやお祖母さんは、もうとつくになくなってしまいました。お父さんも、もうだいたい年よりになりました。

ところがたった一人、お母さんの妖女だけは、いつまでたつても、お嫁に来たときとちつともかわらず、まるで息子の若ものと同じ年ぐらに見えました。

と、或夏、その地方にはたいへんなひでりがつづきました。村々の島と島はすっかりこげついたように荒れてしまいますし、果物の島も、そこらの木という木も一本ものこらず枯れて

しまいました。それから、どこの家の井戸も、水がきれいに干上ってしまったので、みんなはこまうて大さわぎをしました。

ところが例の湖水だけは、あべこべに、どんどん水がふえて、だんだんと岸の上へあふれ出して来ました。今までひでり、でさわいでいた村の人は、今度はまた急に大水におどろかさされてあわて出しました。

湖水の水は見ているうちに、おそろしい勢で四方にひろがって、今にも村中がのこらず、つかりそうになりました。

若もののお母さんの妖女は、そのままじっとしていると、じぶんたちの命もあぶないので、息子の若ものをつれて水のふちへ行つて、こつそりと、湖水の秘密を話しました。

「この湖水の下には私のお父さまの、王さまが、水晶の御殿の中に住んでいるのです。私たちは三人の姉妹だけれど、三人ともみんなお母さまがちがっていて、一ばんのお姉さまを生んだのは、大空の雲だし、中のお姉さまは地に湧く泉のお腹に生れ、私は草の葉にふる露のお腹に出来たのです。

お父さまの王さまは、それはそれは気のみじかいひとりで、人間と、人間の住んでいるこの地面とがにくくなると、すぐに、私たち三人のお母さまを湖水の底へよびよせて、一と間へおし

こめてしまうのです。それだから、今度も地の上がすっかりひでりになってしまつて、そのかわりに、湖水の水だけがこんなにどんだんふえて来たのです。

これなりほうっておくと、おまえのお父さんもおまえも私も、今にみんな、村中の人と一しよにおぼれて死ななければなりません。

それで、ごくろうだが、お前はこれから急いで湖水の底へ行つて来て下さい。あすこにまるめろという木が生えているでしょう？ あの枝を一本おつて、それを持って水の下へもぐつておいきなさい。そうすると、いろんなお化が出て来て、追いかえそうとするから、そのときにはまるめろの枝でなぐつてやれば、お化はみんなおそれてにげてしまいます。

それからなおずんずんいくと、黄色いすいれんの花がたくさんさいているところへ来ます。その花の向うに、お祖父さまの水晶の御殿があるのです。水晶だから壁もすつかりすきとおつて、中に何千となくならんでいる部屋部屋が一と目に見えます。その部屋は、どれもみんな、大きなダイヤモンドやエメラルドでかざつてあつて、柱にはルビーがいくつもはまっています。部屋の戸口戸口には、羽根の生えた龍が、二ひきずつ番をしています。

その龍がいてもけつしておそれるにはおよびません。まるめろの枝でなぐつてやれば、みんな石になつてしまいます。その部屋部屋をとおりぬけて、どこまでも、まっすぐに進んでいくと、

一ばんしまいに、エメラルドの戸のはまった、りっぱなお部屋へ来ます。そこがお祖父さんの寢室です。

そのお部屋は、天井が真珠で張ってあって、床はすっかり貝のからで出来ています。その中はいると、いくつもの大きな花瓶に、珊瑚のような花と、黄金のような菓物のなっている木とがさしてあります。四方の壁には大きな水草の中からふき出ている、綿のような蜘蛛の網が、一ぱいたれています。その壁かけの上には、小さな赤い色をした蛙が、いくひきもとまっています、青い蜘蛛たちと一しよに、きれいな声で歌をうたっています。

そのお部屋に、長い長い青いひげの生えた王さまが、緑色のびろうどの着物を着て、帯のかわりに、銀色の蛇をまきつけて、椅子にかけています。

その両側には、私の二人のお姉さまが坐って、魚のひれでお父さまをおおいでいます。

おまえが行くと、お父さまやお姉さまは、みんなでおまえのごきげんを取って、宝物のおくらへつれて行って、金や銀やダイヤモンドを上げようと言うにきまっています。しかし、そんなものには一さい手をふれてはいけません。それよりも、そのおくらの中には、小さなびんが十二はいつている、硝子のはこが一つあるから、それをおもらいなさい。

それから、そのつぎには同じおくらの方のかくしてある、さびついた鐘をおもらいなさい。

い。それは、あすこの、あの礼拝堂の鐘なのです。

もし、その鐘だけはやられないと言ったら、そんならまるめるの枝でその鐘をたたくよと言っておどかしてごらんさい。そうすれば、きつとくれます。

十二のびんは、もらったらすぐに口をお開けなさい。そして鐘だけもってかえっていらっしやい。

しかしよく言っておくが、王さまの御殿を出てしまふまでは、けっしてその鐘を鳴らしてはいけませんよ。何かへぶつけてひとりでに鳴ってもいけないのだから、よく気をつけてね。

そして御殿を出て、戸口を少しはなれたら、お前のありたけの力を出して、その鐘を三べんおたたきなさい。分ったね。それでおまえの行った用事はすむのです。」

お母さまはこう言つて、くわしくおしえました。

六

若ものはすぐにまるめるの枝を一枝おつて、湖水の中へとびこみました。すると、いつの間にか、数のしれないほど大ぜいの、おそろしいお化が、ぐるりとまわりをとりまきました。見る

と、頭が三つあって、火のような目がたくさん光っている化物や、頭の先の平ったいのや、円のがいるかと思うと、顔だけ人間でからだが大らかな大とかけになっているのや、そのほか、馬の頭をつけた龍だの、草や木に巻きついて、それを片はしから食ってしまうような、動物見たいな藻草だの、それはそれはいろいろさまざまの大きなお化や小さなお化がうようよむらがつて、若ものをおそいにかかりました。しかし若ものは少しもおそれないで、飛びかかって来るお化を片はしからまるめるの枝でほんほんなぐりつけました。するとお化どもは、みんなちぢみ上つて、どんどんにげてしまいました。

若ものはやがて黄色いすいれんの花の中をとおりぬけて、水晶の御殿の廊下へ上つていききました。

すると、眠っていた小さな妖女たちは、その足音にびっくりして、目をさまし、大あわてにあわてて王さまのところへしらせにきました。

若ものは部屋部屋の戸口に番をしている龍を、片はしから石にして、ずんずん王さまの寝室へ近づきました。王さまは、それを見るときたいへんに怒つて、

「何ものかッ。」と、どなりながら、手にもっていた金のむちで、いきなり若ものの顔をぶちました。

若ものは、すばやく身をかわして、まるめるの枝でそのむちをたたきおとしました。

すると、王さまはおそれて飛びのきました。王さまのそばについていた姉妹二人の妖女は、若もののまえへ来て膝をついて、

「どうぞおゆるしなすって下さいまし。あすこのおくらには、金や銀やダイヤモンドや、ルビーや、珊瑚や真珠が一ぱいはいっておりますから、おいりになるだけお取り下さいまし。そしてもうどうぞ、このままおかえりになって下さいまし。」

こう言つて、若ものをおくらへつれていきました。若ものは、
「私はそんなものがほしくて来たのではない。それよりも、あすこの硝子のはこにはいつているびんを下さい。」と言いました。

妖女は仕方なしにその十二のびんを出してわたししました。若ものはそれをうけとると、すぐに片はしからびんの口を開けました。するとその中から、たくさんの白い形をしたものが、うれしそうに大声をあげてさけびながら、どんどん飛び出して、御殿の外へかけ出しました。それは妖女たちがさらって行った人間のたましいでした。

二人の妖女は若もののきげんをとって、どうぞこちらへ入らして、ごちそうをめし上って下さいと言いました。しかし若ものは、

「それよりもあなた方は、礼拝堂の鐘をこのくらくらにかくしているでしょう？ 早くそれをここへお出しなさい。」と言いました。

すると二人の妖女も、小さな妖女たちも、たちまちぶるぶるふるえながら、大声を上げて泣き出しました。妖女の王さまも、小さくなって、がたがたふるえ出しました。

でも、仕方がないので、二人の妖女は、とうとうその鐘を出してわたしました。若ものは、鐘のさびをきれいにふきおとして、いそいで御殿を出ていきました。そして、御殿から少しはなれるとすぐに、ありたけの力を出して、鐘をじゃアんと鳴らしました。

すると、今までりっぱにたっていた水晶の御殿は、またたく間に、音もたてずに、ほろほろとくだけて、珊瑚の柱も、真珠の天井も、みんな粉になって、水の底の砂の上に着てしまいました。た。

若ものはつづけてもう一つじゃアんと鳴らしました。すると今度は、湖水中のお化や、すべての小さな妖女が、一どに湖水の底へきえてしまいました。

若ものが三度目にじゃアんと鳴らしますと、二ひきのほそい銀色の魚が、くずれおちた御殿のまわりを、ぐるぐるおよぎまわりはじめました。それから一ぴきの大きなこうもりが、こわれおちている煙筒の上へ来てとまりました。それは、二人の王女と、妖女の王さまとが、そういう魚

と、こうもり、とになってしまったのでした。こうもりになったのは妖女の王さまでした。

七

若ものはそのまま鐘をもって、いそいで岸へ上りました。

すると、さっきまでどんだんあふれていた湖水は、いつの間にか、もとのとおりに水が引いていました。若ものはそれを見て安心して、家へかえりかけますと、向うから、それはそれは年を取ったよぼよぼのおじいさんが出て来て、若ものの足下にひざをついて、ぼろぼろと涙をながしながら、いくどもいくどもお礼を言いました。そのおじいさんのくびには、これまで、例のふしぎな黒い牡牛のくびにつけてあった綱がまきついていました。

それは、鐘をぬすんで湖水へ投げこんだ、あの牛飼でした。牛飼は、妖女の王さまの魔法にかかって、こんなよぼよぼのおじいさんになるまで、永い間牛にされていたのが、若ものが鐘を鳴らしてくれたおかげで魔法がやぶれて、やっともとの人間にかえれたのでした。

若ものは、間もなく家へかえって見ますと、だれだか知らない、年を取ったおばあさんがうれしそうに出て来て、

「おお、お前か。よく鐘を鳴らしておくれたのだ。」と言いいい、若ものに頼ずりをしました。若ものはへんな顔をして家の中へはいって、

「母さんはどこにいます。」と、お父さんにたずねました。お父さんは、

「そら、あれがお前の母さんだよ。」と言いいながら、さっきのおばあさんのそばへつれていきました。

若ものはびっくりして、じろじろとおばあさんの顔を見さぐりました。お父さんは、
「おまえがおどろくのは無理もない。じつはおまえの留守の間に、あのわかわかしかった母さんが私（わたし）の目（め）のまえでずんずん年をとって、とうとうこんなに、私（わたし）と同じな年よりになつてしまったのだ。」

それからおまえが鳴らした、一ばんはじめの鐘の音が聞えると、母さんは、もう妖女ではなくてあたりまえの人間になったのだ。これからは三人で楽しくくらしていきましょう。」

こう言って、手を合せて、ながながと神さまにおいのりを上げました。

かたつむり



「かたつむり」 挿画／辻 明利

かたつむり

—

トゥロットのお母^{かあ}ちやまは、朝^{あさ}、いろんな人^{ひと}たちと一しよに、馬車^{ばしや}でそとへお出^でかけになりました。ド・ヴレーさんというよそのおじさまが、馬^{うま}のたづなをとり、もう一人^{ひとり}のおじさまがラッパをならして、みんなでたのしそうに出^でていきました。トゥロットは、ちいさくて、足手^{あして}まといになるので別荘^{べつそう}にのこされました。

トゥロットは、女中^{じよちゆう}のジャンヌと二人^{ふたり}であそぶつもりでいたのですのに、お母^{かあ}ちやまはトゥロットがたいくつするだろうとおもって、先生^{せんせい}のミスに、来てや^きって下^{くだ}さいとおたのみになったものです。トゥロットは、あああと、がっかりしました。お母^{かあ}ちやまは、トゥロットにそうだんなさらないで、いやな人^{ひと}をおよびになるのですからたまりません。

ミスはお庭^{にわ}のおくのベンチにこしかけて、偉大^{いだい}なお鼻^{はな}の上^{うへ}にめがねをのつけて、顔中^{かおじゆう}のすじ一

つさえうごかさないで、自動器械のように、さくさくと二本をめぐっています。トゥロットは、ミスにしかられないように、何かわるくないことをして、時間をつぶさなければなりません。それでさんざんかんがえて、きょうはお庭の中をくわしく見て歩いてみようとおもいつきました。今は、庭もかなりあれていて、砂利だの、やせた芝のごみだの、木のきれはしなぞが、ちらかたりしています。でもまん中どころにあるバラの木だけは、人の目を引きつけないではおきません。とてもすばらしい、いいバラの木で、ときどき花がさきます。きょうも、ちょうど一つ、大きくさきひらいています。トゥロットは、その花をうっとり、いろいろな方がくからながめました。それは何ともいえない、きれいな花です。

と、そのうちに、きゆうにトゥロットの目は、大きくまわって、じつと一ところを見ずえました。ほう、こわいものがある。バラの葉の上にかたつむり、がのそのそうごいています。おお、いやなやつ。うしろにきらきらしたあとをひいて、頭を右にまわしたり左にまわしたり、つを出したり、ひっこめたりしています。ちつとも、えんりよなんかしていやしません。トゥロットは、しばらく、じつと見つめたのちに、するどい声をたててミスをよびました。

「ミス、来てごらんさい。」

ミスは大きな鼻を上げ、二本をかかえて、四またぎでトゥロットのそばへ来ました。

「何なんです。」

トゥロットは、おおこわいこわいというように、ゆびさしました。

「かたつむりじゃありませんか。」

それはわかっていきます。トゥロットが見みたってかたつむりです。

「この軟体動物なんたいどうぶつは植物しょくぶつに害がいを加くわえます。殺ころしてもかまいません。」

トゥロットは、けっこうなおゆるしをいただきました。しかし、こいつをつかまえるのはたまりません。とてもいやなことです。

「とって下くださいな、ミス。」

ミスは、たちまち、けわしい目めつきをしました。

「なぜわたしがそれをつかまえるのです。なぜあなたがつかまえないのです。それがバラを害がいする以上いじょうは、あなたがつかまえるつかまえないは、あなたの幸福こうふくにえいきようするのですよ。あなたの幸福こうふくを保護ほごするのは、あなたでなければならぬはずですよ。」

トゥロットはためいきをつきました。ミスが一い言いい出だしたら、いくら口くちごたえをしたってだめです。で、トゥロットは手てをのべかけて、ひひい、というようにその手てをひっこめました。しかししまいには、とうとうかたつむりのからかの上うへにゆびをつけました。かたつむりは、びっくり

して、すっかり家の中へひっこんでしまいました。もう何も出ては来ません。トゥロットは、ずっと息がらくになりました。しかし、けっきょく同じことでした。いくら何にも出ないからって、じたい、こんな動物は、とてもすきではないからです。

トゥロットは、つかみ上げはしたものの、さてどうしたらいいかと、もじもじしました。ああ、いいことがある。トゥロットは、それをそっと、へい、ごしにおとなりのお庭の中へなげこもうとおもって、手をうしろへふり上げました。すると、ミスが、いきなりくびすじをおさえつけて、こわい声で言いました。

「トゥロット、ひとの不幸のなかにじぶんの幸をもとめることは禁じられています。この動物をおとなりへなげれば、おとなりの植物を食べます。そんなことをするのは不正です。」

「じゃア、どうすればいいの？」

「おつぶしなさい、足で。」

トゥロットは、こまって、手の中のかたつむりを見つめました。足でつぶす……ふう、このからが、ぐしゃりとなるのをかんがえるだけでも、こいつの肉が、くつの底でぐちゃぐちゃになるのをかんがえるだけでも、むねがわるくなって来ます。ああ、井戸の中へなげこもうかしら。そう

トゥロットはそうしようときめかけました。しかし、それも何だか気がひけます。だって、あれなこのかたつむりは、何もわるいことをしたわけではありません。こいつは植物の葉なぞの上をうごいて、日光をあびて、ぐるりと一まわりして来て、お食事をするのがたのしみなのです。きつとそうです、でも、バラを食べる。バラに害をする。やっぱり、ばっしてやらなければいけない。

しかし、だれだってものを食べます。このかたつむりだって、バラの上をはいまわっているのは悪気があってではありません。おなががすいているからです。からだをやしなわなければならぬからです。それをばっしるといのはひどいようです。

でも人は、お牛や羊や小羊を殺します。あんなに、かなしい声でなく、かわいいそうな小羊をも殺します。たのしいうたをうたう森の鳥をでもころします。そんなものたちこそ、かたつむりなんかより、よっぽどおもしろい動物で、そして、わるきなんでものはちっとももってはいません。それでも人はそれをみんな殺すのです。だから、このかたつむりだって……

トゥロットはなげつけて足でふみつぶそうとして、手をふりあげました。でも、やっぱり手を

おろしました。手の中にはからをにぎっているのです。

そうだ、人はよくどんな動物でも殺すけれど、それは食べるために殺すのだ。人間のためにいるから殺すのだ。せんにお父さまは、よそのいたずらっ子が、ばちんで小鳥をうちおとしたときに、その子の耳をおひっぱりになったことがある。お父さまは、たいそうおおこりになった。でも小鳥はくだものをつつきまします。羊だって牛だって草をたべたり、きれいな花をむしって食べたりします。いつかもめ牛が、一どにマーガレットの花を五十ばかりもひっこぬいたことがあります。しかし、そのくらいのことですその牛を殺していいかしら。

トゥロットは、ああでもない、こうでもない、こうでもない、こねくりかえしてかんがえたあげく、どうも、とりとめがつかなくなってきました。すこし泣きたくもなりました。そして、つまるところ、このかたつむりをふみつぶすということは、大きな罪をおかすような気がしてなりません。しかし、こいつを、このままにしておけば、バラの木がいたためられるのです。ああ、どうしたらいいだろうと、トゥロットは、ひどくこまって頭がぼうとなりかけました。

でも、こういうことだけは、ぼんやりなりにも言えるようです。羊を殺すのはわるい。しかし食べるためなら殺してもわるくはない。かたつむりをころすのはわるい。でも食べ……

トゥロットは、びっくりして、じっと手の中のかたつむりをながめました。おいやだ。そんな

なことは、とても出来っこはない。おお、いやだいやだ。

ミスはとおくから、あざけるようなようすをして見えています。トゥロットがどう結末をつけるかと、ひざの上にごほんをのせて、そり身になって見ているのです。

三

そのミスが、ふいに、針にでもつきさされたように、とび上り、かなきりごえをはり上げて、ご本をすつとぼしてとんで来ました。

トゥロットは、かたつむりを手でぐいと、のどのおくにおしこんだのです。そして、目をつぶってのみこんでしまったのです。

「まあ、とんでもない。……ばかなことを。……どうしてそんなむちやをするのです。ほんとにあきらめた。なんておそろしいことをするのです。」

ミスはひっくりかえるほどびっくりして、お部屋へかえっても、フランス語とイギリス語を、ごっちゃに、くちびるの上でぶつけ合えました。トゥロットは平気で、にわか雨が来たのを、けろんとして見ていました。

しかし、じつをいうと、胃ぶくろの中がどうなるか、それがすこし気がかりでした。いやにグウグウト、へんな音がします。きつとかたつむりが、のそのそ歩いているのにちがいありません。こうおもうとすこし胸がむかついて来ました。

でも、まあそれだけのことです。かたつむりはどうせ消化されてしまうでしょう。

そこでトゥロットは、雨があがると、またお庭へ出ました。そして、まえよりもっとふかい愛情をもってバラを見入りました。あわれなかたつむりを、むごたらしくふみつぶしもせず、そしてこのうつくしいバラをも、すっかり保護してやったことが、トゥロットにはとてとてもとてとてもくいでした。

ぶくぶく 長久火の目小僧



BUKUBUKU-NAGANAGA-HINOMEKOZO

「ぶくぶく長々火の目小僧」

挿画／辻邊 ひなた

ぶくぶく長々火の目小僧

—

これは昔も昔も大昔のお話です。そのじぶんは今とすつかりちがつて、鼠でも靴をはいて歩いていました。そして猫を片はしから取って食べました。ろばも剣をつるしていばっていました。にわとりは、しじゅう犬をおっかけまわしていじめていました。

こんなに、何でもものがさかさまだったときのことですから、今から言えば、それこそ昔も昔も大昔の、そのまたずっとずっと昔のお話です。だから、いろんなおかしなことばかり出て来ます。しかし、けっしてうそではありません。

そのころ或国の王さまに、美しい王女がありました。その王女を世界中の王さまや王子が、だれもかれもお嫁にほしがって、入りかわりもらいに来しました。

しかし王女は、どんなりっぱな人のところから話があっても、厭だ、と言って、はねつけてし

まいりました。

世界中の王さまや王子たちは、それでもまだこりないで、なんども出かけて来ました。

王女は、うるさくてたまらないものですから、とうとうお父さまの王さまに向って、「ではだれでも三晩の間、私をお部屋の外へ出さないように、寝ずの番をして見せる人がありましたら、その方のお嫁になりましょう。」と言いました。

王さまはさっそくそのことを世界中へお知らせになりました。そのかわり、もし途中で少しも眠りをする、すぐにきり殺してしまふから、そのつもりでおいで下さいとお言いになりました。

すると方々の王さまや王子たちは、何だ、そんなことなら、だれにだって出来ると言って、どんどんおしかけて来ました。

ところが、夜になって、王女のお部屋へとおされて、しばらく王女の顔を見ていると、どんな人でもついうとうと眠くなって、いつの間にかぐうぐう寝こんでしまいました。それで、来る人来る人が、一人ものこらず、みんな王さまにきり殺されてしまいました。

すると、或王さまのところに、鹿のようにきれいな、そしてたかのように勇ましい、年わかい王子がいました。この王子がその話を聞いて、私ならきつと眠らないで番をして見せる、一つ行っ

てためして来ようと思ひました。

しかしお父さまの王さまは、王子がうっかり眠りでもしたらたいへんですから、いやいやそれはいけないと言つて、どうしてもおゆるしになりませんでした。そうなるとう王子はなおさらいきたくて、毎日毎日、

「どうかいかせて下さいまし。たった三晩ぐらいのことですもの。かならず眠りはいたしません。」
と言いながら、王さまにつきまとつて、ねだりました。さすがの王さまもとうとう根まけをなすつて、それでは、どうなりとするがいいと、しかたなしにこう仰いました。

王子は大よろこびで、お金入れへお金をどっさり入れて、それから、よく切れるりっぱな剣をつるすが早いか、お供もつれないで、大勇みに勇んで出かけました。

二

王子は遠い遠い長い道をどんどん急いでいきました。

すると二日目に、途中で一人のふとつた男に出あいました。

その男はよっぽどからだがおもいと思ひ、足を引きずるようにして、のっそりのっそり歩い

ていました。

「もしもし、おまえさんはどこまでいくのです。」と、王子はその男に話しかけました。

「私は、仕合せというものをさがしに世界中を歩いでいるのでございます。」と、そのふとつた男がこたえました。

「一たいあなたの商ばいは何です。」と王子は聞きました。

「私にはこれという商ばいはありません。ただ人の出来ないことがたった一つ出来るだけでございます。」

「では、その人に出出来ないことというのはどんなことです。」

「なに、たいしたことではございません。私はぶくぶくという名前前で、いつでも勝手なときに、ひとりでにからだがゴムの袋のようにぶくぶくくれます。まず一聯隊ぐらいの兵たいなら、すつかり腹の中へはいくらいいくれます。」

ふとつた男はこう言つて、にたにた笑いながら、いきなりふうふうふくれ出して、またたく間に往来一ぱいにつかえるくらいの大男になって見せました。王子はびっくりして、「ほほう、これはちようほうな男だ。どうです、きようから私のお供になつてくれませんか。私もちようど、お前さんと同じように、仕合せをさがして歩いでいるのだから。」と、聞いて見

ました。するとぶくぶくはよろこんで、

「どうぞおともにつけて下さいまし。何よりの仕合せでございます。」と言って、すぐに家来になりました。

二人はそれからしばらく、てくてく歩いていきますと、こんどは向うから、まるで棒のようにやせた、ひよろ長い男が出て来ました。王子は、

「おや、へんなやつが来たぞ。」と思ひながらそばへいって、

「もしもし、おまえさんはどこまでいくのです。」と聞きました。

「私は世界中を歩くのです。」と、その棒が言いました。

「一たいおまえさんは何商ばいのです。」と王子は聞きました。

「私には商ばいはありません。ただ人の出来ないことが、たった一つ出来るだけでございます。

私の名前は長々と申します。私がちよいと、こう爪立ちをしますと、すうッと天まで手がと

どきます。それから一と足で一里さきまでまたげます。このとおりです。」

棒はこう言うが早いか、たちまちするとからだをのぼして、おやツという間に、もう高い高い雲の中へ頭をつっこんでしまいました。そして、ひよいひよいひよいと五足六足歩いたと思ひますともう五、六里向うへとんでいました。それからまたひよいひよいひよいと、またたく間

に目の前へかえって来ました。王子は、

「いや、これは便利な男がいたものだ。」と、すっかりかんしんして、

「これから私のお供になってくれないか。」と言いました。

「へいへい、それはねがつてもない幸でございます。」と、棒は大喜びで、すぐに家来になりました。王子は二人をつれて、またどんどんいきました。そして間もなく、ある大きな森の中へ来ました。

するとそこに、ただだか一人の男がいて、ぐるりの大きな木を片ツぱしからひきぬいては、どんどんつみ上げていました。

王子は、

「もしもし、それをつみ上げてどうするのです。」と聞きました。

するとその男は、

「なアに、ただ目から火をふいて、この丸太を一どきにもやすんです。」と言いながら、じつと目をして、その山のようにつみかさねた木をにらみつけました。すると、両方の目の中から、しゆうしゆうと、長い焰がふき出て、それだけの丸太をまたたく間に灰にしてしまいました。

「ほほう、これはすばらしい。どうです。私のお供になりませんか。」と王子は言いました。

「はいはい、どうぞおねがいたします。」と、その男も家来になりました。この男は火の目小僧という名まえでした。

三

王子はこんなめずらしい男を三人まで家来にかかえたので、大とくいになって、どんどん歩いていきました。そのかわりこれまでとちがって、三人をやしなうのに、大そうなお金がかかりました。だって火の目小僧と長々の二人は、ただあたりまえの人が食べるだけしか食べませんでしたが、もう一人のぶくぶくは、お腹がいくらでもひろがるので食べるも食べるも一どに牛肉の千貫目やパンの千本ぐらいは、どこへ入ったかわからないくらいです。そんな男に腹一ぱい食べさせるには、とても一とおりのお金ではすみません。しかし王子は、ちっともいやな顔をしないで、食べただけ食べさせてどんどんお金をはらいました。

そのうちにやっとなれの王女のいる町へ着きました。王子はそのときはじめて、じぶんがはるばるここまで出て来たわけを三人に話して聞かせました。そしてどうか三晩とも眠らないで番をしとおしたいものだ、そしてうまく王女をお嫁にもらったら、おまえたちにはどっさりほうびを

やるといいました。三人は、それを聞いて、

「これまでだれにも出来なかったことをして見せれば、第一世界中の人にもいばれます。私も一しようけんめいにお手つだいいたします。」と、勇み立って言いました。

王子は三人にりっぱな着物を買って着せました。そして夜になると、みんなをつれて王さまの御殿へ行って、どうか私に、王女さまの番をさせて下さいましと申しこみました。

王さまはころよく王子と家来とを一と間におとおしになりました。

王子はそのまえに、三人に向って、どんなことがあっても、私がだれだということは人にしゃべらないように、それから三人が、いざというとき、じきにすらすらのびたり、ぶくぶくふくれたり、火をふいたりすることも、かたくひみつにしておくように言いふくめておきました。

王さまは王子に向って、

「もしうっかり眠りをして、王女を部屋からがすと、おまえた四人の命を取るがそれでもいいか。」と、ねんをおおしになりました。

「それはしようちしております。」と王子は答えました。

王さまは、よせばいいのと言わなければかりにたにお笑いになって、

「それでは、こちらへお出でなさい。」とおっしゃりながら、王子を、王女のお部屋へおつれにな

りました。王女はにこにこしながら出て来て、あいそうよく王子をむかえ入れました。王子は王女があんまりうつくしいので、目がくらんで、しばらくぼんやり立ちつくしていました。王女は、「どうぞ。」と言って、一ばんきれいなすのころへつれていきました。

王さまは二人をそこにのこして、あちらへいっておしまいになりました。

その間にぶくぶくは、そつと来て、王女のお部屋の戸の外へしやがみしました。それと一しよに、長々と火の目小僧とは、こつそりと外へまわってお部屋の下へかくれました。

王女は王子に向っているんなお話をしました。王子はそのお相手をしながら、一生けんめいに王女のそぶりに気をつけていました。するとやがて王女は、ふと話をやめて、そのままだまっしてしまいました。そしてしばらくたつと、

「ああねむつたい。なんだかまっ赤なもの、もうツと、まぶたの上へかぶさるような気がします。しばらくごめん下さい。」と言いなながら、いきなり長いすの上に横になって、目をつぶってしまいました。

四

王子はそれでもけっしてゆだんをしないで、じつと王女のようにすを見ていました。すると王女は間もなく、すやすやと寝入ってしまいました。

王子はその長いすのそばのテーブルのところへいって、ひじをついて、手のひらでおとがいをささえながら、目ばたきもしないで、王女の顔を見つめていました。

ところがそのうちに、王子はだんだんと、ひとりでにまぶたがおもくなつて、いつの間にかこくりこくりといねむりはじめました。ぶくぶくや長々や、火の目小僧は、さつきから一生けんめいに耳をすましていました。

ところがちやうど王子が眠りかけるころになると、この三人も、同じように眠けがさして、とうとうこくりこくりと寝てしまいました。

王女は王子がぐっすりねいつたのをかんづくのと、にっこり笑つて、おき上りました。じつはさつきから、上手に寝たふりをして、王子が寝入るのをねらっていたのでした。

そしておき上るといきなり、ひよいと小さな鳩になつて窓からとび出しました。王女はこういふうじゆうじぎいな魔法の力をもっているのです。これまで、どんな人が番に来て、みんな王女

をにがしたわけが、これでおわかりになったでしょう。

ところが今夜にかぎって、王女はついやりそこなって、まんまと火の目小僧と長々に見つかってしまいました。それは鳩になって、窓からとび出すはずみに、暗がりの中にござんでいた長々の頭の髪へ、ぱたりと羽根をぶつけたからです。長々は、びっくりして目をあけて、

「おや、だれかにげ出したぞ。」と、どなりました。

火の目小僧も目をさまして、

「どっちだどっちだ。」と言いながら、目の玉に力を入れて、くるくる四方八方をにらみまわしました。するとそのたんびに、目の中からしゅうしゅうと、長い焰がとび出しました。そのため、にげかけていた鳩は、たちまち二つのつばさをまっ黒に焼きこがされてしまいました。

鳩はびっくりして、じきそばにあった高い木の先へとまりました。

そうすると長々は、たちまちするするからだをのぼして、その鳩をひよいと両手でつかまえてしまいました。

鳩はしかたなしに、もとの王女のすがたになって、長々につれられて、お部屋へかえりました。そんなことはちっとも知らないで、ぐうぐう寝ていた王子は、長々にゆり起されて、びっくりして目をさしました。

こんなわけで、王女はとうとうそのばんはにげ出すことが出来ませんでした。

五

あくる朝王さまは、王子がちゃんと王女の番をして、昨夜のままお部屋に坐っているのを見て、びっくりなさいました。

しかし、ともかく、王女をにがさないで、一と晩中番をしたのですから、どうするわけにもいきません。

王さまはしかたなしに、王子たちをていねいにおもてなしになって、その晩、もう一ど番をさせてごらんになりました。

そうするとその晩も、王子はまた眠りこんでしまいました。長々とぶくぶくと火の目小僧の三人も、やっぱり同じようにいねむりをはじめました。

王女はそれを見すまして、今夜もまた鳩になって、部屋をとび出しました。

するとやはり同じように、長々の頭にぶつかり、火の目小僧に羽根をやかれて、又長々につかまってしまいました。

王さまはあくる朝になると、またびっくりなさいました。

そんなことで、三日目の今夜、また王女がしくじったら、たった一人の王女を、どのだれとも分らない、あの若ものに取りられてしまうのですから、王さまも、これはゆだんがならないとおも思ひになりました。

それで王女をこっそりとおよびになつて、

「今晚は魔法のおくの手をすっかり出して、かならずにげ出しておくれ。もし、しくじったら、おまえもただではおかないぞ。」ときびしくお言いわたしになりました。

王女は、

「かしこまりました。今晚こそは、きつとあの人たちをまかしてやります。」と言いました。

その間に、王子はまたぶくぶくと長々と火の目小僧の三人をあつめて、今晚の手くばりをきめました。

「ではすっかりたのむよ。下手をすると、私ばかりではない、おまえたち三人のくびもとぶのだよ。」と、王子は笑いながらこう言いました。長々たち三人は、「なに、だいじょうぶでございます。」と、すましていました。

そのうちにすっかり日がくれました。

王子はそれと一しよに、王女のお部屋へいって、昨夜と同じように、王女と向き合っています、かけました。

王子はもう今晚こそは、どんなことがあっても眠らないつもりで、息をのんで番をしていました。

すると王女は、しばらくたつと、またれいのように、

「ああねむいこと。まあ、どうしてこんなにねむくなるのでしょうか。何だか、まっ赤なものが、もうつと両方の目の上にかぶさるような気がします。ちよつとやすみますからごめん下さい。」
と言いながら、ふらふらと立ち上つて、長いすの上に横になるなりもうすやすやと寝入つてしまいました。

王子は今晚はその手にのるものかと思いながら、テーブルに両ひじをついて、たかのように目を光らせて、一生けんめいに王女の顔を見すえていました。するとそのうちに、王子はまたひとりで、まぶたがおもたくなつて、とうとう今晚もまたねこんでしまいました。

すると、ちよつどおなじときに、あれほどいばっていた長々や、ぶくぶくや、火の目小僧も、みんな一だにこくりこくりといねむりはじめました。

王女はさつきから、上手にねたふりをして、王子たちが寝入るのをまっていたのでした。

王子はぐうぐうといびきをかいて、まるで石のようにねむりこんでいます。

王女はそれを見ると、にこにこ笑いながら、そうっとおき上りました。そしてこんどこそは、だれにも感づかれないように、ひよいと小さな蠅にばけて、すうっと窓からとび出しました。

ところが、うんわると、今晚もそのはずみに、ひよいと火の目小僧の鼻の先にぶつかりました。火の目小僧はびっくりして、

「しまった。にげたぞ。」と言いながら、いきなりしゅうしゅうと両方の目から火をふきました。すると、はたはたちまち小さな魚にばけて、向うの泉の中へとびこみました。火の目小僧はそれを見とどけて、長々とぶくぶくと王子とをよびおこしました。みんなはびっくりして、はねおきて、火の目小僧と一しよに、その泉のそばへかけつけました。

六

いって見ると、その泉というのは、まるでそこも見えないほどの深い深い泉でした。ところが長々は、

「なあに、おれがつかまえて見せる。」と言いながら、水の中へ頭をつきこんで、するするとか

らだをそ、こまでのぼしました。そして両手でもって、水のそ、こをすみからすみまでのこらずかきさがしました。すると魚はどこへかくれているのか、いくらかきまわしても、さっぱり見つかりません。ぶくぶくはそれを見て、

「おい、おどき。いいことがある。」と言いながら、長々をもとのからだにちぢめさせて、どぶんと泉の中へ入りました。そして、いきなり、ふうふうとからだをふくらして、とうとう泉一ぱいにふくらんでしまいました。

ですから、水はどんだんあふれ出して、大水のようにあたり一ぱいにひろがりました。王子とあとの二人は、その水の中をさがしまわりました。しかし魚はどこへいったものか、いくらさがしてもかげも見えません。火の目小僧はじれったがって、

「おいおいだめだよ、ぶくぶく。こんどはおれの番だ。」と言いました。ぶくぶくはしかたなしにいそいでからだをちぢめました。それと一しよに、水は一どにもとの泉へかえりました。

火の目小僧は、水がすっかりもとのところへ入ってしまうと、

「よし、来た。」と言いながら、大きく目をむいて、じいっと水の上をにらみつけました。すると二つの目からは、例のように長い焰がしゅうしゅうとび出しました。火の目小僧は、息をもつかないでいつまでもじいっとにらみつけににらんでいました。

ですからしまいには、泉いずみ一いっぱいの水みづが、その焔ほのおでぐらぐらとわきたって、ちようど大釜おおがまのお湯ゆがふきこぼれるように、土つちの上うへへふき上あがって来きました。そのうちに、小ちいさな一いっぴきの魚さかなが、半煮はんにえになって、ひよこりと、地面じめんへはね上あがりました。魚さかなはもうあつくてあつくてたまらないので、土つちにふれると、すぐにもとの王女おうじよになりました。王子おうじは大よろこびで、そばへかけつけて、

「どうぞ、とうとう三晩みばんともちやんとつかまえましたでしょう。ではおやくそくのとおり、あなたは私わたしのものですよ。」と言いいました。王女おうじよはまっ赤かな顔かおをして、

「どうぞおつれになって下くださいまし。お父とうさまもあきらめて、あなたのおつしやるとおりになりますでしょう。」と言いいました。王子おうじはそのときはじめて、

「じつは私わたしは、これこれこういう王子おうじです。」と言いってじぶんのことを話はなしました。王女おうじよはそれを聞きかないさきから、だれとも分わからないその王子おうじの立派りっぱな人柄ひとがらに、ないないかんしんしていました。それがりっぱな王子おうじだと分わかったので、おむこさんとして何なに一つ申もうし分ぶんがありません。王女おうじよは大よろこびで夜よがあけるとすぐに王おうさまのところへいって、ゆうべのことをのこらずお話はなしました。

すると王おうさまは、たった一人ひとりの王女おうじよを、しらない人ひとにしてくれるのがおしくておしくてたまらないものですから、王子おうじにあうと、王おうさまらしくもなく二にまい舌したをつかって、

「あの子はだれにもやることは出来ない。」

と、おおこりにおこつてこうおっしゃいました。

しかし王子は、そんなうそつきの王さまには相手にならないで、三人の家に言いふくめて、王さまのすきまをねらつて、王女を引っかかえさせて、おおいそぎで御殿を出てしまいました。

七

王さまは、ふと見ると王女がいつの間にかいなくなっているものですから、

「おや、たいへんだ。あの四人のものが、さらつていったにちがいない。追つかけてうばいかえして来い。さあ早く早く。」とまっ赤になつて御命令になりました。すると王さまの兵たいは、

「そらいけ。」と言うが早いか、何千人という大人数が、一どに馬にとびのつて、大風のように、びゅうびゅうかけだしました。

王子たちは王女の手を引いて、遠くまでにげて来ました。するとやがて後の方で、ぼかぼかばかりかとおおきなひづめの音が聞え出しました。王子は走りながら、

「おいおい、何だろう。」と三人の家に言いました。

「おや、兵たいのようですよ。ああ、兵たいだ兵たいだ。馬に乗った兵たいが大風のようにとんで来ます。」

火の目小僧は後を見るなりこう言いました。王女はそれを聞いて、

「では、きつと、お父さまの兵たいが、あなたがたを殺しにまいりましたのでしよう。ああいいことがございます。ちよつとおまち下さいまし。」と、息を切らしながらこう言つて、王子たちに手をはなしてもらいました。そのうちに騎兵は、

「うわあッ。」と、ときの声を上げて、王子たちのじき後まで追いつめて来しました。王女は王子にけががあつてはたいへんだと思つて、おおいそぎで、かぶっている顔かけを引きはなしました。そのときちようど、風は兵たいの方へ向けてふいていました。王女はその顔かけをいそいで後へなげつけて、

「さあ、生えておくれ。この顔かけの糸の数ほど生えておくれ。」と、おまじないの言葉をとなえました。すると、たちまちみんなのじき後へ、大きな木が、一どにぎっしり生えのびて、またたく間に大きな大森林が出来ました。兵たいたちは、

「おやッ。」と言つてまごまごしながら、その木の間をむりやりにくぐりぬけようともがきました。王子と三人の家来とは、そのひまに、王女をつれて一しよけんめいににげのびました。

みんなはしばらく、かけつづけにかけた後、やっと安心して一と休みしました。王子は、

「どうだ、まだ追っかけて来るか見てごらん。」と、火の目小僧に言いつけました。火の目小僧は、さっそくのび上って見ますと、兵たいが今やつと、さっきの林をくぐりぬけて、またどんどん砂けむりを立ててかけつけて来るのが見えました。王子は、

「では、ぐずぐずしてはいられない。さあにげよう。」と言って立ち上りました。すると王女は、「いえいえだじょうぶでございます。もうすこし休んで入らっしゃいます。」と言いながら、目から涙を一としずくながして、

「さあ、涙、大きな河になっておくれ。」と言いました。するとたちまちそこへ大きな大きな河ができました。王子はそれで安心して、また王女の手をとってにげました。

みんなは、長い間、どんどん走りつづけに走って、もうこれならだじょうぶだろうと思いながらしばらく休みました。

「どうだ、まだ追っかけて来るか。」と、王子はもう一ど火の目小僧に見させました。火の目小僧は後を向いて爪立ちをして、

「おや、とうとうあの河をわたって、また追っかけてまいります。」と言いました。王女はそれを聞くと、

「どういたしましょう。もう私の力ではどうすることも出来ません。どうかして、この昼を夜にする工夫はないものでございましょうか。」と言いました。すると長々は、

「ああ、それならどうさもありません。」と言いながら、からだをするするのぼしました。そして、あつと言う間に天までのび上りました。みんなはびつくりして、何をするのかと見えていますと、長々はたかいたかい雲の中で帽子をぬいで、その帽子を、ひよいとお日さまの片がわへかぶせました。すると下界は王子たちのいる方に光がさすだけで、兵たいがかけて来る方の半分は、ふいに夜のようにまっくらになってしまいました。

王子たちは、兵たいが暗がりでもごまごましている間に、

「さあ、走れ走れ。」と言いながら、ふたたび王女の手をとって、おおいそぎでかけ出しました。長々は王子たちが、いいかげん遠くまでにげのびたのを見すまして、ひよいと帽子をはずして、頭にかぶりしました。そして一と足で一里またげる、その長い足で、ひよいひよいひよいと、またたく間に王子のそばへ追いつきました。

それからみんなは、また一しよに走りつづけました。そのうちに向うの方に、王子の御殿のある町が見え出しました。王子は、

「どうだ、兵たいはもうひきかえしたか。ちよつと見てくれ。」と、火の目小僧に言いました。火

の目小僧はまた後をふりかえつて、

「おや、またじきあすこに砂烟が見えます。これはたいへんだ。」とあわてました。すると、ぶくぶくが、

「じゃアみなさんはかまわずおにげ下さい。私がここにのこつて、ちゃんとしませうから。」と、王子たちをさきにながしました。

八

ぶくぶくはそのあとへ一人で立ちはだかたまま、ぶくぶくぶくぶくと、見る見るうちに大きな大きな大山のようにふくれ上りました。そしてその大きな口をぱくりとあいて、

「さあ来い。」と言いながら、ゆうゆうとまちかまえていました。兵たいたちは、

「うわあ、うわあ。」と、ときの声を上げて、死にものぐるいでかけつけて来ました。みんなは、もうこうなれば、たとい火の中をくぐつても王女さまを取りかえして見せる、もし相手が王女をわたさないと言うなら、すぐに町をせめかこんで、町中のものを一人も残さず斬り殺してやろうと、こう腹をきめているのでした。

間もなく兵たいたちは、ぶくぶくの口のまん前までかけて来ました。するとみんなは火の子のようにあわて切っているものですから、ぶくぶくの大きな口を町の入口の門とまちがえて、片はしからどんだんだんその口の中へとびこみました。ぶくぶくはその何千人という兵たいがすつかりお腹の中へはいってしまおうと、

「ははは。これでよし。」と笑いながら、そのままのそりのそりと町の方へ歩いていきました。

ぶくぶくはそれだけの兵たいを馬ぐるみお腹へ入れたのですから、少し歩き悪くはありました。が、それでも大またにのこのこと歩いて町へはいました。

町中では王子がうまく寝ずの番をして、世界一のりっぱな王女をお嫁にもらってかえって来たというので、みんな大よろこびで、おどりさわぎました。王子はぶくぶくの姿を見ると、

「おお、かえったか。あの兵たいたちはどうした。」と聞きました。ぶくぶくはにたにた笑いながら大きなお腹をぼんとたたいて、

「このとおりでございます。みんなの中へ入れてしまいました。」と言いました。王子は、はっはと笑って、

「もういいから出しておやりよ。」と言いました。

「そうですね。兵たいや馬はこなれがわるいでしょうね。あとで腹が下るとやっかいですから出

してしましましょう。」

ぶくぶくはこう言いって、わざわざ町まちのまん中の大きな広場ひろばまで歩いていきました。町中まちじゅうのものは大山おおやまのような大きな大男おおおとこが来たのでびくりにして、わいわい言いながら、みんなでぞろぞろ後あとへついていきました。ぶくぶくは広場ひろばへ来ると、

「さあ、みんなどけどけ、あぶないぞあぶないぞ。」と言いいながら、大通りおおどおにたかっている人ひとを追おいはらいました。そして両手りょうてで横腹よこはらをおさえて、

「ゴホンゴホンゴホン。」と、せきをしました。するとそのたんびに腹はらの中から騎兵きへいが十人にんずつかたまたまって、すぼんすぼんとび出だしました。町まちのものは、

「うわアうわア。」とおもしろががって、みんなで手てをたたいてはやし立たてました。ころがり出でた騎兵きへいたちは、死しんだようにままつ青あおな顔かおをして、あとをも見みずににげていきました。ぶくぶくは、

「ゴホンゴホン、ゴホンゴホン。」と、せきつづけにせいて、とうとう何千人なんにんという騎兵きへいを一人ひとりもものこさずはき出だしてしまいました。その一いっばんしまいににとび出だした兵へいたいは、戸とまどいをして、ぶくぶくの鼻はなの穴あなへとびこんで、もがいていました。ぶくぶくは、

「ちよッ、うるさいね。」と言いって、クシヤンと、くしゃみをしました。するとその兵へいたいは、ぱたんと鼻はなの穴あなからふきとばされて、馬うまと一いっしよにころころがりながらにげていきました。

御殿では王子と王女との御婚礼の式をあげることになりました。

それで、王女のお父さまの王さまにも来ていただかないといけないというので、王子はいそいで長々をおつかいに出しました。長々は例の足でひよいひよいと、一どに一里ずつまいで、じきに向うの王さまの御殿へ着きました。

見ると、さっきの兵たいたちは、馬でにげて行つたくせに、まだ一人もかえりついていませんでした。

長々は先に着いたのを幸に、王さまに向つて、兵たいの大将の命を許しておやりになるように、よくおねがいでやりました。それでないと、大将は王女をとりかえさないうで空手にかえつて来たばつに、きつとくびをきられるにきまつていました。

王さまは、王女のお婿さんがそういう立派な王子だったと聞くと、おおよろこびで、すぐにおもをつれて、王子のところへ出て入らっしゃいました。それで御婚礼の式もどこおりなくすみしました。

王子をたすけていろんな大でがらをした、ぶくぶくと長々と火の目小僧の三人は、大そうなごほうびをもらいました。

星
の
女



「星の女」 挿画／原 詩音

星ほしの女おんな

一

姉妹三人の星の女が、毎晩、美しい下界を見るたびに、あすこへ下りて見たいと言いいい
ていました。

三人は或晩、森のまん中に、すいれんの一ぱいさいている、きれいな泉があるのを見つけまし
た。三人ともその水の中へつかつて見たいと思いましたが、そこまで下りていく手だてがありま
せん。三人は夜どおしその泉を見つめて、ためいきをついていました。

そのあくる晩も、三人はまたその泉ばかり見下していました。泉は、ゆうべよりも、なお一
そううつくしく見えました。

「ああ下りていきたい。一どでいいからあの泉であびて来たい。」と、一ばん上の姉が言いまし
た。下の二人も同じように下りたいと言いました。

すると、高い山のまを歩くのが大好きな、月の夫人がそれを聞いて、「そんなにいきたければ、蜘蛛の王さまにそう言っ、蜘蛛の糸をつたわって下しておもらいなさい。」と言いました。

蜘蛛の王さまは、いつものように、網の中にすわって、耳をすましていました。星の女たちは、その蜘蛛の王さまにたのみました。蜘蛛の王さまは、

「さあさあ、下りていらっしやい。私の糸は空気のようにかるいけれど、つよいことは鋼と同じです。」と言いました。

三人はその糸につかまって、一人ずつ、するすると泉のそばへ下りて来ました。

泉の面には、月の光が一面にさして、すいれんの花のなつかしい香がみなぎっています。三人はきらびやかな星の着物をぬいで、そっと水の中へはいりました。

すがすがしい、冷たい水でした。三人はしずかにすいれんの花をかきわけていきました。三人のはだには、水のしずくが真珠のようにきらきら光りました。

と、その泉のじきそばに、或若い獵人が寝ていました。三人はそれとは気がつかないでにこにこよろこんで水を浴びていました。うとうと寝ていた獵人は、三人の天の女が、泉のすいれんの花をゆるがせて、水の中を歩いている夢を見て、ふと目をさしました。ひじをたてて泉の

面おもてを見ますと、まっ青さおにさしている月つきの光ひかりの中で、三人にんの美うつくしい女おんなが、たのしそうに水みずを浴あびています。

獵人かりゆうとはこっそりと、泉いずみの岸きしをつたわって、三人にんの着きものがぬいであるところへいききました。そして、その中なかの一いばんきれいな着きものを手てに取とって見みました。それは、金きんと銀ぎんとの糸いとでおって、いろさまさまの宝ほう石せきを使つかって縫ぬいかざりをした、立り派っぱな着きもので、左ひだりの胸むねのところには、心しん臓ぞうの形かたちをした大おおきな赤あかい紅ルビー宝ひか石ひかが光ひかっていました。

獵人かりゆうとは、その着き物ものをかかえて、もとのところへかえって、かくれていました。

三人にんの星ほしの女おんなはそんなことは夢ゆめにもしらないで、永ながい間あいだ水みづをあびて楽たのしんでいました。そのうちに、だんだんと夜よあけぢかくなりました。すると、蜘蛛くもの王おうさまが空そらの上うへから、「もうおかえりなさい。お日ひさまがお出でましになると、お日ひさまのお馬うまが糸いとを足あしで踏ふみ切きります。早く空そらへお上あがりなさい。」と言いいました。

星ほしの女おんなはそれを聞きくと、いそいで岸きしへ上あがりました。二人ふたりの姉あねはすぐに着き物ものを着きて、目めに見みえぬ蜘蛛くもの糸いとの梯はし子こを上のぼって、大おお空ぞらへかえっていきました。

三人にんの中なかで一いばん美うつくしい下したの妹いもうとは、一いしよにぬいでおいた着き物ものがないのでびっくりしました。それがなければ空そらへかえることが出で来きないので、一いしようけんめいにあたりをさがしましたが、

見つかりません。

そのうちに、お日さまがお出ましになりました。お日さまのお馬は、蜘蛛の糸を足でふみ切つてしまいました。

星の女はとほうにくれて、草の上につぶして泣いていました。そうすると森の鳥がおきて来て、

「あなたのうつくしいおめしものは、わかい獵人が取っていきました。その獵人は、あすこの木の下で、寝たふりをしています。」

こう、さえずって星の女におしえました。星の女はそれを聞くと、すいれんの花をつなぎ合せて花の着物をこしらえて、それからからだをつつんで、獵人のところへいきました。そして、

「どうか私の金と銀の着物をかえして下さい。そのかわりには、あなたのおのぞみになることは何でもしてあげます。」と、泣き泣きたのみました。獵人は、

「私は何にもほしくはない。あなたが私のお嫁になってくれれば何にもいらぬ。」と言いました。

星の女は、着物をとり上げられては、もう下界をはなれる魔力もなくなったので、しかたなしに獵人のお嫁になりました。

狩人は、星の女をだいにに可愛がりました。星の女の姿は、すいれんの花のように美しく、その声は、どんな小鳥の声よりも、もっとやさしくひびきました。

狩人は毎日狩に出て、食べものを取って来ました。そして星の女に、その日のいろいろの楽しいお話をしました。

しかし星の女は、そういう中でも、大空のお家を忘れることが出来ませんでした。女は、月のでる晩には、一人ですいれんの泉のそばに出て、大空を見ては泣きました。せめて二人の姉の星が、もう一ど下りて来てくれればいいのにと、待ちこがれていましたが、二人はだまって青い目をまばたいているきりで、毎晩蜘蛛の王さまが糸を下しても、ちっとも下りて来ようとはしませんでした。

二

そのうちに、星の女には、つきつきに男の子が三人も生まれました。星の女はその子たちが大きくなるのを、ただ一つの楽しみにして暮しました。

そのつぎには、かわいらしい女の子が生まれました。星の女には、その女の子がかわいくって

かわいくつてたまりませんでした。

或日あるひ獵人かりゆうどの生れた遠い町とおまちからはるばる使が来つかいました。獵人のお父さまが病氣で死にかかつているという知らせです。獵人はびっくりして、

「私はこれからすぐいかなければならない。」と言いました。星の女はそれを聞いて、
「でもその長い旅の途中で、わるい獣にお殺されになったらどうなさいます。」と言って泣きました。獵人は星の女をなだめて、

「そんな心配はけつしてない。私の父さまには私より外には子が一人もないのだから、どうしても私がいって、やすらかに目を閉じさせて上げなければかわいそうだ。おとむらいをすませたら、すぐにかえつて来る。どうぞ子どもたちと一しよにまっついておくれ。七日たつたらかならずかえつて来る。」と言いました。すると一ばん上の男の子が、

「私は父さまと一しよにいつて、お祖父さまを見て来たい。」と言いました。獵人は、
「お前はみんなと一しよに家にいて、どろ坊の番をしておくれ。」と言いました。男の子は、
「それでは、この森の先まで一しよにいつて、そこからかえつて来るの。そして、母さまと一しよにお家の番をするの。」と言いました。獵人は、その子をつれて森のはずれまで来ますと、
「もうここからおかえり。これは家のお部屋中の鍵だから、おまえにあずけておく。」と言って、

鍵のたばをわたしました。そして、

「よく言っておくが、どんなことがあっても、二階の小さいお部屋へはいってはいけないよ。そのお部屋の鍵穴にこの金の鍵がはまるのだが、あすこだけは、けっして開けてはいけないよ。」と、いくども言っておかせました。男の子は分った分ったと、うなずきました。獵人は、

「では、なんにもこわいことはないから、おとなしく待ってお出で。」と言って、わかれました。

男の子はまた森をとおって、お家へかえって見ますと、お母さまが戸口に立って、しくしく泣いています。男の子は、

「どうして泣いているの？ 私がかえったから、どろ坊が来てもこわくはないでしょう？」と言いました。するとお母さまは、

「どろぼうなんかはちっともこわくはない。」と言いました。

「それでは何が悲しいの？」

「だって父さまは、もうここへかえっては入らっしゃらないんだもの。」

「ううん、そうじゃない。父さまはじきかえると仰った。」

「それから私も、もうお家へかえらなければならぬのよ。かえったら、もう二度と出ては来られない。」

お母さまはこう言^いって、またさめざめと泣^なきました。男の子は、
「そんなら私^{わたし}たち三人^{にん}や、小さな赤^{あか}ちゃんをみんなおいていくの？」と聞^ききました。星^{ほし}の女^{おんな}は、
そう言^いられるとびっくりして、

「いやいや、私^{わたし}はもうどんなことがあってもかえりはしない。安^{あんしん}心^{しん}しておいで。あ^{あか}の赤^{あか}ん坊^{ぼう}やお
ま^まえ^えたちをおいて、どうしてかえっていかれよう。」

こ^こう言^いい言^いい涙^{なみだ}をふきました。男^{おとこ}の子^こはそれで安^{あんしん}心^{しん}して、み^みん^んなと一^{いっ}しよにあそびました。
す^するとその晩^{ばん}、男^{おとこ}の子^こは、外^{そと}の月^{つき}のあ^あかりの中^{なか}で、だ^だれ^れか^かがう^うつく^くしい小^こ鳥^{とり}のよ^ような声^{こゑ}で、し
き^きりと何^{なに}か言^いっているの^ので目^めがさ^さめました。

聞^きいてい^いると、その鳥^{とり}のよ^ような声^{こゑ}は、

「蜘蛛^{くも}のはし^しご^ごが下^おりてい^いる、早^{はや}くか^かえ^えつてお出^いでな^なさい。」とい^いうこ^ことを、か^かな^なしいふ^ふし^しでう
た^たつてい^います。

そ^そば^ばで赤^{あか}ん坊^{ぼう}に添^そえ乳^ちをしてい^いたお母^{かあ}さまは、

「ね^ねん^んね^ねん^んよ^よね^ねん^んよ。こ^この子^こは私^{わたし}の紅^{ルビ}宝^{ビー}石^ーだ^だもの^{もの}を、こ^この子^こを^をお^おいてはか^かえ^えれ^れない。」とい^い
う意^い味^みを謠^{うた}でう^うたいな^なが^がら、赤^{あか}ん坊^{ぼう}の寝^ね顔^{がお}を見^みつ^つめてい^いました。

す^すると、外^{そと}から^らは、

「そんなら二人でおかえりなさい。紅寶石をだいて二人で。」と謡います。お母さまは、しばらく黙っていました。そのうちに、外の声は、また、

「蜘蛛の梯子が下りている。」

おまえが七年いないとて、

星の二人は泣いている。」

と、また謡い出しました。赤ん坊はふと目をさまして泣き出しました。お母さまは、そつとそのお背中をたたいて、

「ねんねんよ、ねんねんよ。かえれかえれと言ったって、玉の飾りの着物が無い。」と、悲しうに謡いました。

赤ん坊はまたすやすやと眠りました。

それからしばらく、何の声もしませんでした。やがてまた外の月のあかりの中から、「鍵をおさがしなさい。お前の着物のかくしてある、小さなお部屋の金の鍵を。」と小さな美しい声で謡いました。

男の子は、その謡を聞いているうちに、一人で、うとうとと眠ってしまいました。そうするとその子の夢の中へ、二人の美しい女の人が出て来て、

「いい子だから、二階のあのお部屋の戸をあけて下さい。そうすればおまえのお母さまはもう泣きはしないから。」と言いました。男の子は朝、目がさめると、お母さまに向つて、

「私は昨夜、だれかがお母さまに早くおかえりおかえりと言つていくども謡つたのを聞いた。」と言いました。お母さまは、

「おまえは夢でも見たのでしょうか。」と言いました。そして、あとで一人でさめざめと泣きました。

男の子は、たしかに目をあいていて聞いたのですから、もしほんとうにお母さまがかえつてしまつたらどうしようと思ひ思ひ、いちんち昨夜の歌のことばかり考えてくらしめました。

三

その夕方、男の子は、ゆうべ二人の女の人が、あの二階の部屋をあければお母さまはもう泣きはしないと云つたのを思ひだしました。そして、そうすればお母さまは、もう家へもかえりはしないだろうと思ひました。そのときお母さまは、下の二人の男の子と赤ん坊とに水あびをさせに、泉へいって行きました。

男の子は、いそいで二階へ上って、小さな金の鍵で、その部屋の戸をあけました。そうするとその部屋の中には、金と銀の糸でおった、色々の宝石の飾りのついた、きれいな着物がかけてありました。

おろして見ますと、その着物の胸のところには、大きな紅宝石がついていました。飾りの宝石もその紅宝石も、ちやうど夜の空の星のように、きらきらとまぶしく光ります。男の子はびっくりして、その着物をお母さまに見せようと思つて持つて下りました。

しばらくするとお母さまは、二人の男の子と、赤ん坊とをつれてかえつて来ました。男の子は、

「母さま母さま、こんなきれいな着物が二階にありました。着てごらん下さい。」と言いました。お母さまは、それを見ると、うれしそうにほえんで、すぐからだにつけました。子どもたちは、お母さまがその着物を着て、きれいなお母さまになったものですから、よろこんで踊りまわりました。男の子は、

「父さまがかえるまで、毎晩貸して上げる。そして父さまがかえったら、私がたのんで、もらつて上げる。」と言いました。お母さまは、

「今晚赤ちゃんを寝かせるまで貸しといっておくれね。」と言いました。男の子は、

「それまで着て入らっしゃい。」と言いました。

男の子はその晩は、いつまでも眠らないで、床の中で目をあいていました。そうすると、間もなくまた、外の月のあかりの中から、うつくしいこえで、

「蜘蛛の梯子が下りている。」

おまえが七年いないとて、

ふたり 二人の星は泣いている。」

と、小鳥のようなくつくしいこえでうたうのが聞えて来ました。

それから、しばらく何の声もしませんでした。こんどは、赤ん坊に添え乳をしていたお母さまが、

「ねんねんよ、ねんねんよ。わたしのかわいい紅宝石を、どうしておいていかれよう。」と、謡いました。男の子は聞いているうちに、ひとりでいうとうとと眠くなって、お母さまの声がだんだんに遠くの方へいってしまふような気がしました。そしてそれなり、お日さまが出るまで、ぐっすり寝てしまいました。

男の子は朝、目をさまして、ゆうべの歌のことを言おうと思つて、お母さまをさがしますと、お母さまはどこにもいません。男の子は、

「それでは、すいれんの泉へいったのだろう。」と思つて、そちらへさがしにいきましたが、お母さまはやつぱりそこにもいませんでした。それでまた家へかえて見ますと、お母さまばかりでなく、小さな赤ん坊もいなくなっていました。男の子は、

「これはきつと、悪いどろぼうが、お母さまと赤ん坊をさらつていったのにちがいない。おとこの晩からの美しい歌は、きつと、どろぼうが母さまをだましてつれ出そうと思つて謡つたのだ。」と思ひました。見ると、お母さまに貸して上げた、あの玉の飾りのついた、きらきらした着物もありません。

下の二人のこどもは、母さまがいない、と言つて泣き出しました。男の子は二人をなだめて、森の中をさがしてまわりましたが、どこまでいって見ても、お母さまはいません。二人の子どもは、

「母さまがいないからこわい。母さまがいないからこわい。」と言つて、どんなにだましても聞かないで、いちんちおんおん泣いてこまらせました。男の子もしまいには、

「母さま、かえつてよ。母さま、かえつてよう。」と言ひ言ひ泣きました。二人の子どもは、お腹がすいてたまらないものですから、よけいにわあわあ泣きました。

男の子は、そのうちにふと、お父さまからあれほどきびしくとめられていたことを思い出して、

「ああ、しまったことをした。父さまの言うことを聞かないで、二階の部屋の戸をあけたので、あの美しい玉の飾りの着物までなくなってしまう。父さまがかえったら、何と言おう、母さまや、赤ん坊がいなくなつたのも、きつと私が父さまの言ったことにそむいたばち、にちがいない。」
こう思うと、なおなおかなしくなりました。

間もなく日がくれて、美しい月夜になりました。男の子は二人の子どもを寢床へ寝かせようとしていきますと、ふと入口の戸があいて、お母さまが、ゆうべの玉の飾りの着物を着てかえつて来ました。下の二人の子どもは、大よろこびで、お母さまに飛びつきました。

「母さまがいなからこわかった。」

「私も怖かった。」と二人はかわるがわる言いました。お母さまは、

「もう私がついているから、何にもこわいことはありません。それよりも、みんなさぞお腹がすいたでしょう。さあこれをおあがりなさい。」と言って、大空からもつて来た、おいしい果物を分けてやりました。二人の子供はうれしがって、どんどん食べました。しかし一ばん上の男の子は、それを食べようとしなないで、

「母さま、赤ん坊はどこへいったの。母さまは私たちをおいていきはしないと云つたのに、どうしてよそへいったの。」と聞きました。お母さまは、

「赤ん坊は私の二人のお姉さまのそばで寝ています。私はこれからすぐにまたお家へかえって、遠くから見上げて上げるから、みんなでおとなしくおねんねをするのよ。またあすの晩もおいしいものをもって来て上げるから。」と言いました。男の子は、

「それではその玉の着物をぬいでいってね。父さまが、あのお部屋をあけてはいけなと言ったのに、私があけて出したのだから、父さまにしかられる。父さまがかえったら、私があげだつて、もらつて上げる。」と言いました。お母さまは、

「そんなことはいいから、早くこの果物をおあがり。」と言いました。男の子はそう言われたので安心して、お母さまとならんで、そのおいしい果物を食べました。

そうすると、だんだんに金の鍵のことも玉の飾の着物のこともみんなわすれてしまいました。そしてお母さまが美しい着物を着て、美しい人になっているのが、うれしくてたまりませんでした。

四

男の子は、もうお母さまはどこへも出ていかないものと思って、安心して寢床へは入りました。すると、そのうちに、また、ふいと歌の音がするので目がさめました。じっと聞いていると、やっぱりゆうべと同じ美しい声で、

「紅宝石がしきりと泣いている。

日が出ぬうちにかえらねば、

馬の蹄が糸を切る。」

と謡いました。

お母さまは、ちようど一ばん下の子どもが目をさましたのを寝かしつけていました。外の声が止むと、お母さまは、

「ねんねんよ、ねんねんよ。この子はこよいつれていく。この子にここで泣かれては、私もお空で泣くのだから。」と、言い言い涙をふきました。

一ばん上の男の子は、またひとりでに眠くなりました。そして、

「明日は母さまにそう言つて、赤ん坊をつれてかえつてもらおう。そうすれば母さまはもうじぶ

んのお家へかえらないですむだろう。」と、こう思い思い寝てしまいました。

あくる朝目をさまして見ますと、お母さまは、いつの間にか、一ばん下の弟と一しよに、いなくなっていました。二ばん目の弟は、母さまがいなくて言っていてわあわあ泣きました。男の子は、

「泣かなくてもいいよ。母さまは夜になればまた来て下さるから。」と言って、なだめました。しかし弟は、何と言っても泣き止まないのです、しまいには涙で目が真っ赤にはれました。

そのうちに、日がくれて、空には星が一ぱい出ました。すると間もなく、入口の戸があいて、お母さまがかえって来ました。

二ばん目の男の子は、走って来て、お母さまの手に取りついて泣きながら、

「二人きりでここに居るのはいや。母さまのお家へつれてって。」と言いました。

お母さまは二人に頬ずりをして、またゆうべのような、おいしい果物を分けて食べさせました。一ばん上の男の子は、

「母さまはどうとう二人ともお家へつれてってしまったのね。父さまがかえったら、何と言えはいいの。」と心配そうに聞きました。お母さまは、

「それはまたあとでお話するから、早くお食べなさい。」と言いました。

男の子は、ひもじくてたまらないので、急いで果物を食べました。そして、もう悲しいことも心配こともわすれて、お母さまと楽しくお話をして、しまいに寝床へはいました。

男の子は明け方ちかくに、ふと目がさめました。そうすると、また外に歌の音がしていました。

「目が出ぬうちにかえらねば、

馬の蹄が糸を切る。

二人は夜どおし泣いている。」

と、小鳥のような美しい声で謡っています。お母さまは、二番目の子が目をさましたのを寝かせながら、

「ねんねんよ、ねんねんよ。この子が寝たらつれていく。あとでこの子に泣かれては、私もお空で泣くのだから。」と、悲しそうに言いました。

男の子はその歌を聞きながら、またすやすやと寝入ってしまいました。

朝起きて見ますと、窓にはもう日かげがまっ黄色にさしていました。そして、お母さまも弟もみんないなくなっていました。

男の子はいちいち一人で泣きつづけて、涙で目がまっ赤にはれました。

やがて夜になって、大空に星がかがやきはじめたと思うと、また入口の戸があいて、お母さま

がかえって来ました。男の子はお母さまの手に取りすがって、

「母さまはどうしてみんなをつれてってしまったの。父さまがかえったら、びっくりするよ。早くみんなをつれてかえってね。ねえ、母さま。父さまがかわいそうだから。」と、たのみました。

お母さまは、

「そんなことはあとにして、早くこれをお上りなさい。」と言いながら、空からもって来た果物をたくさんならべました。しかし男の子は、いくらすすめても食べませんでした。お母さまは、

「それでは、これから私と一しよに、おまえの大好きな赤ん坊と、あの二人の弟たちのところへいきましよう。さあお立ちなさい。」と言いました。男の子は、

「私は一人でここにいます。父さまは、かえるまでちゃんとお家の番をしてお出でと言ったから、私は一人で番をするの。」と言いました。

「それでは私はもういきますよ。父さまは明日かえって入らっしゃるはずだから、おかえりになったらそう言って下さい。母さまは、玉の飾りの着物を見つけてきましたから、もうお家へかえりましたと言して下さい。母さまはこれまで長い間、毎日毎日どんなにお家へかえりたかつたか知れませんか。もう今晩きりで二どとここへは来ないから、よく母さまのお顔を見ておおき。それから父さまが、なぜ二階のお部屋をあけたとお聞きになったら、二人の女の人が、夢の中で、母さま

が泣いていてかわいそうだからあけてお上げと言ったから、開けたのですとお言いなさい。」
お母さまはこう言い言いさめざめと泣きました。

「母さまのお家はどこにあるの？　ここからよっぽどとおいの？」と、男の子は聞きました。

「それは、あとでお父さまにお聞きなさい。」

星の女は、こう言って、間もなく空へかえってしまいました。

五

あくる日になりますと、男の子はお父さまがもうかえるか、もうかえるかと思いつながら、いち
んち戸口に立って待っていました。そうすると、やっと夕方近くなって、向うの森の中に、お父
さまのかえって来る姿が見えました。男の子は走って迎えにいつて、

「父さま、私はずいぶん悪いことをしたの。女の人が二人、私が寝ているうちに来て、母さまが
かわいそうだから、二階のお部屋をおあげと言ったから、金の鍵であけたの。そうすると玉の飾
りの一ぱいついた、きれいな着物があったから、母さまに見せたら、母さまが貸してくれと言っ
た。そしてその晩、外からたれかが謡をうたって母さまをよぶと、母さまはその着物を着たま

いってしまったの。」

こう言^いって泣^なき話^{はな}しました。お父^{とう}さまはそれを聞^きくとびっくりして、

「ごらんよ、私の^{わたし}いうことを聞^きかないから、おまえたちはとうとう母^{かあ}さまをなくしてしまっただじやないか。しかしもう悔^{くや}んでも仕^{しか}たがない。お部^へ屋^やをあけたことは、ゆるして上^あげるから、これからはけっして父^{とう}さまのいうことにそむいてはいけないよ。母^{かあ}さまはそのうちには、おまえたちを見^みたくてかえって来^くるかもわからない。これからみんなで赤^{あか}ん坊^{ぼう}のおもりをして、たのしくくらすことにしよう。」

こう言^いって、涙^{なみだ}をこぼしました。

「でも赤^{あか}ん坊^{ぼう}は母^{かあ}さまが、あの玉^{たま}の飾^{かざ}りの着^き物^{もの}を貸^かしてくれと言^いった晚^{ばん}に、一^いしよにつれていってしまったの。」と男^{おとこ}の子^こは言^いいました。お父^{とう}さまは、

「赤^{あか}ん坊^{ぼう}もいったのか。」と悲^{かな}しそうに言^いいました。

「しかし、あの子^こはお乳^{ちち}がないとこまるから、母^{かあ}さまのそばにいた方^{ほう}が仕^し合^あわせ。それでは四^よ人^{にん}で一^いしよにくらしていこう。」

「でも母^{かあ}さまは、そのあくる晚^{ばん}と、またあくる晚^{ばん}に、二^{ふた}人^{たり}ともつれてってしまったの。ゆうべは、私^{わし}をつれに來^きたけれど、私^{わし}は父^{とう}さまがかわいそうだから、いかないと言^いったの。」

男の子がこう言いますと、獵人は、よろこんでだき上げて、

「よくいかないでいてくれた。それではこれから、どんなことがあっても、おまえは父さまのそばをはなれないかい？」と頬ずりをして言いました。

「私は、いつまでも父さまと一しよにいるの。そして、父さまのいうことをよく聞くの。」と男の子は言いました。二人は、そのまま森の家でくらししました。

獵人は毎日、その子をつれて獵に出て、夕方になるとまた一しよにかえって来ました。しかし男の子は、毎日お母さまのことがわすれられませんでした。夜になって、大空に星が一ぱい出ると、男の子は一人で門口へ出て、そのたくさんの星の中の、どれがじぶんのお母さまか、どれが妹か弟かと思ひながら、いつまでも空を見上げていました。

それから寢床へはいつ寝るときにも、いつもお母さまや妹や弟たちにあいたいとおもつて一人で泣きました。

そのうちに、お母さまたちがいなくなつてから一年になりました。すると、或晩夜中に、獵人は男の子を呼びおこして、

「ここへお出で。早くお出で。父さまは急に気分が悪くなつた。」と言いました。男の子はびつくりして、そばへいつて見ますと、お父さまはまっ青な顔をして目をつぶっていました。男の

子は、お父さまの手をさすって、

「今日はあんまり遠くまで歩いたからよ。あしたは獵を休んで家にいませうね。」と言いました。お父さまは、

「ああ、くちびるがかわく。冷たい水を飲ましてくれ。」と言いました。男の子は、おおいそぎですうれんの泉へかけていきました。お父さまはその水を一口飲むと、そのままやすやすと眠ってしまいました。男の子は夜どおし起きて、そばについていました。獵人は、とうとう夜明けまえに死んでしまいました。男の子は、大声を上げて泣きました。

夜が明けると、男の子は泣き泣き木を切り集めて、お父さまの死骸を焼きました。男の子は、もう、たった一人でこの森にいるのはいやでした。でも、どこも言っていくところありません。男の子は、森の草の上に顔を伏せて、せめてもう一どお母さまにあいたいと思しながら、日がくれるまで泣きつづけに泣いていました。

やがて、大空には星がかがやきはじめました。すると蜘蛛の王さまは、おおいそぎで下界とどく梯子をつむぎ出しました。星の女はそれにつたわって、泣いている男の子のところへ下りて来ました。

男の子は泣き泣きお父さまのなくなったことを話しました。お母さまも、さめざめと泣きまし

た。そしてしまいに、

「もういいから、泣かないでおくれ。私は、おまえがかわいそうだからむかえに来たのです。さあこれを食べて、一しよに母さまのところへいらつしやい。」

こう言つて、空からもつて来た果物を食べさせました。男の子はそれを食べると、一人で悲しさをわすれて、お母さまと一しよに、空へ上りました。

そのあくる日、二人の旅人が森をとおりかかつて、獵人の家へはいました。すると、家の中には人が一人もいないものですから、二人は変に思つて、

「それでは、この家の人がかえるまで、二人でここに住んでいよう。」と相談しました。しかし、家の人は、いつまでたつてもかえつては来ませんでした。二人の旅人は、とうとう死ぬまで、長い間そこでくらししました。

二人はその間、いつも月のてる晩には、すいれんの泉の中で、三人の女と、四人の子どもとが、楽しそうに水を浴びている声を聞きました。そして明け方になると、かならず空の上から、「おかえりなさい。お日さまがお出ましにならないうちにかえらないと、お馬が梯子をふみ切つてしまいます。」

こう言つて、みんなをよぶ声が聞えました。



子守り子

「子守っ子」 挿画／原 詩音

子守っ子（チェホフによる）

夜、子守子のバルカは、ききとれないくらいひくいこえで、子守歌をうたいながら、赤ん坊のねているゆり籠をゆすぶっていました。

「ねんねんよう。」

ねんねんよう。」

神だの前には、ランプが緑いろにともっています。壁から壁へ、細いひもがかけてわたしてあって、赤ん坊の着物や、大きなズボンなどが、うす黒くぶらさがっています。ランプのつるしてあるま上の天井が、まるく、大きく、緑いろにかがやいて、赤ん坊の着物やズボンの影を、長く、ゆり籠の上や、うずくまっているバルカの肩の上に、おとしています。

火影がゆれると、天井のまるいあかるみやいろいろなものの影が、まるで風にあおられたようにゆらゆらします。部屋の中は息がつまるように静かで、スープと靴のおいがしています。

赤ん坊がひいひい泣きます。あんまり泣きに泣いて、もう声もかれがれになっているのに、そ

れでもまだ泣きやみません。いつになったら泣きたりるのでしよう。バルカはねむくてねむくてたまりません。

頭はたれ下り、頸はつっぱって苦しくなり、まぶたも唇も、動かなくなりました。顔はひからびて、石のようにこわばっています。頭が、まるでピンの頭ぐらいにちぢこまってしまったような気がします。

「ねんねんよう。

ねんねんよう。」

バルカは、とぎれとぎれにうたいました。そこいらでおろぎがチルチルチルと鳴いています。となりの部屋からは、親方とおかみさんのいびきがきこえます。

ランプがゆらぎました。緑いろのあかるみと物の影とが、あちこちと動きまわって、バルカの動かない目の中に、そっとすべりこみました。すると、ねむりかけているバルカの頭の中には、さまざまなまぼろしがうかびました。――

空を、雲が赤ん坊のように泣きながら、きれぎれになってとんでいきます。と、風がふいて来て、雲がきえて、こんどは、どろどろにぬかった広い路がみえ出しました。路の両がわには、つめたいもやをとおして岡がみえます。不意に、だれだか、袋をしまった、影のような人が、グシ

ヤツとぬかるみでころびました。

「どうしたの？」とバルカがきくと、

「ねむるんだ。ねむるんだよ。」と答えます。と、電線にとまっている鳥が、赤ん坊のように泣きわめいて、ねむったその人をおこそうとします。

「ねんねんよう。」

ねんねんよう。」

バルカはまたつぶやくようにうたいます。すると、こんどは、じぶんが、まっ暗な、息のつまるような家の中いえなかにいるのがみえて来ました。

床の上にはお父つあんがねています。お父つあんはとてもひどいぜんそくで、息をするのもやつとです。むろん口もきけません。ただ息をはくたびに、車のようくるまなひびきがのどからもれるばかりです。

「ぐる、るる。ぐるるる。ぐるるる。」

お母さんは、お父つあんが死にかけているのをしらせに、地主さまのところへいきました。さつき、もうずっと前まえにいったのに、いつになっただらかえるのでしょうか。バルカは、はたにねころんで、お父つあんの「ぐるるる」をきいていました。

「だれか、戸口に馬車をとめました。地主さまのおやしきからよこして下さったお医者さまです。お医者さまは、家の中へはいつてきました。まっ暗なので姿はみえません。その人がせきをするのと、戸のきしるのだけがきこえます。」

「あかりをつけろよ。」

お医者さまがいいいます。

「うう、ぐるぐる。ぐるぐる。」とお父つあんが答えます。お母さんがかえって、マツチをさがしはじめました。

「先生さま、じきでござえます。じきでござえます。」

お母さんはこういいながら、ろうそくをとめて、おもてへとび出して、先生と一しよにもどつて来ました。

「どんなぐあいだ。」お医者さまは、病人をのぞきこんで聞きました。

「おい、おかみさん、おまいたちは病人をほっぽり出しておいたんだな。」

「へえ、いや、先生さま、もうおむかえが来るんでさあ、どっちみちもう長いことはありません。」

「馬鹿。おれがなおしてやるよ。」

「お願えしやすだ。へえ、どうもありがとうござえますだ。でも、どうせ死ななきやあなんねえ

「だら、やつぱり死ななけきやあなりませせん。」

「こりや病院にいれなけりやあだめだよ。」

お医者さまは、診察をするといいました。

「今すぐいくといいんだが、今夜はもうおそいな。病院じゃみんなねてるかもしれない。まあいだろう。心配するな。おれが今手紙を書いてやるからな。」

「あおう、先生さま。」と、お母さんがこまったようにいいました。

「うちにや馬がないんで。」

「馬がない？ うん、じゃあ一頭かしてもらおうように地主にはなしてやろう。」

お医者さまはかえります。あかりはけされました。バルカは、又お父つあんのこと「ぐるぐる」をきくばかりです。半時間ほどもたつと戸口に馬車がつきました。こんどのは、お父つあんなを病院につれていく馬車です。そしてお父つあんはいつてしまいました。

夜があけて、はればれとした朝が来ました。お母さんはお父つあんのことがしんばいなので、病院へいききました。

と、赤ん坊が泣いています。そのそばで、だれかが歌をうたっています。

「ねんねんよう。」

ねんねんよう。」

お母つかさんがかえって来きました。

「ゆんべはよかったのに。」とお母つかさんは、すすり泣なきをしながらつぶやきます。

バルカは胸むねが一いぱいになって、森もりの中なかへ行って、ひとりでしくしく泣なきました。

「お父とつつあんは死しんでしまった。おお、お父とつつあん。」

ごつん、と頭あたまをぶたれて、はっとバルカは目めがさめました。目めのまえには、親おやかた方が立たっていません。

「やい、なにをしてやがるんだ。坊ぼうやが泣ないているじゃねえか。ねむるやつがあるか。」

親おやかた方は、またびしやんとバルカの頬ほほをなぐりつけました。バルカは、またうとうととゆり籠かごを

ゆすぶって、子守歌こもりうたをうたい出だします。部屋へやの中の影かげはぶるぶるとふるえうごいて、バルカにま

ばたきをしてみせ、すぐに又またバルカの頭あたまの中なかにすべりこんで、まぼろしになりました。――

またどろどろの、ぬかるみが見みえて来きました。袋ふくろをしょった人ひとが、グシャツとこころがつて、ぐ

うぐうねこんでしまいます。ああ、あんなふうにごろつとねころんだならば。おお、ねむい、ね

むい、ねむい。

だけど、お母つかさんがやきつて来きて、はやくはやくとせかせます。バルカは、お母つかさんと、町まちへ仕し事こと

をさがしにいくのです。

「どうぞ一銭やっつて下さい。」

お母さんは、あう人ごとに言葉をかけます。

「その子をおくれよ。」

だれか知っている人のような声がします。

「おい、その子をおくれつたら。」

はっと、バルカはとびおきました。おかみさんがそばに立ってにらみつけています。

「おまいはねていたんだね。ばか。」

バルカはだまってつツ立っています。すると、部屋の中が、だんだん水いろにあかるんで来て、ズボンの影も、緑いろのランプの光も灰いろにうすれ、やがて、壁の中へすいこまれるように消えてしまいました。夜があけて来たのです。おかみさんは、赤ん坊をうけとってお乳をのませると、胸のボタンをはめながらいいました。

「まだ泣いてるよ、この子は。魔がさしてるんだよ。」

バルカは、赤ん坊をまたゆり籠に入れて、ゆすぶりはじめます。部屋の中には、もうなんの影もないので、まぼろしがのりうつってくることもありません。そのかわり、ただ、ねむくてたま

りません。バルカはねむ気をおいはらおうとして、籠のはしに頭をおしつけて頭で籠をゆすぶります。それでもすぐにまぶたがたるんで、頭がおもくなって来ます。

「バルカ、ストーブをたきつけろい。」

戸のむこうから、親方がどなりつけます。さあ、いよいよバルカの仕事のはじまりました。バルカは、まきをとり、物置へかけだします。それがうれしくてたまりません。かけたりあるいたりして、じつとすわっているときよりも、ねむくならないからです。まきをとって来て火をおこしていると、こわばっていた顔があなたかにはぐれ、目ははっきりとさめて来ました。

「バルカ、湯わかしをもって来てよ。」

おかみさんがどなります。こんなふうには、あとからあとから、いろいろな命令が出て来るのです。

「バルカ、親方の靴をおみがき。」

バルカは床に膝をついて靴をみがきはじめます。この大きな靴の中に顔をつっこんでぐうぐうねむったら、どんなに気持ちでしょう。こう思うと、急に親方の靴がふくれあがって部屋一ぱいにひろがりだしました。はっとして、バルカは靴ブラシをおとしました。けれど、すぐまた頭をふると、きよろきよろとあたりをみまわしました。なんにも大きくなりはないじゃないかといった顔つきです。

「バルカ、おもてをおはきよ。」

バルカは、おもてをはくと、もう一つ店のストープに火をおこして、こんどは台所へかけていききました。台所には、いろんな仕事しごとがバルカをまちかまえています。なかでも、ジャガイモの皮かわむきがひと仕事しごとです。バルカは目がちらちらして、ナイフをすべりおとしました。すると、両りょうそでをたくしあげた、体からだのがんじょうなおかみさんが、頭あたまがわれるようにどなりつけます。それがすむと朝あさごはんのお給仕きゅうじをして、縫物ぬいものをして、それからお午ひるになり、夕方ゆふかたになります。

だんだん、くらくらになっていく窓まどをみていると、バルカは、なぜだかじぶんでもわからないなりに、ひとりでにほえままれて来きます。今いまにぐっすりねむれるよと、こう、くらやみが言いってくれるように思おもわれるからでしょうか。しかし、夕方ゆふかたは夕方ゆふかたで、またお客さまが大おおぜい来きます。

「バルカ、お茶の支度したくをおし。」

おかみさんがどなります。湯ゆわかしが小ちいさいので、お客さまに、のみたりるだけお茶ちやをのませるには、水みずを五へんもさしかえなければなりません。

「バルカ、ビールをかってこい。」

「バルカ、酒さけをとってこい。」

「コロップぬきはどこだい、バルカ。」

「にしんを洗うんだってばよ。早くおしよ。」

やっと、お客さまはかえりました。あかりはけされ、親方もおかみさんも、寢床へはいつてしましました。

「バルカ、ゆり籠をゆすぶりな。」

一ばんおしまいの命令です。

こおろぎがチルチルチルと鳴いています。天井でぶるぶるふるえている緑いろのあかるみ。ズボンや赤ん坊の着物の影。バルカは、そのうちに、またまぼろしをみるのです。

「ねんねんよう。」

ねんねんよう。」

バルカはつぶやくようにうたいます。赤ん坊は泣いて泣いて、へとへとになっても泣きつづけます。バルカの頭の中には、又ぬかるみがありました。袋をしまった人。お父つあん。お母さん。

ああ、ねむい。おお、ねむい。



「ざんげ」

挿画／安藤 友海

ざんげ

—

ロシアのウラディミールという町まちに、イワン・アシオノフという商人しょうにんがいました。住居すまいと、店みせを二つふたももっているほどのはたらき人にんで、謡うたをうたうことの大好きだいすきな、おどけ上手じょうずの、正直しょうじきものでした。

そのイワンが或夏あるなつ、ニズニイという町まちの市いちへ品物しなものをさばきに出でかけました。イワンが馬車ばしやをやとって荷物にもつをつみ入れさせ、子どもたちや、おかみさんに、いつてくるよとあいさつをしますと、おかみさんは心配しんぱいそうな顔かおをして、

「今日立きょうたつのはおよしになつたらどうでしょう。私わたしはいやな夢ゆめを見みたんですが。」と言いいました。
「ふふん、もうけた金かねを使つかってでも来るかと気きになるのかな。」とイワンは笑わらいました。

「そんなことならいいんですけれど、私わたしはそれはへんな夢ゆめを見みたんです。あなたがニズニイから

かえっていらしって、帽子をおぬぎになると、おつむりの髪がすっかり白髪になつて夢を見たんです。」

「はははそれはけっこうな前兆だよ。まあまあ見てお出で。品物をすっかり売り上げて、土産を買って来るから。」

イワンはこう言い言い馬車を走らせて出ていきました。そしてニズニイまでの道のりの半分まで来ますと、リアザンの町から来た、或知合の商人に出あいました。その晩二人は、或村の宿屋について、一しよにお茶を飲んだりのち、となり合つた部屋にはいつてやすみました。

イワンはいつも夜は早く寝るのが習慣でした。それであくる朝も、涼しい間に歩かうと思つて、まだ夜のあけないうちに馬車つかいをおこして、馬を引き出させました。宿屋の亭主たちは裏手の小さな建物に寝ていました。イワンはその亭主をおこしてお金をはらつて立ちました。

そこから二十五マイルばかり来ますと、イワンは道ばたの宿屋へ馬車をとめて、馬にかいばをつけさせました。イワンはお茶の用意をたのんで、それが出来るまで戸口にすわつて、ギターをとり出してならしていました。すると、そこへ、三頭だての馬車が、リンリンと鈴を鳴らしながらとぶようにかけて来て、ぴたりとイワンの目の前にとまりました。すると中から一人の巡査が兵たいを二人つれて下りて来て、いきなりイワンに向つて、おまいの名前は何か、どこか

「来たかと聞きます。イワンは、これこれこうこうですと答えて、

「今お茶が来ます。一しよにお飲み下さい。」と言いますと、
「巡査は、そんなことには耳をかさないで、おまいはゆうべどこへ泊ったか、一人で泊ったか、それとも、だれかつれのものと一しよだったか、今朝そのつれのものの顔を見たか、一たいどうして夜のあけないうちに立って来たのだと、うるさく聞きしらべます。イワンは、何だってそんなことを一々聞きほじるのだろうと、ふしんに思いながら、すべてをありのままに話しました。」

「何だか私が盗坊かおいはぎでもしたようですね。私はじぶんの商用で出かけて来ているのです。そんなにくどくどおしらべになる必要はありません。」と、イワンはふりふりしてこう言いました。

「ちよつとおまいの荷物を検査する。おい君たち、こつちへ来て下さい。」と、
「巡査は二人の兵隊をよんで、イワンの荷物をときはじめました。巡査は、イワンの持ものを一々さがしているうちにふと、手さげ袋の中からナイフをとり出して、

「おい、このナイフはだれのものだ。」と、イワンに向ってどなりました。イワンは首をかしげながらそれを見ますと、刃にべっとり血がついています。

「どうしてこのナイフに血がついているのだ。」と巡査はたたみかけてどなりました。イワンはび

つくりしたあまり、返答をしようと思っても急には言葉が出ず、

「し、しりません。」と、どもりながら答えました。

「今朝見ると、おまいのつれの商人はのどを切られて死んでいた。おまいがその犯人だろう。あの建物は中から錠がかかっていた。そして、おまいと二人きりしかいなかったのじゃないか。そのあげくにおまいの袋の中から血のついたこのナイフが出た。おまいのその顔、そのきよ動だけ見ても事実はたしかだ。言え。どういうふうにして殺したのか、いくら金を盗みとったか、きっぱりと言え。」

イワンは、それは私のしたことではありません、私はゆうべ一しよに茶を飲んでからあとは、ずっとあの人の顔を見なかったのです、私はじぶんのお金を八千ルーブルもっている以外に、人の金などはおもっていません、と、ちかかってこう言いました。しかしイワンのその声はきれぎれでした。恐怖のために顔はまっ青になって、まるでその罪人かなぞのように、からだ中をがたがたふるわせていました。

巡査は兵たいに言いつけて、イワンへ綱をかけさせました。イワンは両足をしばりつけられて、巡査の馬車の中になげこまれると、手で十字を切って、泣き出しました。

イワンは所持金と馬車につんでいた商品をごとく没収された上、そこから一ばん近くの

町へはこばれて、牢屋へおしこめられてしまいました。

警察官はウラデイミイルの町へ出かけて、イワンの人柄や、ふだんのおこないなどをとりしらべました。町の人たちは、イワンは、ずっと前にはよく酒も飲み、なまけもしていたが、近来はあまり酒も飲まない、根が正直ない人間だと弁護しました。しかし裁判の結果、イワンは、あの、リアザンの商人を殺して二万ルーブルの金をとった、実さいの犯人ときめられてしまいました。

二

イワンのおかみさんは、その宣告を聞いてびっくりしました。子ども二人はみんなまだ小さく、下の子などはお乳をはなれないくらいです。おかみさんは、その二人の子どもをつれて、イワンが入れられている牢屋へたずねていきました。はじめはどうしても面会を許されませんでした。さんざんにねだりたのんで、ようやく聞きとどけてもらい、役人につれられて、イワンのそばへいきました。

いって見ると、イワンは囚人の服をきせられ、くさりでしばられて、盗人たちや、いろんな罪人

たちと一しよに投げこまれていきます。おかみさんは、イワンのそのありさまを見ると、その場へたおれて、目をまわしてしまいました。おかみさんは、人々にかいほうされて、ようやく正気にかえりました。そして、泣き泣き子どもを引きよせて、一しよにイワンのそばへすわりました。そして家のことや、店のことなどを話したのち、イワンが町を出てからのことをくわしく聞きただしました。

「おや、まあ、そういうわけなのですか。……一たいどうしたらあなたのあかりが立つのでしょうか。」とおかみさんは涙をふきふき言いました。

「こうなれば、最後に皇帝へ書面を出して、罪のないものに罰を加えて下さらないようにおねがいするまでだ。」とイワンが答えました。

「私はすぐに皇帝へ願書を出したのですが、つつかえされてしまいました。」とおかみさんが言いました。イワンはそれを聞くと、もう何を言う力もないように、だまってうつぶしてしまいました。

「だから一ばんはじめ私がおとめしたでしょう？ あんなへんな夢を見たから、あの日は立つのをおよしなさいと言ったんですの。ね、あなた、私にだけはほんとうのことを言っ下さい。あなたはじっさい何もしたんじゃないのですか。」と泣き泣き問いつめました。イワンは、両手を

顔におしあてて、ぼろぼろ涙を流しながら、

「ああ、おまえまでも私をうたぐるのかい。」と言いました。

そうしてるところへ一人の兵たいが来て、おかみさんや子どもたちに立てと命じました。イワンは家族たちに、最後の「さようなら」を言いました。

イワンは一人になると、今のさつき、おかみさんの言ったことを一々考えかえして見ました。「あの女までが私をうたがおうとしている。ほんとうのことは神さまが見ていて下さるばかりだ。おすがりするのは神さまより外にはない。私はもう神さまのお慈愛をまつだけだ。」

イワンはこう決心して、この上皇帝へ嘆願書を出すのも思いとまり、すべての望みもなげうってしまいました。そしてただ神さまへお祈りを上げました。

イワンは笞刑を加えられた上、流罪にされることになりました。それでまずむちでもって半死になるまでぶたれました。そしてその傷がなおるとすぐに、他の懲役人たちと一しよに、とおくシベリヤへおくられました。

イワンはそこで二十六年の間服役しました。今はイワンの髪の毛も、すっかり真っ白になり、ひげも長くのびて、まばらに、そして灰色になってしまいました。腰もこごんで、歩くのも、のそりのそりとしか歩けなくなりました。心もすっかりしおれつくして口をきくこともまれです

し、笑うことなどは一どだつてありません。ただ、ときどきだまつてお祈りを上げています。

イワンは、ここへ来てから、靴をこしらえることを習いました。そしてその仕事でわずかばかりのお金をもらうと、それでもつて「聖書」を買いました。そして二十六年の間、毎日仕事がおわつてから日がくれるまでの間の、わずかなあかるみでもつて、一生けんめいにそれをよみつづけました。それから日曜日には、獄中の教会堂へ行つて、祈禱書をよみ、合唱に加わつて讚美歌をうたいました。すっかり年をとつても、むかし謡をうたいなれていたので、声だけはきれいでした。

監獄の役人たちは、温順なイワンをあわれがっていました。一しよにはいつている囚人の全部はイワンを尊敬して、みんな「おじいさま」とよび「聖徒」とよんでいました。みんなは役人にたいして何か願ひ出たいことがあると、きまつてイワンから言つてもらい、おたがいの間にあらそいがおきると、すぐにイワンのところへ来て、とりさばいてもらいました。

イワンの家からは二十六年の間、何のたよりも来ません。イワンにはじぶんの家内や子どもたちの生死さえもわかりませんでした。

ところが、或日、また一団の囚人がロシアからおくられて来ました。夕方になりますと、ふるい囚人たちは、それらの新来のものたちのぐるりにあつまって、一々、おまいはどこの町、どこの村のものか、どうして処刑をうけたのかと聞きました。イワンもそれらの人々のそばにすわって、くびをうなだれたまま、話を聞いていました。

新来の一人に、六十になるという、白ひげをみじかくかった、背のたかい、がんじょうな年よりがいました。そのじいさんが、みんなに向って、じぶんが収監されたいきさつを話し出しました。

「実にばかげきった話だよ。」とじいさんは言い出しました。

「おれは、そりについていた馬を一匹はずして来たんだ。すると、たちまちつかまって、窃盗罪に問われたわけだ。おれは言ったよ。何もぬすんだわけじゃない、早くうちへかえろうと思っ借りたんだ。そのしょうこには、家へ来ると、ちゃんと馬をにがしてやってるんじゃないか。しかもその馬の御者ってのは、おれのともだちだよ。だから、何もかまやしないじゃないかと言っただ。だけど、やつらは、いけない、盗んだんだって言やあがるんさ。じゃ、いつどこで、ど

んなふうにして盗んだかい、とつっこむと、それにはまるで返答が出来ないんだ。まったくおれは、何のわるいこともしないのに、こんなところへ送りつけられたんだ。いや、じつをいえば、そのまえには一ど、ほんとうに悪いことをしたことがある。そいつをおさえられたら、りっぱにここへおくられても苦情は言えないんだが、みょうなもので、そのときには、とうとうつかまらないですんだんだ。というと、ここへはじめて来たようだが、何、前にも一ど来たことがあるよ。そのときには、永くないでかえれたのさ。」

「おまいはどこから来たんだい？」と或一人が聞きました。

「おれかい？ おれはウラディミールのもんだ。おれんとこのかかあも、やはりあの町の生れだ。おれはマカールという名まえなんだが、世間じゃセミヨニッチとも言っていた。」と、じいさんは答えました。

イワンはウラディミールと聞くと、うなだれていた頭を上げて、

「ではおまいさんは、あの町のイワンという商人のことをしていますか。あの一家のものはまだ生きていますかしら。」と、それとなく、じぶんの家内や子どもの安否を聞きさぐろうとしました。

「ああ、イワンの家か。しってるとも。あの家は金もちだ。もつとも、お父つあんは、シベリヤ

へ来てるとかいうがね。やっぱり、おれたち見たいな罪人らしい。ときにおまいはもういい年のようだが、一たい何をしてこんなところへ送られたんだ。」

しかしイワンは、じぶんのいたましい不幸をうちあけて話す元氣もありませんでした。イワンは聞かれてもただため息をして、

「わしは悪いことをしたので、もう二十六年もここにこうしているのだよ。」と答えました。

「悪いことって何をしたんだい。」とマカールは、かさねて聞きました。

「いや、こういう目に合うのがほんとうだろうよ。」とイワンは言いました。すると、仲間の一人がイワンに代って話しました。だれか悪いやつがいて、或商人を殺して、血のついたナイフをこの人の荷物の中へ入れこんだのだ、そのために、罪もないこの人が犯人にされてしまったのだと言いますと、マカールは、

「ははァん。」と、びっくりしたようにイワンの顔を見つめながら、ぼんとひざをたたいて、「へへえ、そうかなア。ふうん。みょうなこともあるものだね。だがおまいもひどくおじいさんになったな。」と、マカールは一人でこう言いました。

はたのものたちが、マカールにどうしてそんなにびっくりしたように言うのかと聞きますと、マカールは何にも答えずに、

「や、ともかく、この人にあうっていうのがふしぎなのさ。」と言いました。

イワンは、それではこのじいさんは、あの商人を殺した犯人をしているのかもしれないと思ひながら、

「じゃアおまいさんはあの殺人事件のことをしってるんだね。それとも、まえにどこかでわしを見かけたことでもあるのかい。」と聞きました。

「はッは、あの事件をしらないでどうするんだ。世間中のうわさに上った犯罪じゃないか。だが、もう古いむかしのことだから、くわしい話はわすれたよ。」

「しかし、おまいさんは、あの事件のほんとうの犯人を知ってるんだらう？」とイワンはつっこみました。するとマカールは笑って、

「そりやおまい、ほんとうの犯人も何も、げんざい、血のついたナイフが荷物の中から出て来た以上は、その人間が殺したんだらうじゃないか。かりに、ほかのやつが、人の荷物の中へ入れ込んだものとしても、その本人がつかまらなきやアだめじゃないか。だが考えて見てもわかることだ、人が頭の下においている荷物の中へ、どうしてほかのやつがナイフなんぞをおしこめられるかい。そんなことをすれば、眠ってる当人はすぐに目をさますじゃないか。」

イワンはその言いぐさを聞いて、ふふん、あの商人を殺したのはこいつだなとかんづきました。

イワンはだまって立ち上^{あが}って、あちへいってしまいました。

四

その晩^{ばん}イワンは何^{なん}ともたとえようもないほど悲^{かな}しい、いやな気^きもちにおさえられて、眠^{ねむ}ろうと
しても寝^ねつかれませんか。これまでわすれようとしていた、いろいろのことが、一晩^{ひとばんじゆうい}中^{ちゆう}入りかわり
目のまえに浮^{うか}んで来^きました。あのニズニイの市^{いち}へ出^でかけるときに、門口^{かどぐち}へおくって出^でた、そのと
きのおかみさんのすがたも目^めについてはなれません。おかみさんの目^めの色^{いろ}、笑^{わら}い声^{こゑ}、話^{はな}し声^{こゑ}ま
が、まざまざと目^めのまえに見^みえます。それから二人^{ふたり}の子^こどもたちの顔^{かお}もまざまざと浮^{うか}んで来^き
た。二人^{ふたり}とも、あのとときのままの小^{ちい}さな子^こで、一人^{ひとり}はがいとを着^きて立^たっており、一人^{ひとり}は母^{ははおや}親^や
胸^{むね}の上^{うえ}にだかれています。それからつづいて、年^{とし}もわか^く、ゆかいにくらしていたじぶんのこと
も思^{おも}いかえされました。あのととき捕^ほ縛^{ばく}されるじきまえに、あの村^{むら}の宿^{やど}屋^やの戸^と口^{ぐち}に坐^{すわ}ってギターを
ひいていたすがたも目^めに見^みるようです。それ以来^{いらい}、ずいぶんながい間^{あいだ}、世^よの中^{なか}の苦^く勞^{らう}というもの
からはなれているというこ^ことをも、つくづく考^{かん}えました。と、こんどは、あのとときむちでうたれ
つづけたあの監^{かん}獄^{ごく}の光^{こう}景^{けい}、執^{しつ}行^{こう}官^{かん}、まわりに立^たっていた人^{ひと}々^{びと}、くさり、すべての罪^{ざい}人^{にん}たち、ここ

へ来てから二十六年の間のすつかりの出来ごとを考えかえし、それからじぶんが年のわりよりもずっと老いぼけてしまったことも考えました。

イワンは、いらいらするほどかなしく苦しくて、いっそのこと、もう、ひと思いに自殺してしまおうかとまで思いつめました。

「ああ、これもみんなあの悪いやつのおかげだ。」とイワンは心の中で言いました。イワンはそう思うと、もえ上るように腹立たしくなって来ました。

「あいつを殺してやろうか。さかさに、こっちが殺されたってかまわない、どうかして、ふくしゅうしてやらなければ虫がおさまらない。」

イワンは、こう思いつづけた後、とうとう夜があけるまで祈りつづけにお祈りを上げました。しかしそれでも胸一ぱいのくやしみは取れませんでした。

昼の間は、イワンはわざとマカールのおそばへは近づかず、マカールの方を見ることさえしませんでした。

こんなにして二週間というものが過ぎました。イワンはその間、夜もちっとも眠れないし、のちには身のおき方もないくらいにもだえなやみしました。

或晩、イワンは牢屋の中をぐるぐる歩いていました。囚人たちは、みんな、壁ぎわにつけてあ

る棚の上に一人ずつ寝るのですが、ふと見ると、そういう或一つのたなの下から、土のかたまりがころころところがり出しました。へんだなと思って立ちどまって見ると、れいのマカールが、そのたなの下からはい出して来ました。イワンは、マカールだと知ると、見ないふりをしてとおりすぎようと思いました。ところが、マカールは、いきなりイワンの手をつかんで、

「おい、おれは、この壁の下へ穴をほってるんだよ。毎晩、長靴へ一ぱいずつ土を入れて、昼間みんなが仕事に出たすきまに、外の往来へあけるんだ。おい、おじいさん、だまっててくれ。穴さえあければおまいもにげられるんだから。おまいがしゃべってしまえばおれはなぐり殺されてしまうんだ。だが、そうなりや、そのまえに先ず第一ばんにおまいをころしてやるから、そのつもりでいろ。」とおどかしました。イワンは、怒りにふるえながら、マカールの顔を見ました。

「わしはにげ出す気はないよ。また、おまいもおれを殺す必要はない。おまいはもう、とくのむかしにわしを殺してしまったじゃないか。わしがその穴のことをしゃべるか、しゃべらないか、それは神さまのおさしず一つだ。」

イワンはこう言って、マカールの手をふりはなしてにげました。

そのあくる日、囚人たちが仕事につれ出されるときに、つき番の兵隊たちは、だれかが、部屋の中から長靴をつき出して、土をあけるところをひよいと見つけました。兵隊たちは、おや、と

「いいいいはいつって、部屋中をすっかりしらべてまわりました。すると或寝だいな下のところに穴がほりかけてあるのが見つかりました。」

「だれがやったのかと、典獄は、みんなを一々せめしらべましたが、だれもかれも私ではないと言いはりました。中にはマカールのしわざだと知っているものもいましたが、うっかり口に出せば、たちまちマカールがなぐり殺されるので、だまっていました。」

典獄は困ったあげく、イワンに向って聞きました。

「お前は正直な老人だ。神さまのまえで、おれに言ってくれ。一たいだれがああ穴をほったのか。」マカールはそのときも何くわぬ顔をしていましたが、イワンが何と答えるかとその顔をじいっと見ていました。イワンはくちびると両手をふるわせているきりで、しばらくの間一ことも言葉を出すことが出来ませんでした。イワンは心の中で思いました。

「わしを生き殺したあいつだ。あいつをかばってやる必要はさらにない。あいつも私を苦しめた代価をはらうのがあたりまえだ。……しかし私がしゃべってしまえばあいつはそくぎになぐり殺されてしまうにきまっている。わしはあいつを商人殺しの悪ものだときめているもの、まん一それが私のかんちがいであったとしたら、よけいな告げ口をして、あいつを殺させるのも罪なわけである。ともかくしゃべったところで、けっきょく、わしに何の得が来るわけもない。」

「おい、おじいさん、どうだ。ほんとうのところを言えよ。あの穴をほったのはだれだ。」
 イワンはじろりとマカールの顔を見て答えました。

「それは私には言えません。私がそれをしゃべるということは神さまがお許しになりません。私が申し上げないのが悪ければ、私をどうにでもなすつて下さい。私の生命はあなたにさし出します。」

典獄はそんなばかな話があるものかと言って、しつっこく問いつめました。が、イワンは、どうしてもうちあげませんでした。それでとうとう犯人もわからずじまいになってしまいました。

五

その晩イワンがようやく眠りかけようとし、だれだか、こっそりしので来て、イワンの寝だいだなにそつと腰をかけました。やみの中をすかして見ますとマカールです。

「おい、何しに来た。この上わしに何を要求しようというのだ。」とイワンは、むっとして言いました。

「いけ。いかないと守衛をよぶぞ。」

こう言いますと、マカールは、イワンのからだの上へこごまるようにして、

「おい、どうぞゆるしてくれよ。」と小さな声で言いました。

「おまいに何を許すのだ。」

「おれはほんとうに悪ものだ。あの商人を殺して、ナイフをおまいの袋の中へ入れこんだのは、このおれだよ。あのとき、おれはおまいをも殺そうとしたのだ。ところが外で物音がし出したので、ナイフをおまいの袋の中へつっこんで窓からにげ出したんだよ。」

イワンは頭をがんとなぐられでもしたように、ぼうとなつて言葉も出ませんでした。するとマカールはたなからすべり下りて、床板の下に両ひざをつきながら、

「このとおりあやまる。どうぞ許してくれ。神さまのためだと思つて、おれの罪を許してくれ。おれは、あの商人を殺したことを名乗つて出るつもりだよ。そうすればおまいも許されて故郷へかえられる。そのかわりどうか、これまでおまいを苦しめたことだけは許してくれ。おいイワン、ほんとうに許しておくれ。」

「ふふん、口だけであやまるのはどうさもないことだ。だけれど、まあ考えて見ろ。わしはおまいのおかげで、今日まで二十六年の間苦しい目を見て来たんだよ。今になってかえると言つてどこへかえるのだ。わしのようにぼはもう死んでしまった。小さいときに分れた子ども二人は、も

うわしの顔もおぼえてはいない。わしはかえろうたって、かえるところはなないよ。」

イワンは、やつと氣をおちつけてこう言いました。マカールは、そのままひざをついたきり、いつまでも立ち上ろうともしません。しまいには、とうとう床板へ頭をすりつけて、

「まったくすまないことをした。許してくれ。おれは牢屋へはいつてびしびしたれどきでもこれほど苦しくは思わなかった。こうしておまいのまえにすわったこの心もちは、むちでぶたれるよりもまだつらいのだ。おれはつくづく恥じ入っている。おまいはおれをあわれんで、穴のことを言わないでくれた。イワンよ、おれはわるものだった。どうぞ許してくれ。神さまのおためだと思つて許してくれ。」

マカールはこう言い、とうとうしゃくり上げて泣き出しました。イワンは、マカールの泣く声を聞くと、じぶんもひとりで、しくしくと泣けて来ました。

「マカールよ、もう神さまも許して下さるよ。神さまのまえへ出れば、わしだって、おまいより何十倍罪がひどいかもわからない。」

イワンはこう言つと同時に、これまでながい間おもたかつた心が、急にはれられして来たよ。うな気がしました。

その晩からイワンは、もう故郷へかえりたいといらいらする心もちもとれてしまいました。も

う牢屋ろうやから出でたいとも思おもいません。ただどうかして早はやく死しにたいと思おもうだけでした。

イワンは、マカールに、自首じしゅなぞをするにおよばないとかたくとめておいたのですが、マカールは聞きかないで、とうとう自白じはくしてしまいました。しかし、ロシアの裁判所さいばんしょから、イワンを放免ほうめんするといしう指令しれいが来きたときには、イワンはもう死しんで、この世よの中なかにはいませんでした。

村の学校



「村の学校」 挿画／前田 悠希

村むらの学校がっこう
(実話じつわ)

アルフォンス・ドーデー

今いまからちようど六十年前ねんまえに、フランスはドイツとの戦争せんそうにまけて、二十億円おくえんのばい償金しょうきんを負おわされ、アルザス・ローレイヌ州しゅうを奪うばわれました。その土地とちはこの前まえの世界戦争せかいせんそうで、やっと又またとりかえしました。このお話はなしは、アルザス・ローレイヌがドイツ領りょうになって、村々むらむらの小学校しょうがっこうも先生せんせいがみんなドイツ人じんにかわってしまったときのお話はなしです。

一

私わたしたちの小ちいさな学校がっこうは、ハメル先生せんせいがどかれてから、がらりとかわってしまいました。ハメル先生せんせいのときには、朝学校あさがっこうへつくと、授業じゆぎょうまでには、かならず五、六分間ぶんかんゆとりを置いてもらったものです。みんなはその間あいだ、ストーブのまわりに輪わになって、指ゆびをあたためたり、着物きものについている雪ゆきやみぞれをおとしたり、お弁当べんとうの中身なかみを見せ合あったりしながら、しずかに雑談ざつだんをしました。

ですから、村のとおくのはてから来る子たちも、始業まえのお祈りと点呼にも、らくに間に合いました。

しかし、今ではそうはいきません。どんな遠くのものでも時間には、きっちり着かなければなりません。今度のドイツ人のクロック先生は、じょうたん口一つきません。八時十五分前から、もう教壇につっ立っています。じきわきにはふとい杖がそなえてあります。おくれて来たものはそれでもつてなぐりつけられるのです。だから小さな中庭には、急いでかけつける木靴の音がつづき、教場の戸口のところでは「はい。」と、いきをきらして、あえぎ叫ぶ声を聞かなければなりません。

このおそろしいドイツ人にたいしては、何一つ、にげ言葉がききません。「母さんが洗濯場に着下着をはこぶの手つだっていましたから」とも「父さんについて市場へいったので」とも言われません。クロック先生は何にも耳に入れてはくれません。この情のない先生の目からは、私たちは、家も家の人もなく、ただドイツ語をおそわるために、そしてふとい杖でぶたれるために、わきの下に本をかかえて、小学校の生徒としてこの世に生れて来ただけのものでした。

ほんとに私も、はじめの間は、ずいぶんぶたれました。木びき工場をしている私の家からは学校はかなり遠いのでした。それに私のところは、冬は日の出るのがおそいので、よく、遅刻し

ました。後には毎晩のように手の指や背中や、そこらじゅうに、ぶたれたあとの赤いあざをつけてかえるので、父は、私を寄宿舎へ入れました。

しかし、寄宿舎はとても、つらくて、なれるまでが中々でした。それは寄宿生にとってはクロック先生のほかに、クロック夫人がいるからです。夫人は先生よりも、もつと意地のわるい女です。その上に小さなクロックの一群までがいるのです。その子たちは、寄宿舎をはしご段で追っかけまわします。フランス人はみんななまけものだとどなります。ただ幸なことに、日曜に母さんが私に会いに来てくれるときには、いつも食べものをどっさりもって来ました。

クロックの家中のものは、だれもかれも大もの食いなので、母さんのもって来たものをぱくぱく食べました。それで、私だけはこの家の人たちが、かなりよく世話をしてくれるようになりました。

一一

私たちの仲間だった子で、私がいいつも、おしい子だとおもうのはガスパール・ヘナンです。ガスパールも、やはり一しよに屋根うらの小さな部屋に寝かされました。二年まえに両親になく

なられた子で、粉ひき業をしている叔父が、厄介ばらいに、ハメル先生にたのんで、すっかり学校へまかしたのです。

ガスパールは来たときには年は十だったのですが、大がらなので十五ぐらいに見えました。ガスパールは、その年まで、学校で本をおそわるなどということは夢にも考えず、一日中家の中を走りまわり、外であそびくらして来たのでした。それですから、学校へ入れられると、つながれた犬がくくんくなくのと同じように、ただ泣いてばかりいました。

とても人のよい子で、少女のような、やさしい目もとをしていました。前のハメル先生は、苦心に苦心をかさねて、やっとのことでガスパールを手ならしました。先生は近所に用事が出来ると、ガスパールをお使いに出してやりました。ガスパールは、そのたびに、自由になったのをよろこんで、小川にはいつて水をはねとぼしたり、日にやけた顔に日射病までうけて来ました。しかしクロック先生になってからは、まるで、わけがちがって来ました。

かわいそうにガスパールは、ないしうでフランス語を読み習うのに、苦勞をしているので、ドイツ語は一つもおぼえるひまがありませんでした。ガスパールはドイツ語の一つの動詞の変化を口に言わされるのに、数時間もつっ立ちつくしていました。ガスパールの、しわめた眉の中には、習おうとする注意よりも、剛情と怒りがひそんでいるのが、だれにも感づけました。授業

時間ごとに、同じ場面がくりかえされました。

「ガスパール・ヘナン、立て。」と先生が言います。

ガスパールは、ふくれっつらをして立ち上ると、つくえによりかかり、からだを左右にふるだけで、何にも答えずにすわるのでした。クロック先生はいきなりなぐりつけたり、あとで、食べものをやらなかったりしました。しかし、そんなにされてもガスパールはちっとも、ものをおぼえませんでした。

晩になって、屋根うらの小さな部屋へのぼっていくときに、私はよく、ガスパールに言いました。

「泣くの、およしよ。ぼく見たいにやるんだよ。ドイツ語をよむのをおぼえなくちゃだめだよ。だってあいつらは、とてもつよいんだもの。」

でもガスパールは、いつもこういいました。

「ぼくはいやだ。いきたいんだ。うちへかえりたいんだ。」

ガスパールのこの考えは、しよせん、動かしようがありませんでした。

最初のころの、ものうさが、ガスパールの上に一そう、つよくもどって来ました。夜あけがたに、ガスパールが寢床の上ですわって、目を見すえているのを見ますと、私には、ガスパールが、

今じぶん、もう目をさましている水車場や、小さいときに、はいつてかきまわした、きれいな小川のことを考えているのが感じられました。そういうものが、遠くからガスパールを引っばるので。その上に、先生がひどいことをするので、それがますますガスパールを家の方へおしやるのでした。ガスパールは、すっかり、荒くれて来ました。

ときどき、ガスパールが杖でたたかれたあと、その二つの目が、怒りで一ぱいになるのを見ますと、私は、じぶんがクロック先生だったら、その目つきがおそろしいだろうと思いました。でも先生はちっともおおそれませんでした。杖でなぐりつけたつきには断食をさせました。しまいは牢屋を発明しました。ガスパールはその中におしこめられたきり、ほとんど外へは出されませんでした。

三

或日曜のことでした。ガスパールはすでに二月以上も外の空気をすわなかつたので、先生は、ガスパールを私たちと一しよに、村のはずれの牧場へつれていきました。

その日は、すばらしい、いいお天気でした。私たちは人取りあそびをして、せい一ぱい走りま

わりました。雪や氷すべりを思い出させる、つめたい北風を頬にうけて、はしやぎ喜びました。
 ガスパールは、いつものように、みんなからはなれて森のへりに立ち、木の葉をうごかしたり、
 枝を切ったりして、一人であそんでいました。しかし、かえるとき、整列すると、ガスパールが
 一人だけいません。みんなでさがしまわり、よび立てました。ガスパールは、にげ出したのです。
 クロック先生はいきり立ちました。先生の太い顔がまっ赤な色になり、舌のさきはドイツの、の
 ろいの言葉でこわばりもつれました。

先生は、みんなをつれてかえった上、私と、もう一人、大きな生徒をつれてガスパールの叔父
 のヘナンの水車場へ向っていききました。

夜になりました。どの家でもみんな窓をとじてよくもえた火と、日曜日のおいしいごちそうと
 であたままっています。一すじの火影が道の上に流れています。人々は、もう部屋の中で食事
 についているのだとおもわれました。

ヘナンのうちへつきますと、水車もとまっております、柵もとざされ、粉をはこぶ獣人も、みん
 なかえり去っています。下ばたらきのものが私たちのために戸をあけてくれたとき、馬や羊
 が、わらの中にごぎました。鳥小屋のとまり木の上では、はげしい羽ばたきの音と、おそれの
 さげび声がありました。それらの生ものが、みんな、こわいクロック先生を知っていてもしたよう

に。

水車場の人たちは、あたたかな、あかるくあかりのついた大きな台所で食事をしていました。時計の振り子から、釜にいたるまで、みがかれ、光っていました。

ガスパールはヘナンと、おかみさんとの間にはさまってテーブルのはしにすわり、だいじにされ、愛しなでられている、幸福な子のうれしさを顔中にあふれさせていました。

ガスパールは、にげかえって、きょうはオーストリアの大公の、だれだれのお祝いで、ドイツ人にも祭日なので、かえって来たのだと、こしらえごとを言ったのです。それでヘナンやおかみさんたちは、ガスパールのかえったのを祝っているところだったのです。

ガスパールは、クロック先生が来たとき知ると、かわいそうに、どこかににげ口はないものかと、ぐるりを見まわしました。しかし先生の太い手は、すぐに、ガスパールの肩の上におかれました。先生は手みじかにガスパールがにげ出したことをヘナンに話しました。

ガスパールは頭を上げました。もう、しくじりをしてつかまった生徒のような、はにかんだ容子はしていません。いつも、めったに口をきいたことのないガスパールは、そのとき、ふいにじぶんの舌を見つけ出しでもしたようにどなり立てました。

「ああ、そうだよ。ぼくはにげて来たんだよ。二度と学校にいきたくないんだよ。ぼくはドイツ

語なんか——どろぼうの、人殺しの言葉なんか、話さないよ。父さんや母さんのように、フランス語を話したいんだよ。」

ガスパールは、怒りでぶるぶるふるえながら、すさまじい、けんまくで、こう、どなりました。「おだまり、ガスパール。」と叔父はおさえようとしました。でも何ものもガスパールをとめることは出来ませんでした。クロック先生は、

「かまいません。かまいません。ほっときなさい。私がいまに憲兵と一しょにつれに來ます。」と、あざわらいました。大きなほう丁がテーブルの上ののっかかっていました。ガスパールは、それを、むずりとつかんだので、先生はあとすざりをしました。ガスパールは、「いいとも、憲兵をつれて來いよ。」と、どなりました。叔父はこわくなり出したと見え、とびかかってそのほう丁をもぎとりました。ガスパールが、

「ぼくはいかないよ。いかないんだい。」と、さけびつづけるのを、人々はよってたかって、そこいらへしぼりつけました。ガスパールは齒をくいしぼり、あわをふいて、

「おぼさア。」とよびました。叔母さんは、泣きふるえながら二階へ上ってしまったいました。馬車のしたくをする間に、ヘナンは、私たちに食事をさせようと思いました。私は、ひもじいどころではありませんでした。クロック先生だけは、むさぼるように食べました。ヘナンは、ガ

スパールが先生とドイツ皇帝をのしつたことを、くりかえしくりかえし先生にわびました。憲兵がおそろしかったのです。

四

何という、かなしい、もどり道だったでしょう。ガスパールは、馬車のおくのわらの上に、病気の羊のようによこたわったきり、もう一とことも言いませんでした。私はガスパールが怒りと涙とにつかれつくして、寝入りこんだのだと思いました。帽子もかぶらず、マントも着ないままなので、ひどく寒いだろうと気づかいました。しかし先生がこわいので何も言えませぬ。

つめたい雨がふり出しました。クロック先生は、毛皮うらのついた帽子を耳まですっぱりかぶって、鼻うたをうたいながら、馬を平手でたたきました。

星の光りが風でおどりました。私たちは白い氷った道をすすみました。もう水車から遠くはなれて、せきのひびきもきこえません。そのときよわよわしい、訴えるような泣き声かふいに車のおくから聞え出しました。その泣き声は、私たちの、アルザスの方言で言いました。

「放しておくれよ、クロック先生。」

それはいかにも悲しい声だったので、私は目に涙がにじみました。クロック先生は意地わるそうに笑って、馬にむちをあてながら、うたをうたいました。

しばらくすると、また泣き声がおこりました。

「はなしておくれよ、クロック先生。」

やはり、ひくい、かなしい、機かい的な調子でした。かわいそうに、ちようどお祈りをでも暗誦しているように、つづけました。

とうとう車はとまりました。私たちは学校へもどったのです。クロック夫人は、校舎のまえに、がんどうぢ、ようちんをもって待っていました。

夫人はひどくおこっていて、いきなりガスパールをぶちのめそうとしました。クロック先生は、それをおさえとめ、意地わるそうに笑って言いました。

「あす計算をつけよう。今晚はもうたくさんだ。」

全くです。ガスパールは、あれだけいじめられれば十分です。ガスパールは熱でからだがるえ、歯がかちかちになっています。私たちは、ガスパールを寢床につれていききました。

私もその晩は、熱が出ました。私は夜どうし、あの車の牢屋を感じ「はなしておくれ、クロック先生」というあわれなガスパールの声が、いつまでも耳をはなれませんでした。

少年馱伝夫



「少年駅伝夫」

挿画／竹寄 百奈

少年駅伝夫

—

スウェーデンの冬は、それはきびしい寒さで、私のような外国人が、首府のストックホルムより北へ旅行するなどということは、めったにありません。ストックホルムの八百マイル北方までにはボスニア湾にそうした谷間の平地に、村らしい村がないでもありませんが、それから先はノルランドという一たいの広野で、もう果物の木などは一本もなく、作物といえは、ただわずかばかりの大麦とジャガイモが作れるばかりです。その少しおくへいくと、かつて人間が足をふみ入れたことのない大深林や、一面に氷りついた湖水や、雪と氷とにおおわれた、たかい山脈だけがつづいているのです。生命をもつて動いているものと言えは、熊と狼と、野生の馴鹿の群のほかには何ものもおりません。こんな広野の中に住む人間が、みなさんにくらべて、どんなに、しんぼうづよく、はたらきずきに出来上っていなければならないかを、ためしに想像してごらん

さい。

私は、或用事で、こういうノルランドのま冬を旅行して来ました。この土地へはいると、寒暖計はたちまち零度になり、どんどん、零下十度、二十度、しまいには、三十度以上になって来ます。でも、からだは、あつい毛皮で、頭の前から足のさきまでくるみ、顔もほとんど目ばかり出しているだけです。それほどの寒さもなくべつ苦痛でもありませんでした。

乗りものはむろんそりだけです。冬中は沼も河もかたく氷りついており、その上を、馴鹿や馬がそりをひいて走りわたるので、雪のないときに馬の背中をかりて、遠まわりをして歩くよりも、よほど便利です。とちゆうには、すべての旅行者のために政府の手で十マイル、または二十マイルおきの村々に、駅舎がたてられています。その駅舎々に、いく頭ずつかの馬と、たまに、いくだいかのそりがそなえてあります。しかし、旅行者はたいいてい、じぶんじぶんのそりをもっていて、ただ馬だけを駅で借りて、つぎからつぎへとわたっていくのです。駅の番人がいない場合には、あたりの農民が馬へくらをおいてくれます。そしてやはり農民や、または農家の男の子が一しよにそりに乗って来て、つぎの駅でもとの馬を引いてかえってくれるわけです。これを駅伝夫とよんでいます。

この地方の住民たちは、きらきらした黄色い髪とすきとおるような青い目と、おどろくばかり

に白い、きれいな歯をもった、見るからに強健な人種で、いずれも、寒気を防ぐために、窓と戸口とを二重につけた木造の小屋に住っています。われわれから見れば、簡素というより以上に、むしろいたいたしいくらい、もの不自由な生活ですが、でも、みんなは、それでもってすっかり満足して、何のくつたくもないさまに、平和にみちてくらしています。冬中は外の仕事がないので、みんなで一間のたき火にあつまり、女たちは糸をつむぎ、はたをおり、男たちは農具をつくろったりしています。人間としては、まったくこの上もなく、うぶなもので、私たちのようなほんのとおりの旅行者にたいしても、それこそ親身のように親切をつくしてくれまます。おそらく世界中に、こんな純情な人種はまたとないだろうと思うほどです。

二

ノルランドの旅行という、いつもまっさきに私の頭にかぶるのは、或かわい一人の少年駅伝夫と、その子と一しよにくぐった暗夜の雪中の冒険です。

或晩、そりに乗って或村道をとおっていきますと、ひよこりと、北の空に、とてもすばらしい極光が出て来ました。びっくりするほど、きらきらした、赤と青との、いくすじもの、するどい

光ひかりの流れながが、そつちこつちから空そら一ぱいにふき上り、それがおたがいに、非常ひじょうな速度そくどでおっかけ合あつては地ち平へい線せんへしずむので、その壯觀そうかんはとても言葉ことばで言いいあらわすことは出来できません。一しよに乗のっている駅伝夫えきでんふは、それをあおいで、

「ほう、大雪おおゆきあらしが来るくな。こんな光ひかりがたつと、あくる日はきつと大おおあらしだ。」と言いいました。

その晩ばん、予定よていの村むらにとまって、あくる朝あさおき出でて見みますと、空そらはすっかり黒くろずんだ雲くもでおもくおおわれています。この地方ちほうでは、日中にっちゅうというものが非常ひじょうにみじかいのですが、今日きょうは日中にっちゅうも、われわれの夕方ゆふがたどきのようなうす暗くらさでした。しかし寒氣かんきはそうひどくもないので、私わたしは、またそりに乗のって急いそぎました。そこから先さきは、平野へいやつづきで、村むらと言いつても家いえはいくらもないような、さびしいところです。

私わたしはこの平野へいやを横よこぎって、向むかうのウメアという村むらに泊とまる都合つごうにしています。ところが、午後ごごウメアの一手前ひとてまえの駅舎えきしやまで来きますと、二頭にとうしかない馬うまが、二人ふたりづれの材木商ざいもくしやうの旅客りよかくに借かりられたそうで、私わたしは夜七時よるじまでむなしくそこでまっています。ところが馬うまはまだかえって来きません。私わたしは氣きがせくので、そこいらの農家のうかをさがしてまわり、ようやく一頭とうの馬うまを見みつけ出だしました。駅えきの番人ばんにんは材木屋ざいもくやと一しよに乗のっていったそうで、かみさんが出でて来きて、私わたしの馬うまにかいばをく

れました。ここからウメアまではまだ二十マイルもあるのです。とちゆうには、食事をするところもないので、ぜひここで晩飯を食べて出なくてはなりません。それで、番人のかみさんにたのみますと、かみさんは、ころよく家へつれていき、火のそばにすわらせて、おいしいコーヒート、ジャガイモと、馴鹿の肉のやいたのを出してくれました。その家は、大きな黒い森のそばにたっているのです。食事をしていると、急にうしろのその森の中で、ごおうごおうごおうと、北風が木々をゆすつてうなりはじめました。かみさんは、

「おやおや、ひどい風が出ましたね。わるい晩ですこと。これじゃうちの人は、たぶん、ウメアに泊って、あしたの朝でなければかえりませんまい。向うへおつきになったら、きつと駅舎にいますでしょう。かわりにラルスをつけてお上げします。ラルスはあすの朝、うちのひとと一しょにかえればいいんです。」と言います。

「ラルスというのはだれです。」と聞きかえしますと、

「手まえどもの子どもですよ。あいにくきんじょにも、だれもおともをするものがいまぜんから。——ラルスはいま馬のくらづけをしております。」と、かみさんは答えました。

と、ちようど、それと同時に戸口があいて、十二ばかりの小さな男の子がはいって来ました。絹のたばのようになった金色の髪の毛を、顔のうしろにふさふさとかぶった、頬のまっ赤な、

まるい青いきれいな目をしたかわいい子どもです。私ばかりの晩に、小さな子どもをよく平気で出すものだとおどろきました。

「ラルス、ここへお出で。」と、私は、その子の手をとって、

「こんな晩に出ていくのは、こわいだらう？」と聞きました。子どもは、きよとんと目を見はつてほえんでいます。かみさんはここにこ笑って、

「何、この子だつてだいじょうぶおともをします。あらしがつよくさえならなければ、十一時ごろまでにはウメアへおつきになれますよ。」と、私が、この子で間に合うかどうかとうたがいでましたように弁解するのです。私は、どうもあらしがごうごうなるのが心配でたまりませんでした。思い切つて予定をかえて、今晩はこの村へ泊ろうかと考えかけました。しかしラルスは平気で、もうどんだん羊の毛皮の外とうを着、毛皮の鳥打帽子の両がわのたれを下してあごにくくり、厚い毛おりのえりまきを、目ばかりのこして顔中にまきつけます。母親はストーブの上にかわかしてある、うさぎの毛皮の厚い手袋をとってわたしました。ラルスはすばやくそれをはめて、みじかい、なめし革のむちをとり上げて、私をまっています。

私は外とうの上へ、さらに毛皮をかぶって、ラルスと一しよに戸外へ出ました。外にはいつの間にか雪がふりしきっています。はげしい風と一しよに、雪片がびゅうびゅうと横なぐりにふき

つけて針のようにするどく顔にあたります。ラルスは手早く、やわらかい干草をどっさりその中へつめこんで、私のあとからとび乗りました。二人はきゆうくつにおしおしにすわり、ひざから腰へかけて馴鹿の毛皮をぐいぐいおしこみました。母親は戸口に立って見ています。そこからもれるあかりで、わずかに、そりや馬も見えていたのですが、ラルスがむちをならし、馬が歩き出し、母親が戸口をしめると同時に、急に目の前がまっくらになってしまいました。雪はぴゅうぴゅうふきつけます。ラルスはその暗がりの中でも道がわかると見えて、ごうごうぴゅうぴゅうなり立てる左右の森の音の中を、さくさくと馬をあるかせます。

「ほいッ、左だ。よし。このまま、まっすぐに……。ほいほい歩け、アキセル。」と、ラルスは、たえず元気に馬へ話しかけます。

「もつと道のまん中を歩けよ、アキセル。ほらほらまた左へよりすぎる。ようしよし。ほら、足の下が平になった。少し走れよ。ほいッ。」

こうして私もかくべつ不安もなしに、林をくぐり岡を上り、また下りては上りして走りました。その間、ものの十分二十分とたつのが、それは長い長い時間のように思われました。ラルスは馬とお話をしないときには、何だか、わけのわからない小歌をうたったり、讚美歌のふしをきれぎれにうとうううたったりします。そのうちに、私はからだ中がぞくぞく寒くなって来ました。ラルスも手袋の中の手がひどくつめたくなったと見えて、手綱を私にわたし、血の循環をうながすために、手先をぶるぶるふったり、手の平をたたき合せたりしつづけました。もう歌もうたいません。しかし、ちっともいやがったり、いく手を苦にしていたりするようすはありません。

「もうだいぶ来たね、おい。」と、十分おきぐらいに、私がこう言い言いするたんびに、「まだまだ。」と、元氣よく答えます。そのうちに風がなほひどくなりました。ごうごうびゅうびゅうと森の木がうなりつづけます。

「おお、ここか。わかった。もう、あと一マイルですよ。」と、ラルスは、やがて、私をいきおいづけるようにこう言いました。しかし、その一マイルというのはスウェーデンの一マイルでわ

れわれの七マイルなのですから、まだまだたいへんです。

と、ラルスは、ひよいと馬をとめて、くらがりの中を、じろじろと、すかして見ています。私には、八方まっくらで何にも見えはしません。

「どうした？」と、私は聞きました。

「今長い岡を下りたところです。ここから先は、ふきツぎらしで、雪がうんと街道へふきたまるんです。今夜、雪かきが出てくれなかったら、向うの方は道がなくなるんですが。」と、言い言いかんが考えこんでいます。この地方では、吹雪で道がうずまると、農民たちは、牛や馬にすきをつけて、旅人のために、総出で野原の中の道をかきわけに出かけるのです。

「ほいッ、歩け、アキセル。」

間もなくラルスはこう言ってむちをならしました。それから約三十分ぐらいの間、馬はふかい雪の中を、ざくりざくりと、それは、のろつくさく、苦しそうに歩きました。と間もなく、馬は、もう動けなくなったのか、ばかりと立ちどまって、ふうふう息をついています。ラルスは立ち上って、くらがりの中をのぞきこみながら、

「ふ、へんな森のそばへ来たな。」と言います。そして、

「ほいッ。」と、むちでアキセルをたたきました。馬は、よろよろ五足六足歩きましたが、また、

ひよこりと立ちどまりました。

「おい、道からはぐれたのじゃない？」

「ええ。」

「じゃア下りて、さがそうよ。」

「だめ。ここいらへ下りれば、あたしの腰のところで雪の中へうまるんです。ほら、おっそろしいふきたまりだ。まって下さい。ここんところをうまくとおりぬけなけりや。ほいッ、歩け、アキセル。」

馬は、五、六分間ぐさりぐさりと雪だまりをくぐって、やっと、雪の浅いところへ出ました。ところが、そこは、雪の下がかちかちの道ではないらしく、下の方がでこぼこで、木の根やいばらのかたまりがあるような感じですよ。

「どうッ。」と、ラルスは馬をとめて、そりからとび出しました。そして、みしりみしりと雪中を歩いて道をさがしているようです。私は、反対のがわへ下りました。

「おい、ラルス、ここは森のはずれだね。」と、私は、そばに大きな木がずらりと立ちならんでいるのを感じてこう言い言い、五、六歩前方へ歩き出しますと、急にずぼりと、ひぎの上まで雪の中へうまりこみました。

「おお、いけない。ふう。」と私はおもわずこうさげんで、やっと足をぬいて、引きかえしました。

「ラルス、とんでもないところへ来てしまったね。とおりぬけられるかね、この雪の中が。」と、ひどく不安になって、こう言いかけますと、ラルスは、

「はアい。」と、遠くの方から、とんちんかんな返事をして、ざくりざくりとかえって来ました。

「道がわかりさえすれば、そっちへ引きかえすんだけれど、分らないや。朝までここにじっとしているんだね。あつは。」と、ラルスは笑い笑い手先をふっています。

「おい、じょうだんじやないぜ。こんなところにまごまごしていれば、一時間もたたないうちにこごえ死んでしまうぞ。」

私は、少しむツとしてこう言いました。もうからだは骨のまん中まで冷えきっています。それに風にびゅうびゅう打たれどおしですから、そのつかれのために、何だか眠いような気もちです。もしこのまま雪の上に寝たおれでもしようものなら、たちまちこごえ死んでしまうのです。

「どうする、ラルス。」

「ううん、だいじょうぶよ。ノルランドの人間はこごえなんかしやしない。私は去年の冬は、大人の人と一しよに山の中へ熊をうちについて、四晩も五晩も、雪の中へ寝たけれど、平気だった。」

私^{わたし}がちやんとよくするから、さわがないでね。いつかうちの父^{とう}さんがストックホルムから来たお客^{きやく}さまについて行って、やっぱり、こんなふうには、夜^{よる}、雪^{ゆき}あらしの中で道^{みち}がわからなくなったことがあるの。そのとき父^{とう}さんがしたとおりを、これからすればいいんだよ。」と、おちつきはらつてこう言^いいます。

「つまりどうするんだ。」と、私^{わたし}は、息^{いき}づまるような雪^{ゆき}風^{かぜ}に顔^{かお}をそむけながらききました。

「第一^{だい}ばんに、アキセルをはなして木^きの下^{した}へつなぐのよ。手^てつだつてね。」とラルスは、馬^{うま}のく^くらをとりはずしにかかりました。私^{わたし}も手^てだすけをしました。が、こういう暗^{くら}がりの中で、雪^{ゆき}にしめりぬれた革^{かわ}ひもなぞを一^{いち}々はずして、くらをとき下^{おろ}すのは中^{なか}々^{なか}よういなことではありません。やつとそれがすみますと、ラルスは馬^{うま}をはずして、そばの、木の木^きのところへつれていき、枝^{えだ}の下^{した}へ入れこんでつなぎ、そりの中^{なか}から馴^{とな}鹿^{かい}の毛^け皮^{がわ}を一^{いち}まいもち出して、馬^{うま}の背^せ中^{なか}へかけました。それから、干^{ほし}草^{くさ}を一^{いち}かかえもつてきてあてていました。馬^{うま}は満足^{まんぞく}そうにもぐもぐと食^たべはじめました。ノルランドの馬^{うま}は、こんな寒^{かん}気^きの中^{なか}でもこごえないように馴^なれ来^{きた}っているのです。

ラルスはそのつぎには、そりの中^{なか}の干^{ほし}草^{くさ}を平^{たいら}にならして底^{そこ}へしき、そりの上^{うえ}へ、ありたけの毛^け皮^{がわ}を、風^{かぜ}にふきとばされないように、しつかりと、方^{ほう}々^{ほう}をくくりとめて、すき間^まのないようにぎつしりかけならべました。ラルスはその一^{いっ}方^{ぱう}のはしを、めぐり上げて、

「はい、外とうをぬいで、ここからおはいりなさい。中へしいて、その下へもぐりこむんです。」
 私は命じられるままに外とうをとりました。そのときには、ぶるぶるツと、からだ中がちぢみ上るほど寒かったのですが、その中へもぐって、その毛皮の外とうの下へはいると、すっかり雪あらしからのがれて、ほっとした気もちになりました。

「ここを、めくって。」というので、すわったまま、はすかいに手をのぼして上の毛皮をもち上げますと、ラルスは同じく外とうをぬいで、私のそばへしき、

「ほいしよウ。」と言ってもぐりこみました。ラルスは、それから、今二人のはいった毛皮のふちをしつかりとくくりつけ、四方のふちふちへ干草をもち上げて、風が少しもはいらぬように、せきとめました。それがすむと、

「さ、早くくつをぬいで、えりまきもとって、それから上着も胴着もズボンも、すっかりボタンをはずして着物を、からだ中どこへも、かたく、くツついてるところがないように、ゆるくして。」
 と言います。

「出来た？ それじゃ横にお寝なさい。二人で、ぴったり、くツついて寝るんです。ほら、あつたかいでしょう？」

それこそ、まったく身うごきをする余地もないほどきゆうくつですが、しばらくじいっとして

いると、まるであたりまえの寢床へでもはいったように、ぼかぼかとあったかで、雪あらしの野原の中なかにいるということもわすれてしまひそうでした。それに、ふしぎなことには、二人の息いきがつまらないように、必要なだけの空気が、どこからか、しらずしらずはいって来るものと見えて、毛皮けがわを頭あたまからひつかぶっていても、ちっとも息いきぐるしくはありません。

「なるほど、うまい考えもあるものだ。」と、私はひとりでに口に出して言いました。

「だまって寝ましようよ。」と、ラルスは、あべこべに私を制しなから、もう、すやすやと寝息ねいきになってしまいました。私もそれから、ものの五分とたたないうちに、ひゆうひゆうという雪あらしの音おとを夢ゆめの中なかのように聞きながら、ぐっすり寝入ねいってしまいました。

四

あとでおもうと、何なんだか、二人は、眠ねむっていて、一、二どむにやむにやと話をしたような気もしますが、それはぜんぜん気のせいでしょう。ともかく、そのまま、夜よどおし、ぐっすり寝たのです。私は今いまでもこのときのことをおもうと、横よこになった私の鼻はなのまえに、子どもくさい、ぼかぼかした、ラルスの頭の毛けがあり、ラルスの足先あしさきが、もくもくと私のひざの上うえに乗のっている

のを、まざまざと感じ得られます。

こうして、眠りつづけた私は、最後に、何だか肩のあたりがつかえるような、こわばった気もちを、うとうとたたえながら、でも半分はやっぱり眠っているうちに、ひよいと、冷たい風がすうつと顔にあたって、びっくりして目をさました。見ると、ラルスが両ひじをついて、毛皮を少しばかりめくって、外を見えています。

「今六時ごろでしょうよ。空はすっかりはれている。大きな星が一つ見える。もう一時間もしたら、出かけられるな。」

ラルスは、さっきから二人で話していたつづきのようになんか言います。私は、よく眠ったので、すっかりつかれもとれて、子どもにでもなったように、さすががしたいいい気もちでした。

「おい、もうおきて、いこうよ。」と、私は元気にみちてこう言いますと、ラルスは、くびをふって毛皮をとぎしました。

「いくと言ったって、道がわかりはしません。」

「一時間たつとわかるのかい？」

「だれかがとおるから。」

こう言っているしゅん間に、アクセルが、ヒヒヒンと、たかくなきました。

「ほ、馬が来たな。」と、ラルスははねおきました。

「早く着物をなおして、くつをおはきなさい。来た来た来た。」というので、私は何のこともわからぬなりに、急いで身じたくをしました。

そうしているうちに、遠くの方で、人のさけび声や鈴の音が聞えて来ました。農民の一隊が、うもれた道の雪かきに来たのだというのです。二人はアキセルを引き出して、くらをおいてそりにつけました。そして、人声のする方角へ、ざくりざくりと馬をすすめました。すると間もなく、夜あけまちかのうすぐらい雪づもりの中に、人と馬とのすがたが黒く見えて来ました。二とうだての馬が六組、雪かき道具を引いて動いているのです。それはちょうど船のへさきのように先がとがり、巾が十フィートから十二フィートある木を組み立てた、わくのようなしかけのものです。これをぐいぐい引いていくと、雪がはねのけられて、かたく氷のかたまった道路が出て来るのです。

その一隊がとおすぎたあとを、私たちは、らくらくとそりをはせて、ゆかに行進しました。ラルスは小鳥のようににこにここと、口ぶえをふきます。こうして一時間と少しで、ことなくウメアの駅舎につきました。

そこには、ラルスの父親がいました。もうすぐ、出かけるつもりで、馬にのるばかりにしてい

たのですが、ラルスが来たのを見て、笑ってむかえ、わたしたちからゆうべのすべてのことを聞いた後、ラルスの頭へ手をおいて、私たちを食事につれていきました。

食事がすむと、私は二人にかたくかたく握手をして、ほかの馬に引かれてラブランド地方へ向って立ちました。

それから数週間の後、ストックホルムへかえる途中で、再びラルスの父親の駅舎に着きました。その日は天気もはれぱれた、いい日でした。父親は、つぎの駅舎までじぶんについて来ようとなりましたが、私は、たのんで、ラルスを借りて立ちました。そして三時間ばかりゆかいに話しながら走った後、二人はいくども、さようならをして、永久にわかれたのです。

ラルスは、たった十二の子どもであり、私はいうまでもなく大人です。しかも私は、ほとんど世界中をめぐって来ている人間、ラルスは、じぶんの村から、上下二つの駅舎の間しか見たことのない子です。それにもかかわらず、私は、ラルスからはいろいろの貴い教訓を得ました。もっとラルスと一しよにいたら、まだまだ多くの感動をうけとったにちがいありません。



「ぶしょうもの」

挿画／木村 侑加子

ぶししょうもの

—

むかし江戸えどに、ぶししょうものぞろいの親子おやこがいました。或晩あるばんのこと、父親ちちおやがふとんにくるまつて煙草たばこをふかしていますと、ひよいと、すいがらがとんで、たたみがくすぶりだしました。むすこはこちらにねそべって、ぼんやりとそれを見ていましたが、そのうちに、たたみは黒い煙けじりを上げてでもえ出だしました。

「おい、おとつア、すいがらでたたみが焼やけ出だしたけどどうしよう。おきて消けそうか。」と聞きましました。

「いいよ、うっちゃっておけ。」と父親ちちおやは生なまあくびをしながら言いいました。すると間まもなく火ひは障子しょうじへついて、ぼうぼうもえひろがりました。

「こりやいけない。おとつア、けさないと火事かじになつてしまふぜ。」

「なアに、いいよ。うっちゃつとけ、めんどうくさい。」

「あつ、もう天井へうつつた。おきようよ。」

「いいよいいよ。うるさいね。」

「おやおやふとんのすそへ火がまわつたよ。おとつアん、おきなぎやあぶないよ。」

「何に、かまうものか。ああねむい。」

こんなことを言ってるうちに、とうとう二人とも焼け死んでしまいました。となり近じよも、まるやけになりました。

こういう二人のことですから、死ぬといきなり地獄へおくられてえんま大王のまえにつれ出されしました。大王は、

「こりや。」と二人をにらみすえて、

「その方たちはあきれはてた大罪人だ。二人とも、もう二どと人間に生れることは出来ないぞ。つぎの世には牛か馬かに生れかわらすから、そう心得る。」と、言いわたしました。父親はおそろおそる顔をあげて、

「ですが大王さま、馬と申しますと、おmoi荷物をつんで山や坂を上つたり、あぶない戦場をか
けまわらされたりして、たいへんでございます。又、牛にしたところで、やはり田畑をたがやし

たり、何十貫もある石をひっぱったりしなればなりません。私ども親子は、ごぞんじのとおり
のぶしょうものですから、そういう仕事はとてまつとまりません。出来ますことなら、どうか、
猫にしていただけませんか。」「と言いました。

「ふん。猫がよければ猫でもよい。」「

「これはこれがあります。それで、まことにあつかましいおねがいですが、
猫と申ししてもぶちや白の猫でなく、まっ黒な黒猫におねがい申したいのですが。」「

「いろんなぜいたくをいうやつだ。」「と、えんまさまはすこしむっとしましたが、

「では、黒猫にしてやろう。」「

「ありがとうございます。それにつきまして、もう一つおねがいがありますが。」「

「ふう。ずうずうしいやつだな。もう一つって何だ。」「

「黒猫は黒猫でございしますが、どうか鼻の先を少しだけ白くしていただきとうございます。」「

「へんなことを言うね。では、ついでにそれもかなえてやるが、一たい何の必要があつて鼻先だけ
白くするのだ。」「

「はい、それには少し考えがございします。そうしていただきますと、ねずみどもは暗がりでは私
たちを猫とは思いません。鼻の先の白いところだけを見て、飯つぶのかたまりだと思つて近よつ

てまいります。ですから私たちは、ねころんでいてねずみをとって食うことが出来ませうわけでございます。」

むつかしい顔をしたえんま大王もそれを聞くと、思わず大きな口をあけてはッはと笑いました。

二

やはり、むかし、この親子にもまけないぶしようものが江戸にいました。或とき、おかみさんにたのまれて、おかみさんの病気がなおったおれいまいに身延山へ出かけることになりました。ぶしようものは、じぶんの信心からおまいりするのではないのですから、出かけるのがおっくうでたまりません。いよいよ立つという朝もおかみさんにひっぱられてしぶしぶ門口まで出ていきました。

「じゃアいつてらっしゃい。さ、これはおべんとうですよ。」

「すまないが、ちよいと、それをおれのくびへぶら下げてくれ。手を出すのがめんどうだから。」

「まあ、あきれた。——はい。それから財布。おとさないようによく気をつけていらっしゃいよ。」

「よしよし、わかった。ついでにそれもふところへいれてくれないか。——はい、ありがとう。」

それからもう一つ、ついでに背中をどんと、ついておくれよ。」

「それはまた何のためです。」

「だって、ついてもらわなけりや、歩き出すのがおツくうだ。」

おかみさんは仕方なしに背中をどんとつきました。するとぶしょうものは、ふところ手をしたまま、ふらふらと向うの家へはいつていきました。

「おい小僧、だれだい、今のは。勝手もとをくぐって裏の方へはいつていったじゃないか。」と向うの家の亭主が言いました。

「ああ、お向うの旦那なですよ。裏のへいのところうしろ向きに立つてお出でです。」

「もしもし、どうなすつたんです。」

「何ね、ちよいと身延山へおまいりしようと思つて出かけたところですがね、うちのやつが背中を下手についたので、こんなところへとびこんでしまったのです。いいあんばいに裏口がしまつていたのでとまったようなものの、この木戸があいていたらどこへいったかわかったものじゃありません。まことにすみませんが、どうか身延山の方へ向けてどんとつき出して下さいませんか。」

「はッは、これはおどろいた。おい小僧、おまえも来い。——そら、どしん。」と二人がつきと

ばしました。

「や、ありがとうございます。おじやまさまでした。」

ぶしようものはやっと歩き出しました。そしてとうとう身延山へつきました。

「もしもし、あなた。」と、ぶしようものは、むらがりあつまっている、さんけい人の一人によびかけました。

「まことにすみませんが、私のふところに財布がはいっていますから、中から一銭出しておさいせんばこへなげて下さいませんか。」

「おやおや、手でもおいためになったのですか。はい、おさいせんを出しましたよ。はい、上げました。財布のひももこのとおり、ちゃんとこうむすんで、はい、ふところへ入れときますよ。」

「いや、どうもありがとうございます。ついでに私のかわりに手を合しておがんでくれませんか。」

「へえ、それはまたどういうわけですか。」

「何、手を出すのがおっくうだからですよ。」

「おどろいた人だね。じゃ手だけは私が合わすから、おがむのはじぶんでおがみなさいよ。」

ぶしようものはそれでもかくさんけいをすましたので、やれやれと思ひながら山を下つていききました。すると、下の方から、よれよれのきたない着物を着た男が、大口をあけたまま、ぶら

りぶらりと上^{のぼ}って来^きます。ぶしょうものはその男^{おとこ}を見て、

「ははア、あいつはよっぽどおなかがすいてると見^みえるな。何か食^くいたい食^くいたいと大口^{おおぐち}をあけている。よしおれのこのべんとうを食^くわしてやろう。おれは、食^くうのがめんどくさいので、うちからもって来^きたべんとうをまだこうしてぶら下げてるんだ。あいつに食^くってもらえば、世話^{せわ}がなくていい。ああもしもし。」

「何^{なん}だい。」と相手^{あいて}の男^{おとこ}は、ろくに見向^{みむ}きもしないで、そっけない返事^{へんじ}をしました。

「あなたは大きな口^{くち}をあけてお出^いでだが、よほどおなかがすいていらっしやるのでしよう。わたしのこのべんとうを食^くってはどうぞです。」

「いや、べつに腹^{はら}なんかすいていやしませんよ。」と、その男^{おとこ}は、やはり大口^{おおぐち}をあけたまま、めんどくさそうに言^いいました。

「では、どうしてそんなに口^{くち}をあけているのです。」

「笠^{かさ}のひもがとけかかっているんですよ。むすぶのがおっくうだから、こうしてあごでとめてるんです。」

「へへえ。」と、さすがのぶしょうものも、この男^{おとこ}にはあきれてしまったということです。

「赤い鳥」解説

一 「赤い鳥」の歩み

大正七年（一九一八年）七月、児童雑誌「赤い鳥」が創刊されました。主宰は、広島市出身の小説家 鈴木三重吉です。その二年前、娘すずの誕生が一つのきっかけとなり、三重吉は児童雑誌の刊行を計画し始め、同じ年に最初の童話集『湖水の女』も出版しています。三重吉は、それまでの教訓的なお伽噺や唱歌、通俗的な読み物ではなく、子どもたちのために、より芸術的価値のある童話や童謡を創作することを目的として「赤い鳥」を刊行しました。

夏目漱石門下であった三重吉は、同門の作

家たちや、小説家として活動する中で培った幅広い人脈を生かして、当時、第一線で活躍する作家たちに作品の執筆を依頼しました。

創刊号には、芥川龍之介、島崎藤村らの童話や、北原白秋

の童謡など、文

学性の高い作品

が掲載され、

清水良雄が描い

た色彩豊かな表

紙画とともに

「赤い鳥」は好

評を得ました。

「赤い鳥運

動」とも呼ばれ



「赤い鳥」創刊号目次（復刻版）

る、新しい童話や童謡の創作が多くの読者から支持を集めると、「おとぎの世界」、「金の船」（後、「金の星」に改題）、「童話」といった児童雑誌の創刊が相次ぎました。各誌が互いに特色ある作品や企画を競い、影響し合うことによって、この時代に新しい児童文学、児童文化が開きました。

昭和四年（一九二九年）三月号で一度休刊となった「赤い鳥」は、約二年後の昭和六年（一九三一年）一月に復刊します。昭和八年（一九三三年）、創刊以来、「赤い鳥」を共に支えていた北原白秋が、三重吉と衝突した結果、「赤い鳥」を去るという苦難にも直面しますが、三重吉は自身でも精力的に作品を書き、刊行を続けました。

昭和十一年（一九三六年）六月二十七日、三重吉は肺がんのため亡くなります。執筆から編集、出版に至るまで、三重吉が全力を尽くした「赤い鳥」は、同年八月号で終刊となり、一〇月には、三六〇ページにも及ぶ「鈴木三重吉追悼号」が刊行されました。創刊から一九六冊目となる追悼号には、連載中であった三重吉作品「ルミイ」（「家なき子」）の遺稿をはじめ、「赤い鳥」ゆかりの作家や、生前交流のあった作家たち、少年時代からの友人らによる追悼文が収められました。

二 「赤い鳥」の童話

三重吉は、文学として質の高い童話を創作するためには、一流の作家が子どもたちのた

めに作品を書くべきだと考え、当時の文学界を代表する作家たちに執筆を依頼しました。三重吉の呼びかけに応えた一人である芥川龍之介は、創刊号掲載の「蜘蛛の糸」のほか、「杜子春」などを「赤い鳥」に発表しています。気鋭の小説家として注目を集めていた芥川ですが、子どもたちに向けて童話を書くのは初めてであり、大変苦心したこと



「蜘蛛の糸」芥川龍之介／著
（「赤い鳥」創刊号（復刻版））

が伝わっています。

「赤い鳥」には、有島武郎や小川未明、宇野浩二、菊池寛、佐藤春夫といった著名な作家の作品だけでなく、新美南吉の「ごんぎつね」（発表時は「ごん狐」）に代表される、童話作家になることを目指した人たちの作品も掲載されています。文章に対して厳しい目を持っていた三重吉から評価を受けた平塚たけじ、つばたじょうじ、武二や坪田譲治らは、「赤い鳥」を経て、戦後も新しい児童文学を開拓し、担っていきました。

さらに、「赤い鳥」では、海外の民話や文学作品、日本の古典も紹介されました。作品が持つ雰囲気を残しながらも、当時の子どもたちが理解しやすいように書き換えなどの工

夫を加えて、三重吉も「地中の世界」（「不思議の国のアリス」）、「ピーター・パン」など多くの作品を遺しています。

三 「赤い鳥」

の童謡

「赤い鳥」では、北原白秋や西條八十らの童謡作品が毎号発表されました。当初、誌面には詩のみが掲載されましたが、読者からの要望に応



「からたちの花」北原白秋／著

（「赤い鳥」大正一三年七月号

（復刻版）

え、大正八年（一九一九年）五月号の「かなりや」では、西條の詩に成田為三作曲の楽譜が初めて付けられました。これ以後、草川信や山田耕筰ら作曲家の活躍も加わり、「赤い鳥小鳥」や「揺籠のうた」など、数々の「赤い鳥」童謡が誕生しました。

また、異聖歌や与田準一といった新しい童謡詩人が、北原白秋の指導を受けて「赤い鳥」から育っていきました。

四 「赤い鳥」の画家

鮮やかで斬新な表紙画や挿画、目次ページなどの装飾も「赤い鳥」読者を魅了しました。三重吉から絶大な信頼を受けていた清水良雄は、全一九六冊のうち、創刊号をはじめ約

八割の表紙を描き、美術面から

「赤い鳥」を支えました。他に

も、鈴木淳すずきあつしや深沢省三ふかさわしょうぞう、川上四郎かわかみしろう、武井武雄たけいたけおと

いった画家たちは、童話や童謡など掲載作品と調和させながら、個性的で新鮮な画風で「赤い鳥」の魅力を高めました。

五 子どもたちの表現

「赤い鳥」には、子どもたちの投稿作品も選評とともに掲載されています。綴方つづりかた(作文)は三重吉が、自由詩は白秋が、自由画は画家



表紙画「(無題)」清水良雄／画

「赤い鳥」昭和十一年一〇月

号(復刻版)

やまもとかなえ
の山本鼎が選者を務め、子どもたちの感性を尊重し、自由で素朴な表現を引き出す取り組みが行われました。特に、三重吉は「赤い鳥」休刊中も綴方について講演するため全国を回ったほか、優れた作品や選評、綴方理論などを出版し、現代に続く作文指導の基礎を築きました。

大正デモクラシーといわれる時代を背景に、三重吉が創刊し、情熱を注いだ「赤い鳥」から生まれた作品は、創刊から一〇〇年を超えた現在も読み、歌い継がれています。

『ぼよよん行進曲』を作るご縁を頂いた丁度その頃、僕は東京・雑司ヶ谷界隈に住んでいました。近所を散歩していたある日、雑司ヶ谷霊園のすぐ近くに「マッケーレブ宣教師館」という木造洋風建築の素敵な建物があって、そちらに立ち寄った際、そこは雑司ヶ谷の歴史と文化をテーマとした歴史博物館のような役割も担っていて、地域ゆかりの児童図書として「赤い鳥」が紹介されており、その復刻版も置かれていました。その創刊号を手に取り開いて見ると、その冒頭に鈴木三重吉氏が子供の純性を育むため自由で芸術性のある話・歌を創作し世に広める一大運動を高らかに宣言しており、まさにこれから童謡を作ろうとしていた僕は大きく心を揺さぶられました。

そこから生まれた作品に、自分も幼い日に「人のエゴ」について教え戒められた芥川龍之介の「蜘蛛の糸」や「贖罪を果たすこと」について考えさせられた新美南吉の「ごんぎつね」、北原白秋・山田耕作の名曲「からたちの花」などがあることも改めて知り、高い志に集った時代の寵児達の共鳴の先の創作の偉大な足跡を辿る貴重な出会いとなりました。

音楽の世界に今もプロデューサーやディレクターと呼ばれる仕事があります。作品はアーティスト自身が作り出すのだけれど、何をどう世の中に伝えるのか、コンセプトを投げかけ目標を設定し創作の環境を整える仕事。波紋の最初の一滴を「濃く絞り出す」人。(時に嫌われ者にもなるのですが...)偉大な作品に名プロデューサーあり。鈴木三重吉の遺した「赤い鳥」の波紋は今も尚広がりを続けています。

(シンガーソングライター 中西 圭三)

鈴木三重吉年譜

明治一五年（一八八二年）

九月二十九日 父悦二、母ふさの三男として
広島市猿楽町さるがくちょう（現 中区紙屋町二丁目）に
生まれる。

明治二二年（一八八九年） 七歳

四月 成達尋常小学校（卒業時は本川尋常
小学校、現 広島市立本川小学校）に入学。

明治二四年（一八九一年） 九歳

九月 母ふさが亡くなる。

明治二六年（一八九三年） 一一歳

四月 広島高等小学校（後に廃止）に入学。

明治二九年（一八九六年） 一四歳

四月 広島県広島尋常中学校（卒業時は広

島県第一中学校、現 広島県立広島国泰寺
高等学校）に入学。

明治三〇年（一八九七年） 一五歳

「天長節の記」が「少国民」一月号に、「あ
ほう鳩」が「少年倶楽部」三月号に、「亡母
を慕ふ」が同四月号に掲載される。

明治三四年（一九〇一年） 一九歳

九月 京都の第三高等学校に入学。



上 一中時代、下 東大時代（明治三八年）

明治三十七年（一九〇四年） 一二二歳

九月 東京帝国大学英文学科に入学、夏目漱石なつめ そうせきの講義を受ける。

明治三十八年（一九〇五年） 一二三歳

静養のため休学、実家や佐伯郡能美島（現江田島市）で過ごす。この間に小説「千鳥」の題材を得る。

明治三十九年（一九〇六年） 一二四歳

三月 「千鳥」を完成させ、四月 漱石に原稿を送る。「千鳥」の原稿は、「僕名作を得たり」と感激した漱石から高浜虚子たかはまきよしに渡され、「ホトトギス」五月号に掲載された。

四月～七月 広島市内の私立中学の講師となる。親友の加計正文かけまさふみを訪ねて加計町（現安芸太田町）で夏を過ごし、この間に

「山彦」の題材を得る。九月 上京して漱石門下となり、漱石宅での「木曜会」に参加する。高浜虚子、寺田寅彦てらだとらひこ、森田草平もりたそうへい、小宮豊隆こみやとよたからと親しくなる。



「ホトトギス」明治三十九年

五月号（「千鳥」鈴木三重吉

／著掲載）

明治四〇年（一九〇七年） 一二五歳

一月 「山彦」が「ホトトギス」に掲載される。四月 最初の短編集『千代紙』を出版。

明治四一年（一九〇八年） 二六歳

七月 大学卒業。父悦二が亡くなる。一〇月
千葉県成田中学校（現 成田高等学校）
の教頭として赴任、英語を担当する。

明治四三年（一九一〇年） 二八歳

三月〜一〇月 「国民新聞」へ長編小説「小
鳥の巣」を連載。

明治四四年（一九一一年） 二九歳

四月 成田中学校を退職後上京し、海城中
学校（現 海城中学高等学校）の講師とな
る。五月 ふじと結婚。

明治四五年・大正元年（一九二二年） 三〇歳

活発な創作活動により、雑誌等への作品掲
載や『返らぬ日』『お三津さん』『小鳥の巣』
の出版が相次ぐ。

大正二年（一九一三年） 三二歳

四月 中央大学の講師となる。七月〜一
月 「国民新聞」に長編小説「桑の実」を
連載。

大正四年（一九一五年） 三三歳

二月 『三重吉全集』（全一三巻）の刊行
を始める。四月 「中央公論」へ「八の馬
鹿」を発表、以後小説の執筆をやめる。



上) 『桑の実』、
下) 『湖水の女』（復刻版)

大正五年（一九一六年） 三四歳

六月 河上らくとの間に長女すずが生まれる。七月 妻ふじが亡くなる。一二月

童話集『湖水の女』を刊行。

大正六年（一九一七年） 三五歳

四月 『世界童話集』（全二二巻）の刊行を始める。清水良雄しみずよしおが装丁、挿画を担当し、後の「赤い鳥」へ続く親交が始まる。

大正七年（一九一八年） 三六歳

一月 長男珊吉が生まれる。七月 「赤い鳥」を創刊する。九月 海城中学校を辞職、中央大学を休職する。

大正一〇年（一九二一年） 三九歳

一月 らくと離別。一〇月 小泉濱はまと結婚。

大正一二年（一九二三年） 四一歳

九月 関東大震災起こる。三重吉宅は人命建物ともに無事であった。

大正一三年（一九二四年） 四二歳

四月 父の法事のため、二人の子どもを連れて広島に帰省。

昭和三年（一九二八年） 四六歳

五月 乗馬による少年の精神教育を主旨とした日本騎道少年団を設立する。



昭和三年

昭和四年（一九二九年） 四七歳

三月 「赤い鳥」を休刊する。

昭和五年（一九三〇年） 四八歳

五月 「赤い鳥」の復刊準備を始める。この頃から綴方について全国各地へ講演に出る。

昭和六年（一九三一年） 四九歳

一月 「赤い鳥」を会員制により復刊。



上) 自宅の庭にて（昭和九年）、下) 『綴方読本』

昭和一〇年（一九三五年） 五三歳

八月 山梨県小淵沢にて『綴方読本』の執筆に取りかかる。一〇月 喘息のため病床に伏す。一二月 『綴方読本』を刊行。

昭和一一年（一九三六年）

六月二四日 病状が悪化し、入院。二七日 午前六時三〇分、肺がんのため死去。二九日 西大久保（現 東京都新宿区）の自宅で告別式が営まれる。八月 「赤い鳥」終刊。一〇月 「赤い鳥」鈴木三重吉追悼号が刊行される。

『鈴木三重吉童話全集 別巻』（文泉堂書店 一九七五年）、『赤い鳥事典』（柏書房 二〇一八年）などを参考に作成。

画像の資料は、全て広島市立中央図書館所蔵。

鈴木三重吉文学碑マップ



- ⑥ 「山彦」文学碑 238
- ⑤ 「千鳥」文学碑 237
- ④ 鈴木三重吉墓碑 236
- ③ 「赤い鳥」文学碑 235
- ② 三重吉記念碑「夢に乗る」 234
- ① 鈴木三重吉生誕の地碑 233



① 鈴木三重吉生誕の地碑

広島市中区紙屋町二丁目一番一八号

エディオン広島本店 北側壁面

三重吉は、明治一五年（一八八二年）九月二九日、広島市猿楽町八三番地の一（現 中区紙屋町二丁目一番一三号）に生まれた。碑は、昭和六三年（一九八八年）六月、鈴木三重吉「赤い鳥の会」が設置した。三重吉のレリーフは、尾道市因島出身で比治山大学教授であった彫刻家 吉田まさなみによる。



② 三重吉記念碑「夢に乗る」

広島市中区基町

広島市こども図書館・広島市こども文
化科学館前

昭和三〇年（一九五五年）五月、鈴木三重吉顕彰会（現 鈴木三重吉「赤い鳥の会」）が建立した。彫刻家 円鏝^{えんつばかっぞう}勝三によるブロンズ像で、小鳩を抱えた子どもが魚に乗っている。円鏝の出身地である尾道市御調町の円鏝記念公園には、同じく「夢に乗る」と名付けられた像があり、こちらはラッパを吹く少年が魚に乗るモチーフとなっている。



③ 「赤い鳥」文学碑

広島市中区大手町一丁目

相生橋東詰 原爆ドーム横

昭和三九年（一九六四年）六月、鈴木三重吉顕彰会（現 鈴木三重吉「赤い鳥の会」）が建立した。肩に鳩を乗せた三重吉の胸像は、本を模した台座に載せられおり、台座には「赤い鳥」の文字と三重吉が好きだった馬が彫られている。右側の少年と少女が座る台座には、三重吉の筆による「私は永久に夢を持つ。たゞ年少時のごとく、ために悩むこと浅きのみ」の碑文がある。円鏝勝三の作。



文学碑の背景には、相生橋と三重吉の母校である本川小学校が見える。

④ 鈴木三重吉墓碑

広島市中区大手町三丁目一〇番六号

長遠寺内
じょうおんじ

昭和二十三年（一九四八年）六月の三重吉十三回忌に鈴木家の菩提寺である長遠寺に建立された。墓碑の

「三重吉永眠の地
三重吉と濱の墓」
の文字は、三重吉
自身が生前に書き
残したものだ。



書「三重吉永眠の地」、「三重吉と濱の墓」
鈴木三重吉／筆（広島市立中央図書館所蔵）

⑤ 「千鳥」文学碑

広島県江田島市能美町中町

昭和三八年（一九六三年）四月、能美町により建立された。明治三八年（一九〇五年）、大学を休学した三重吉は、能美町の旧下田邸に滞在。ここで得た題材をもとに、最初の小説「千鳥」を書き上げた。碑文の「親のそばでは泣くにも泣けぬ 沖の小島へ行って泣く」は、三重吉から親友の加計正文あての葉書に書かれていたもの。



⑥ 「山彦」文学碑

広島県山県郡安芸太田町加計神田

三四一〇

よしみずえん

吉水園入口

昭和三二年（一九五七年）に建立された。

明治三九年（一九〇六年）、三重吉は加計正文を訪ねて加計家の山荘吉水園きつすいていの吉水亭に一

週間ほど滞在し、後に、加

計の自然と風土を舞台に小

説「山彦」を書いた。三重吉

が加計にあてた手紙の一文

とともに、小宮豊隆こみやとよかによる

碑文が刻まれている。



装画にあたって

表紙と「岡の家」を担当しました。作品の雰囲気が伝わってくるような絵になったと思います。私の絵が、皆さんが本に興味を持つきっかけとなってくれたら嬉しいです。



木原 結愛

私が担当した「デイモンとピシラス」は二人の関係性を表現するために、色彩に着目して製作しました。全体的に温かみを出すために、パステルカラーで統一させました。



郷 日鞠

今回私が担当した作品「一本足の兵隊」は私が幼い頃からよく読んでいたので当時のことを思い出しながら制作しました。そのこともあって、作品に親身になって制作することが出来ました。



田村芽衣

私は「かたつむり」を担当しました。人間も他の生き物と変わらない、自然界の一つであるという事を忘れない彼の純粋な素直さ、それ故に訪れた大きな迷いを感じて頂ければと思います。



辻 明利

私が担当した作品「湖水の鐘」は読んでいても鮮やかな作品でした。その鮮やかさが伝わるような扉絵になるように工夫しました。読んでいてワクワクする作品なのでぜひ読んでみて下さい。



大下 暖乃

「ぼっぼのお手帳」の絵はぼっぼちゃんが鳥かごの中から見たすずちゃんの様子です。読んでみてとても温かみがある幸せなお話だと感じたのでそれを表現できるよう色を工夫しました。とてもかわいいお話なので是非読んでみてください。



清山 ねね

今回はこのようなプロジェクトに参加できる機会をいただけてとても光栄です。「ざんげ」を最初に読んだときに感じた衝撃や感動、そしてなによりこの作品の素晴らしさを表紙で表現できていたら嬉しいです。



安藤 友海

「星の女」と「子守っ子」はどちらも儂げな雰囲気をもっている物語だと考えています。読者の皆さんに多方面からこれらの物語を楽しめてもらえたらいいなと思っています。



原 詩音

私は「ぶくぶく長々火の目小僧」を担当しました。

挿絵によって、お話がもっと面白くなっていたら嬉しいです。

そして広島の文学の振興に携われたことを誇りに思います。



辻邊 ひなた

私はこの短編集のトリである「ぶしょうもの」の扉絵を担当した者です。この話は、短編集の中では比較的明るなお話で、トリにはもってこいでしたね。私の大好きなお話です。



木村 侑加子

「少年駅伝夫」を担当して、物語の絵を描くのははじめてで苦戦しましたが、暖かい世界観やほかの物語とはまた違った雰囲気を出せたと思います。ありがとうございました。



竹寄 百奈

中表紙と「村の学校」の扉絵を担当しました。中表紙では一筆書きを意識したものにしました。村の学校では主人公の心情に注目して描きました。素敵なプロジェクトに参加させて頂きありがとうございました。



前田 悠希

本書の底本には『鈴木三重吉童話全集』第二一六・八卷（文泉堂書店、一九七五年）を用いました。

表記について

『鈴木三重吉童話集』が少しでも読みやすくなるよう、表記の現代化を図りました。その際、できるだけ原文の趣を尊重することを原則とし、次の方針を定めました。

- 一 旧仮名づかいを現代仮名づかいに改める。
- 二 「常用漢字表」に掲げられている漢字は新字体に改める。
- 三 外国語の片仮名表記は現代的な表記に改める。
- 四 踊り字は繰り返し文字に置き換える。ただし、「々」は底本どおりとする。
- 五 送り仮名は底本どおりとする。
- 六 原則として、句読点及び振り仮名は底本又は初出の表記に従う。
- 七 明らかな誤記・脱字等は改める。

「鈴木三重吉童話集」

令和六年三月二〇日 印刷発行

著者 鈴木 三重吉

装画 広島市立基町高等学校普通科創造表現コース
「鈴木三重吉童話集」制作プロジェクト

編集・発行 広島市立中央図書館

〒七三〇一〇〇一

広島市中区基町三番一号

電話 〇八二一二二二一五五四二

印刷 株式会社エル・コ